

馳上遺跡第5次 西谷地b遺跡第3次

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第210集



2014

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター



はせ がみ
馳上遺跡第5次
にし や ち
西谷地b遺跡第3次

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第210集

平成26年

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター





遺跡遠景（上空から）



A区完掘状況（上が北）



B区完掘状況（上が北）



C区完掘状況（上が西）



D区完掘状況（上が北）



竖穴住居跡 ST239 出土遺物



竖穴住居跡 ST314 出土遺物



竖穴住居跡 ST268 出土遺物



竖穴住居跡 ST732 出土遺物



川跡 SG651 出土遺物



製鉄関連遺物（鉄滓・羽口）



環状漆塗製品（遺物番号 166）

序

本書は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成 24 年 4 月 1 日財団法人から移行）が発掘調査を実施した、馳上遺跡・西谷地 b 遺跡の調査成果をまとめたものです。

馳上遺跡・西谷地 b 遺跡は、山形県南東部に位置する米沢市川井地区にあります。市には 670 か所を超える埋蔵文化財包蔵地が登録され、縄文時代から江戸時代にわたる各時代に地域の中心となるような著名な遺跡が存在します。中世では、長井氏・伊達氏の本拠として、江戸時代は上杉氏の城下町として栄えました。現在も、市内には歴史的な地名や名所が見られ、伝統を受け継ぎ、文化財を活用した整備が進められています。

この度、道路改築事業（交付金・地方道）主要地方道米沢高畠線川井 IC 工区に伴い、事前に工事予定地内に包蔵される、馳上遺跡・西谷地 b 遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、古墳時代と平安時代の竪穴住居跡をはじめ、掘立柱建物跡や河川跡が確認されました。また、中世の溝跡からは内耳土鍋ないじどなべや製鉄せいてつを行う際に使用した鞴鞴の一部が出土し、当時の集落の構成や生業など生活状況を考え得る多大な成果を得ることができました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成 26 年 3 月

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 菅野 滋

凡　例

- 1 本書は、道路改築事業（交付金・地方道）主要地方道米沢高畠線川井 IC 工区に係る「馳上遺跡第 5 次・西谷地 b 遺跡第 3 次」の発掘調査報告書である。
- 2 既刊の年報、速報会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
- 3 調査は、山形県置賜総合支庁建設部道路計画課の委託により、公益財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 本書の執筆は山木巧が担当し、三浦秋夫、小笠原正道、黒坂雅人、齊藤敏行、伊藤邦弘、須賀井新人が監修した。
- 5 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第 X 系（世界測地系）により、高さは海拔高で表す。方位は座標北を表す。本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ST…竪穴住居跡 SB…掘立柱建物跡 SD…溝跡 SK…土坑 SP…ピット
SG…河川跡 SX…性格不明遺構 RP…登録土器 RQ…登録石器

- 7 遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は各図に示した。
- 8 遺物実測図の断面黒塗りは須恵器を表す。また、拓影断面図の配置は左から外面・内面・断面の順に掲載した。
- 9 基本層序および遺構覆土の色調記載については、2008 年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」によった。

調査要項

調査委託者	山形県						
調査受託者	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター						
受託期間	平成 24 年 5 月 16 日～平成 25 年 3 月 31 日 平成 25 年 5 月 9 日～平成 26 年 3 月 31 日						
遺跡名	はせがみ 馳上遺跡 (遺構番号 202-560・202-562) にしやま 西谷地 b 遺跡 (遺構番号 202-571)						
所在地	山形県米沢市大字川井字元立・道下 かわい もとだて みちした						
現地調査	平成 24 年 5 月 30 日～11 月 16 日						
調査担当者	平成 24 年度	調査課長	齊藤敏行				
		考古主幹	伊藤邦弘				
		調査研究員	草野潤平 (調査主任)				
		調査員	山木巧				
		調査員	佐藤智幸				
整理作業							
調査担当者	平成 25 年度	整理課長	黒坂雅人				
		考古主幹	伊藤邦弘				
		調査員	山木巧 (整理主任)				
調査指導	山形県教育庁文化財保護推進課 (平成 24 年度) 山形県教育庁文化財・生涯学習課 (平成 25 年度)						
調査協力	米沢市教育委員会 山形県教育庁置賜教育事務所 米沢市上郷コミュニティセンター 米沢平野土地改良区						
業務委託	基準点測量業務 株式会社ジェックス 地形・遺構測量 (俯瞰撮影) 業務 株式会社シン技術コンサル 理化学分析業務 株式会社加速器分析研究所 パリノ・サーヴェイ株式会社						
木製品保存処理業務	株式会社吉田生物研究所						
発掘作業員	青木雅一 尾形貞一 佐藤孝一 中山正秋 丸山福彦 整理作業員 荒木恵理子	嵐田久雄 烏島七郎 佐藤秀造 長谷川力 三浦弘 武田彩	江袋吉男 小関隆信 佐藤忠明 樋口豊 山岸扶三雄 嶋田真奈美	大泉作二 斎藤功 佐藤常子 平吹孝二 山口美代子 若林佳代子	大平晶一 斎藤富男 佐藤常子 古田敬一郎 口美代子 若林佳代子	大橋勝男 坂野健二 鈴木茂 鈴木ひろ美 松浦薰 渡部昭男 渡部惇	岡野浩康 佐藤邦三 須藤英治 松沢敬一 渡部信子

(五十音順)

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の概要	1
II 遺跡の位置と環境	
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
III 調査の成果	
1 基本層序	10
2 遺構と遺物の分布	10
3 検出遺構と出土遺物	10
IV 理化学分析	
1 放射性炭素年代測定	18
2 出土木製品樹種同定	24
3 漆製品の塗膜構造調査	26
4 胎土分析	27
V 総括	84
報告書抄録	卷末
遺構全体図	付図 1・2

表

表1 駆上遺跡・西谷地b遺跡調査概要一覧	2	表10 蛍光X線分析結果	29
表2 遺跡位置図の遺跡名と時代・種別	7	表11 遺物観察表(1)	81
表3 放射性炭素年代測定分析試料一覧	18	表12 遺物観察表(2)	82
表4 歴年較正年代結果	20	表13 遺物観察表(3)	83
表5 樹種同定分析試料一覧	24	表14 製鉄関連遺物観察表	83
表6 漆塗膜分析試料一覧	26	表15 石器・土製品・石製品観察表	83
表7 蛍光X線装置・ガラスピード作成条件	27	表16 木製品観察表	83
表8 薄片観察結果	28	表17 穴住跡ST239カマドEL1袖石観察表	83
表9 蛍光X線分析定量測定条件	29		

図 版

第 1 図 遺跡上遺跡・西谷地 b 遺跡の調査概要図	3	第 29 図 遺構配置図 12・土坑 SK750・川跡 SG748	48
第 2 図 遺跡周辺の地形分類図	5	第 30 図 壁穴住居跡 ST3・268	49
第 3 図 遺跡位置図	6	第 31 図 壁穴住居跡 ST238・239 (1)	50
第 4 図 歴年校正グラフ (1)	21	第 32 図 壁穴住居跡 ST238・239 (2)	51
第 5 図 歴年校正グラフ (2)	22	第 33 図 壁穴住居跡 ST314・339	52
第 6 図 歴年校正グラフ (3)	23	第 34 図 壁穴住居跡 ST732・土坑 SK830・溝跡 SD734・740・ 741・779・800・831・832	53
第 7 図 樹種判定分析試料顕微鏡写真	25	第 35 図 据立柱建物跡 SB870	54
第 8 図 漆製品 (表面)	26	第 36 図 据立柱建物跡 SB871・872	55
第 9 図 漆製品 (裏面)	26	第 37 図 柱穴 (1) SP18～221	56
第 10 図 漆製品の断面拡大図	26	第 38 図 柱穴 (2) SP226～292	57
第 11 図 瓦物・岩石出現頻度及びCSFの粒径組成	30	第 39 図 柱穴 (3) SP295～355	58
第 12 図 砂利物・基質・孔隙の割合	30	第 40 図 柱穴 (4) SP359～397	59
第 13 図 脂土化組成散布図	31	第 41 図 柱穴 (5) SP399～485	60
第 14 図 薄片観察顕微鏡拡大図	33	第 42 図 柱穴 (6) SP487～524	61
第 15 図 基本断面位置図	34	第 43 図 柱穴 (7) SP527～568	62
第 16 図 基本断面土層図	35	第 44 図 柱穴 (8) SP569～630	63
第 17 図 調査区全図面・剖面図	36	第 45 図 柱穴 (9) SP638～699	64
第 18 図 遺構配置図 1・溝跡 SD328・332・338・348・ 柱穴 SP331・337・土坑 SK289	37	第 46 図 柱穴 (10) SP703～753・868	65
第 19 図 遺構配置図 2・溝跡 SD244・川跡 SG247・250	38	第 47 図 柱穴 (11) SP754～778・839	66
第 20 図 遺構配置図 3・土坑 SK234・236・柱穴 SP228	39	第 48 図 柱穴 (12) SP782～807	67
第 21 図 遺構配置図 4・土坑 SK141・溝跡 SD311・柱穴 SP 140・不明道構 SX82	40	第 49 図 柱穴 (13) SP808～866	68
第 22 図 遺構配置図 5・土坑 SK1・5・20・21・25・26・ 溝跡 SD4・6・13・27・32・柱穴 SP14・24	41	第 50 図 壁穴住居跡 ST3・239出土遺物	69
第 23 図 遺構配置図 6・土坑 SK663・664・669・670・柱穴 SP666・668・671 溝跡 SD680・729・不明道構 SX823	42	第 51 図 壁穴住居跡 ST239出土遺物	70
第 24 図 遺構配置図 7・土坑 SK695・溝跡 SD864・柱穴 SP 690・691・不明道構 821・822・川跡 SG651	43	第 52 図 壁穴住居跡 ST268・314・339出土遺物	71
第 25 図 遺構配置図 8・溝跡 SD726・柱穴 SP867 川跡 SG513・651	44	第 53 図 壁穴住居跡 ST732出土遺物	72
第 26 図 遺構配置図 9・土坑 SK622・640～645・川跡 SG 513・不明道構 SX650	45	第 54 図 壁穴住居跡 ST732・据立柱建物跡 SB870・土坑 SK 出土遺物	73
第 27 図 遺構配置図 10・土坑 SK344・525・539・579・580	46	第 55 図 土坑 SK・溝跡 SD 出土遺物	74
第 28 図 遺構配置図 11・土坑 SK733・736・739・747・840 849・溝跡 SD848・柱穴 SP856	47	第 56 図 溝跡 SD・川跡 SG250・513出土遺物	75

写真図版

写真図版 1	柱穴跡・西谷地 b 遺跡調査区全掘状況	写真図版 15	柱穴 SP583・588・591・598・592・593・595・596・597・599・602・613・614・620・621・626・627・629・630・638・639・659・666・667・668・671・672・673・674・675・676・677・678・679・681・685・690・691・692・696・703・868・706・707・708・709・711・712・735
写真図版 2	竪穴住居跡出土遺物・製鉄関連遺物・漆塗木製品		
写真図版 1	竪穴住居跡 ST3・238・239		621・626・627・629・630・638・639・659・666・667・668・671・672・673・674・675・676・677・678・679・681・685・690・691・692・696・703・868・706・707・708・709・711・712・735
写真図版 2	竪穴住居跡 ST238・239		
写真図版 3	竪穴住居跡 ST268・314・339		666・667・668・671・672・673・674・675・676・677・678・679・681・685・690・691・692・696・703・868・706・707・708・709・711・712・735
写真図版 4	竪穴住居跡 ST732		
写真図版 5	掘立柱建物跡 SB870・SB3260		
写真図版 6	掘立柱建物跡 SB871・SB872	写真図版 16	柱穴 SP737・738・742・743・745・790・746・751・752・753・754・755・756・757・758・759・760・762・764・766・767・768・769・770・771・772・773・774・775・776・777・778・839・782・783・784・785・786・787・788・789・791・792・793・794・795・796・797
写真図版 7	土坑 SK20・21・26・141・234・236・289・334・525・539・622・溝跡 SD27		
写真図版 8	土坑 SK579・580・640・641・642・643・645・663・664・668・669・670・695・733・736		柱穴 SP798・799・801・802・803・804・805・806・807・808・809・810・811・818・812・813・814・815・816・817・824・825・834・835・836・838・841・842・843・844・845・846・848・850・851・852・857・857・864・869
写真図版 9	土坑 SK1・5・739・747・750・840・849・溝跡 SD4・6・848	写真図版 17	
写真図版 10	溝跡 SD13・27・30・244・311・332・338・526・722・740・744・土坑 SK25・723・724・柱穴 SP14・24・川跡 SG247		柱穴 SP798・799・801・802・803・804・805・806・807・808・809・810・811・818・812・813・814・815・816・817・824・825・834・835・836・838・841・842・843・844・845・846・848・850・851・852・857・857・864・869
写真図版 11	溝跡 SD680・726・729・820・864		
写真図版 12	柱穴 SP18・19・34・35・53・61・68・71・74・92・95・127・133・136・140・178・221・226・228・231・232・264・265・266・267・272・273・274・275・276・277・278・279・280・283・285・292・295・297・296・298・299・305・306・318・325・331	写真図版 18	川跡 SG250・513・651・748
写真図版 13	柱穴 SP333・334・337・347・348・349・351・353・354・355・359・360・362・363・366・367・370・372・374・378・379・380・381・385・388・389・390・391・393・394・395・397・399・402・403・419・420・422・424・426・427・433・434・437・438・439・440・441・444・450・457・459・472・473・480	写真図版 19	不明遺構 SX82・322・650・821・822
写真図版 14	柱穴 SP483・484・485・487・488・489・491・492・495・496・510・512・514・515・516・517・519・520・522・523・524・527・528・529・530・536・538・541・542・543・544・547・548・553・555・558・559・561・562・563・564・566・568・569・570・662・572・573・574・581	写真図版 20	竪穴住居跡 ST3・239 出土遺物
		写真図版 21	竪穴住居跡 ST268・314・339 出土遺物
		写真図版 22	竪穴住居跡 ST732 出土遺物
		写真図版 23	掘立柱建物跡 SB870・土坑 SK1・20・21・141・622・623・633・641・644・733 出土遺物
		写真図版 24	溝跡 SD726・729・848 出土遺物
		写真図版 25	不明遺構 SX82・821・柱穴 SP178・325・川跡 SG250・651 出土遺物
		写真図版 26	川跡 SG651 (1) 出土遺物
		写真図版 27	川跡 SG651 (2) 出土遺物
		写真図版 28	川跡 SG651 (3) 出土遺物
		写真図版 29	遺構外出土遺物・製鉄関連遺物
		写真図版 30	石器・石製品・土製品・木製品
		写真図版 31	竪穴住居跡 ST239 カマド EL1 補石

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

馳上遺跡と西谷地 b 遺跡は、米沢市役所から東方へ約 1.5km、最上川の支流である羽黒川右岸の後背湿地上に立地している。米沢市教育委員会により馳上遺跡が 353・354 番、西谷地 b 遺跡が A352 番として市内遺跡地図に登録された周知の遺跡である。

馳上遺跡・西谷地 b 遺跡の発掘調査は、これまで山形県教育委員会、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成 24 年 4 月 1 日に財團法人から移行、以下「埋蔵文化財センター」）により実施された。各調査の概要を第 1 図・表 1 に示したので参考にされたい。

馳上遺跡は、平成 12 年から平成 25 年の間に 6 次調査まで実施された遺跡で、調査総面積は 30,000 m² 以上の広範囲にわたる。これらの調査成果から、奈良・平安時代の郡ないし郷に関わるような別院的（出先機関）集落跡と想定されている（山埋文 2002）。

馳上遺跡の北側に隣接する西谷地 b 遺跡は、今回の調査を含めて 3 次調査まで実施されている。南側では奈良・平安時代の遺構・遺物も目立つが、遺跡の中心時期は中世に帰属する。平成 21 年度の第 1 次調査では、多数の柱穴群を濠が取り囲む武家屋敷が確認され、さらに翌年の調査では屋敷地を区画する溝跡から伊達家の家紋が入った漆椀など、当時の暮らしぶりを伝える様々な遺物が発見されている。

今回の調査は、山形県による主要地方道米沢高畠線の改築事業に伴って行われた。これは東北中央自動車道へのアクセス強化を図るべく、主要地方道米沢高畠線との交差部へ追加インターチェンジを設置する事業である。

平成 21 年度に実施された試掘調査及び、過去の発掘調査の成果から、事業範囲に建物跡などが残っている可能性が確認された。これを受け、山形県置賜総合支庁建設部道路計画課、山形県教育委員会による協議が進められた。その結果、山形県置賜総合支庁から埋蔵文化財センターが委託を受け、平成 24 年度に記録保存を目的する発掘調査が行われることとなった。

発掘調査は、工期の関係から調査区が近接する馳上遺跡第 4 次調査（東北中央自動車道）と並行して実施した。

なお、埋蔵文化財センターによる馳上遺跡・西谷地 b 遺跡の調査次数は、調査実施の年度ごと、または事業別に順次割り振って呼称している。本報告書は、平成 24 年度の道路改築事業（交付金・地方道）主要地方道米沢高畠線川井 IC 工区に伴う馳上遺跡第 5 次と西谷地 b 遺跡第 3 次の合本の発掘調査報告書である。

2 調査の概要

A 発掘調査の方法

高速道路の両車線に接続するインターチェンジ建設部分 3,068 m² が調査対象で、その大部分が西谷地 b 遺跡の範囲にあたる。まず、調査範囲が散在するため、以下のように調査区の設定を行った。西谷地 b 遺跡と馳上遺跡の北端を含む A 区と B 区、馳上遺跡第 1 次調査が実施された県道 1 号線沿いの C 区、同遺跡南端に位置する D 区の計 4ヶ所に設定し、順次調査を実施した。

調査の方法は、重機を用いた表土掘削と並行して面整理による遺構検出作業を行った。遺構は、覆土の半截、または土層観察ベルトを設けて精査し、写真や平面・断面の記録作業と遺構・遺物の登録を随時行った。また、委託業務による空中写真撮影を実施している。

調査区に設定したグリッドの方角は、平面直角座標系第 X 系（世界測地系）に沿う。グリッドの名称はハイフンによって繋げられた二組の数値（例 270-415）で表した。この数値は座標値を省略したものである。つまり、南北に増減する X 軸の数値の下 3 衡と、東西に増減する Y 軸の下 3 衡の数値の組み合わせで、グリッドの位置が表されるようになっている。また、本来は X 軸、Y 軸ともに負の値であるが、ここでは自然値に置き換えて使用した。例えば、X の値が “-230250”、Y の値が “-61415” を示すグリッドならば、“250-415” と表されることになる。グリッドは 5m おきに設置しているので、隣接するグリッドが移動すると数値が “5” ずつ増減

する。グリッドが示す範囲は、X軸とY軸の交点の第一象限となる5m四方の25平方mである。本調査に属する遺構または遺物の登録については、両遺跡合わせて新たに番号を付した。遺構番号は、1～873、登録遺物番号は1～216までとなる。

B 整理作業

整理作業は、平成24年11月19日から平成25年3月31日、平成25年5月9日から平成26年3月31日の期間で実施した。出土遺物は、洗浄作業後に注記を行った。注記は遺跡名と調査年次を略称して「ハセ上5西b3」とし、出土地点や調査時に登録した番号を付した。

木製品の内、実測図を掲載したものは写真撮影を行い、平成25年度に委託による高級アルコール法、糖アルコール含浸法による保存処理と一部接合・補修を施した。

遺物の修復作業は、土器・須恵器・中近世の陶磁器に分類した後に遺構毎に接合を行った。また、周辺遺構やグリット出土遺物、前回の発掘調査時の出土遺物との接合を実施した。抽出した遺物は、実測図の作成を行い、拓本が必要なものは底部等の拓本を探った。遺物実測図はデジタルトレースを行い、拓本と組み合わせて編集を行った。遺構写真は、発掘調査時に撮影したものから報告書に掲載するものを抽出した。遺物写真は、欠損箇所を補修した後に単体や集合の写真撮影を実施し、報告書に掲載する写真を選別した。作成した遺構図・遺物実測図・遺物観察表・写真図版の編集を順次行いながら、併行して本文執筆を行った。委託業務による理化学分析は、放射性炭素年代測定、樹種同定分析、漆製品の塗膜構造分析、土器の胎土蛍光X線分析、薄片作製観察を行い、結果を第IV章に掲載している。



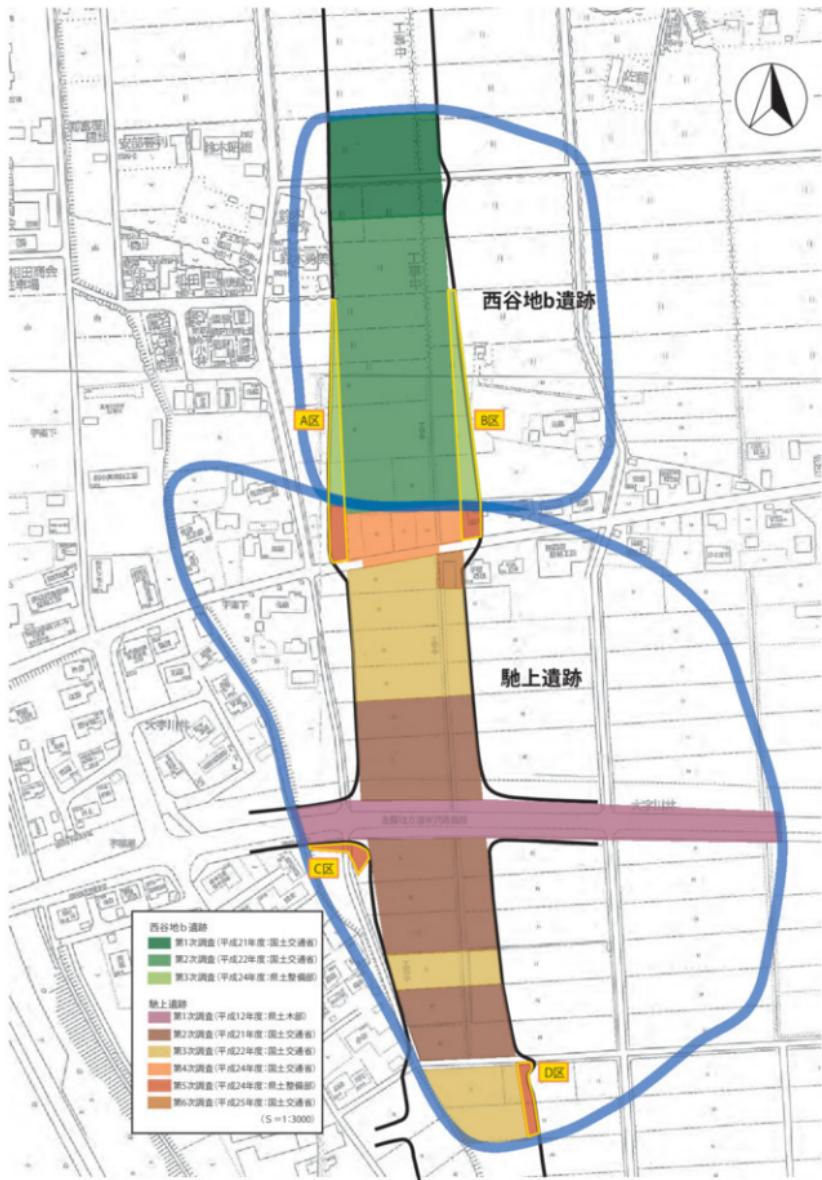
駒上遺跡第5次・西谷地b遺跡第3次の現地調査状況



駒上遺跡第5次・西谷地b遺跡第3次の整理作業状況

表1 駒上遺跡・西谷地b遺跡調査概要一覧

調査名	調査受託者	調査起因	現地発掘調査期間	調査面積	調査梗概（主な発見遺構）	文献	
駒上遺跡	遺跡分布調査	山形県教育委員会	主要地方道米沢高畠線 累計地方道路整備事業	平成10年9月24日～ 平成10年9月25日	413m ² など検出	トレンチ8ヶ所設定、土坑・柱穴・溝跡	分布調査報(26)
	第1次調査	(財) 山形県 埋蔵文化財センター	主要地方道米沢高畠線	平成12年5月10日～ 平成12年10月20日	12,000m ²	5条の河川跡に近接する奈良・平安時代の 集落跡、墨書き器や呪符木箋が出土	山理文101集
	遺跡分布調査	山形県教育委員会		平成21年3月10日～ 平成21年3月12日	330m ²	トレンチ15ヶ所設定、溝跡、土坑を検出	分布調査報36
	第2次調査	(財) 山形県 埋蔵文化財センター	東北中央自動車道 (米沢～米沢北側)	平成21年5月12日～ 平成21年11月20日	11,750m ²	奈良・平安時代の住居跡、振立柱建物跡、 墨書き器等多数出土	山理文年報 平成21年
	第3次調査	改築事業		平成22年5月14日～ 平成22年11月30日	8,800m ²	奈良・平安時代の住居跡、振立柱建 物跡等多数出土	山理文年報 平成22年
	第4次調査			平成24年5月30日～ 平成24年11月16日	2,150m ²	奈良・平安時代の窓穴住居跡、振立柱建 物跡を検出、住居跡から土器群が出土、 土師器が出土	山理文年報 平成24年
西谷地b遺跡	第5次調査	(公財) 山形県 埋蔵文化財センター	主要地方道 米沢高畠線川井IC工区	平成24年5月30日～ 平成24年11月16日	1,289m ²	奈良・平安時代の窓穴住居跡、須恵器、 土師器が出土	本書
	第6次調査		東北中央自動車道(米沢～米沢北側) 改築事業	平成25年10月10日～ 平成25年11月29日	500m ²	奈良・平安時代の時代窓穴住居跡を検出、 住居跡から須恵器群が出土	施工遺跡第6次 発掘調査実況説明会資料
	遺跡分布調査	山形県教育委員会	東北中央自動車道 (米沢～米沢北側)	平成21年3月10日～ 平成21年3月12日	189m ² を検出	トレンチ10ヶ所設定、溝跡、土坑、柱穴	分布調査報(36)
西谷地b遺跡	第1次調査	(財) 山形県 埋蔵文化財センター	改築事業	平成21年7月1日～ 平成21年11月20日	3,250m ²	中世の屋敷跡、廐室や廻転闇通遺物が出 土	山理文年報 平成21年
	第2次調査			平成22年5月13日～ 平成22年11月30日	12,240m ²	奈良・平安時代の窓穴住居跡、中世の区 画溝、柱穴を検出	山理文年報 平成22年
	第3次調査	(公財) 山形県 埋蔵文化財センター	主要地方道 米沢高畠線川井IC工区	平成24年5月30日～ 平成24年11月16日	1,779m ²	古墳時代・平安時代の窓穴住居跡や振立 柱建物跡、中世の区画溝の一部を検出	本書



第1図 駆上遺跡・西谷地b遺跡の調査板要図

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

馳上遺跡・西谷地 b 遺跡が所在する米沢市は、山形県の最南端に位置する。市域は、東西約 32 km、南北約 28 km、面積約 548.7 km²を測る。山地・火山地が 74.3 %と構成の大半を占め、丘陵地 5.7%、台地・段丘 7.8%、低地が 12.2% となっている。東方は、豪土山・駒ヶ岳、栗子山といった奥羽山系の嶺々に限られ、磐梯朝日国立公園の一角をなす吾妻の山塊が南を画している。東南に聳え立つ山々は福島県との境界ともなっている。米沢市はこれらの山々と西部に広がる低平な玉庭丘陵と笛野山地に囲まれた典型的な盆地である。

したがって、気候は寒暖の差が大きい盆地性内陸型である。年間降水量は少ないが、冬期は降雪量が多く、市街地でも積雪量が 1 m を越える豪雪地帯である。また、内陸盆地の中では平均風速が最も強い地域である。

奥羽山系や吾妻山系に源を発する鬼面川・松川（最上川）・羽黒川・天王川（梓川）の河川は、氾濫原を形成しつつ北流している。これら諸河川は、やがて合流し最上川となって県内を貫き、県土を潤しながら日本海へと注ぐ。米沢盆地の南端から中央は、各々の河川により形成された緩やかな扇状地で、低地を占める割合が高い。土地利用状況は、農地 10.5%・森林 77.1%・宅地 3%・その他 9.4% である。農地開拓は、藩政時代やそれに先立つ直江兼続治世の際に進められ、沖積低地や緩傾斜の扇状地面は水田として開墾され、自然堤防や急傾斜の扇状地面上の台地は畠地などに利用される。

馳上遺跡・西谷地 b 遺跡は、市街地から東へ約 1.5 km 離れた大字川井地区に位置する。遺跡の西側を北流する羽黒川が形成した河岸段丘に立地し、地形分類上は羽黒川右岸の後背湿地にあたる（第 2 図）。表層地質は未固結の礫及び砂、泥からなる冲積堆積物である。耕作土壌は礫質灰色低地土に属し、非固結堆積岩を母材としている。堆積様式は水積で 30 ~ 60cm 以内に礫層または砂層が含まれる。土質は一般的に粘質または砂礫質である。

2 歴史的環境

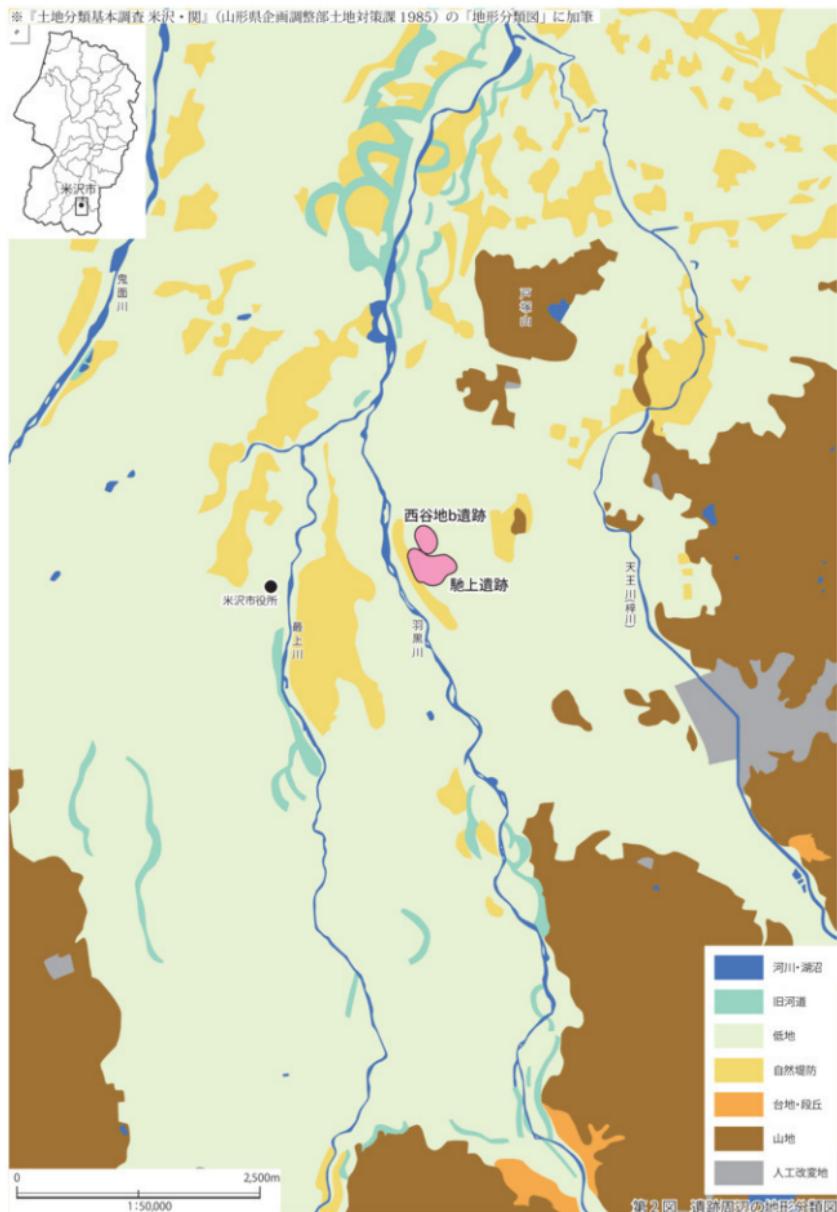
米沢市では、様々な事業に関連して数多くの遺跡の調査が実施されている。その結果、現在までに 670 か所を超える遺跡の存在が確認されている。（第 3 図）

縄文時代の遺跡としては、国指定の史跡「一ノ坂遺跡」があげられる。市街地の西方約 2 km の笛野山西端の微高地に位置し、縄文時代前期初頭の遺跡とされている。なかでも国内最長の大型竪穴住居跡は、石器製作を専業とする石器工房跡と推定されている。

弥生時代の遺跡は極めて少ない。市内で確認されるのはわずか 4 か所である。清水北 C 遺跡は、弥生時代の墓制の一つである再葬墓の集團墓地跡として大小 25 基の土壙墓が確認されている。さらに、同遺跡出土の土器には羽痕が認められることで注目される。

古墳時代に入ると、丘陵や山麓に大小の古墳が多く築造される。万世町の比丘尼平遺跡では、県内初出となる古墳時代前期の方形周溝墓が 3 基、近接する八幡堂遺跡においても 5 基確認されている。大字上浅川にある戸塚山一帯は、山頂や山麓を中心に総数 193 基の古墳が群集する古墳群である。前方後円墳や帆立貝式古墳・横穴式石室墳が各所に存在し、5 世紀後半から 8 世紀の末期古墳まで長期間にわたり造営されている。特に戸塚山 137 号墳（帆立式古墳）の箱式石棺からは、この地域の首長と推測される女性の人骨が発見されている。置賜地方は、古墳築造が全国的に終焉する 8 世紀代にも牛森古墳などの横穴式石室墳が築造され続けている。

奈良・平安時代の遺跡は、平野部の主要な河川に沿って広範囲に分布する。置賜地方は「日本書紀」持統天皇 3 (689) 年に「陸奥國優曇郡」の記述が史料的に初見である。和銅 5 (712) 年には、「陸奥國の記述の中に「置賜郡」の名が見られ、陸奥國から分割して「出羽國置賜郡」になったと解釈されている。馳上遺跡と同時期の遺跡として、西町田下遺跡、大浦遺跡、笛原遺跡がある。西町田下遺跡では、幅 6 m の道路跡と円面硯が 10 個体出土し、官衙的な性格が想定されている。大浦遺跡は規



II 遺跡の位置と環境

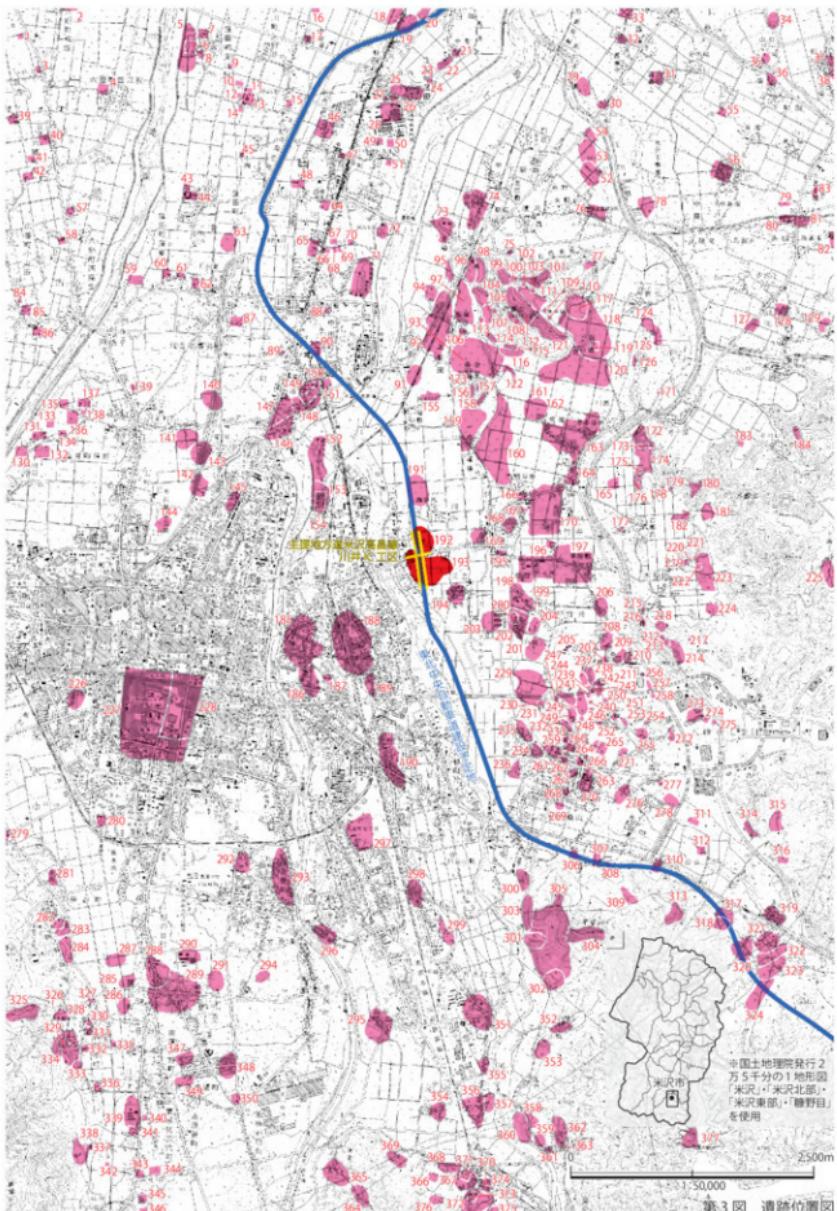


図3 図 遺跡位置図

表2 遺跡位置図の遺跡名と時代・種別

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	鍛冶作館	中世	城館跡	60	渡北館	中世	城館跡	117	上浅川a	繩文(中期・後期)	
2	館之在家館	中世	城館跡	61	杉之崎下館	中世	城館跡		古墳(中開)・奈良	集落跡・官衙・墓跡	
3	馬場田館	中世	城館跡	62	大西	平安・中世	古墳・集落跡	118	上浅川b	繩文(中期)	
4	屋敷田館B	中世	城館跡	63	謙倉上道跡	古墳			奈良・中世	集落跡	
5	東江股	繩文(晚期)	集落跡	64	唐屋敷	中世	城館跡	119	上浅川館	中世	城館跡
6	台之南館	中世	城館跡	65	岸元田屋敷	中世	城館跡	120	秋の森	奈良・中世	集落跡
7	四郎右門館	中世	城館跡	66	森田館町館	中世	城館跡	121	萩の森塚群	中世	塚群
8	北ノ屋敷	中世	城館跡	67	舟入田屋敷	中世	城館跡	122	薬師山古墳群	古墳(終末期)	群集墳
9	東江股脇の内館	中世	城館跡	68	谷地在家館	中世	城館跡	123	森合土壇	中世	土壇
10	大堤廻館	中世	城館跡	69	下ノ在家館	中世	城館跡	124	長手	平安・中世	集落跡
11	井戸ノ丸館	中世	城館跡	70	川崎屋敷	中世	城館跡	125	天神裏古墳	繩文・古墳	古墳
12	早稲田擬合館	中世	城館跡	71	笹原・弥生・平安・中世	官衙・集落跡		126	天神裏塚群	中世	塚群
13	桐井屋敷	中世	城館跡	72	保呂羽堂	奈良・平安	集落跡	127	佐沢池ヶ森	繩文	散布地
14	矢野目前田館	中世	城館跡	73	金ヶ崎a	奈良・平安	集落跡	128	佐沢池	中世	城館跡
15	賓頭塚古墳	古墳(前期)	古墳	74	三号日館	中世	城館跡	129	清水川	繩文	散布地
16	人生屋敷	中世	城館跡	75	小山塚	中世	塚	130	塩野西上屋敷	中世	城館跡
17	平在家館	中世	城館跡	76	沼脇学園東	中世	集落跡	131	祓之館	中世	城館跡
18	館屋敷	中世	(城館跡)	77	山崎古墳群	古墳(後期)	群集墳	132	馬館	中世	城館跡
19	南原	古墳・平安	集落跡	78	下新田館	中世	城館跡	133	塩野古屋敷	中世	城館跡
20	堂ノ下	奈良・平安	集落跡	79	斎藤	繩文(中期)	包蔵地	134	塩野新館前館	中世	城館跡
21	中里屋敷	中世	城館跡	80	海道下	散布地		135	塩野西中塚	中世	城館跡
22	中里	中世	集落跡	81	上光田A	繩文(中期)	包蔵地	136	塩野館	中世	城館跡
23	窪田古墳	古墳(後期)	古墳	82	上光田C	奈良・平安	散布地	137	川辺館	中世	城館跡
24	外ノ内塚群	中世	土壇	83	石ヶ森山	繩文(中・後期)	散布地	138	塩野上屋敷東館	中世	城館跡
25	外ノ内	繩文(中期・後期)	集落跡	84	館田前館	中世	城館跡	139	塩野坊中屋敷	中世	城館跡
26	窪田下前田館	中世	城館跡	85	小菅館ノ在家館a	中世	城館跡	140	西町下田	奈良・平安	集落跡
27	八幡塚古墳	古墳(中期)	古墳	86	小菅館ノ在家館b	中世	城館跡	141	上町	繩文(中期)	集落跡
28	窪田荒館	中世	城館跡	87	塩野中屋敷	中世	城館跡	142	荒館	繩文・平安	集落跡
29	五輪塚A	繩文(中期)	散布地	88	中屋敷	中世	城館跡	143	荒町2	繩文・奈良・中世	城館跡・集落跡
30	五輪塚B	繩文(後期・晩期)	散布地	89	街道下	中世・近世	集落跡	144	赤町	繩文	集落跡
31	露藤上館	中世	城館跡	90	外ノ内館	中世	城館跡	145	春日町	繩文	集落跡
32	露藤下館	中世	城館跡	91	上新田a	繩文(前期・後期)	古墳	146	大浦a	繩文(中期)	集落跡
33	露藤西屋敷	中世・近世					古墳(後期)・集落跡・船跡	147	大浦b	奈良・平安	官衙・集落跡・城館跡
34	圓口	平安	散布地	92	上新田b	奈良・中世	集落跡	148	大浦c	奈良・中世	官衙・集落跡
35	二ツ橋A	繩文(中期)	包蔵地	93	上新田c	奈良・中世	集落跡	149	大浦d	中世	集落跡・城館跡
36	二ツ橋B	(平安)	散布地	94	中川原館	中世	城館跡	150	大浦a	中世	城館跡
37	新町	繩文	散布地	95	中川原	奈良・平安	集落跡	151	大浦b	中世	集落跡
38	新町窓跡	奈良・平安	窓跡	96	戸塚山幼稚園a	繩文(前期)	集落跡	152	大浦c	中世	集落跡
39	一津館	中世	城館跡	97	戸塚山幼稚園b	繩文(前期)	集落跡	153	大浦d	中世	城館跡
40	六郷元館	中世	城館跡	98	金ヶ崎古墳群	古墳(終末期)	群集墳	154	大浦a	中世	集落跡
41	一ノ坪館	中世	城館跡	99	堤入西塚群	中世	塚群	155	大浦b	中世	集落跡
42	小山田下在家館	中世	城館跡	100	戸塚山北古墳	古墳(前期)	古墳	156	大木橋館	中世	城館跡
43	腰巻館	中世	城館跡	101	戸塚山北古墳	古墳(中期)	古墳	157	大木橋b	中世	集落跡
44	田中屋敷	中世	城館跡	102	戸塚川堤a	古墳群	古墳(終末期)	158	大木橋c	中世	集落跡
45	立屋敷	中世	城館跡	103	上浅川堤a	古墳群	古墳(終末期)	159	熊野鳥	奈良・中世	集落跡
46	窪田館	中世	城館跡	104	阪塚北古墳群	古墳(終末期)	群集墳	160	熊野鳥	奈良・中世	集落跡
47	窪田屋敷裏館	中世	城館跡	105	阪塚南古墳群	古墳(終末期)	群集墳	161	堂田古墳	古墳	群集墳
48	窪田新館	中世	城館跡	106	阪塚南古墳群	古墳(終末期)	群集墳	162	堂田	奈良・中世	集落跡
49	小寺屋敷	中世	城館跡	107	戸塚山石切跡	中世	城館跡	163	荒屋	奈良・中世	集落跡
50	川原屋敷	中世	城館跡	108	山頂古墳群	古墳(中期・後期)	群集墳	164	中谷地a	平安・中世	集落跡
51	御行屋敷	中世	城館跡	109	堤入羅石塚a	古墳(中期)	碎石加工場	165	中谷地b	奈良・平安	集落跡
52	下新田a	平安	集落跡	110	堤入羅石塚b	古墳(中期)	碎石加工場	166	川井平飼北	中世・近世	城館跡
53	下新田b	繩文・奈良・平安	集落跡	111	堤入庭寺	中世	寺院	167	川井平飼南	中世・近世	城館跡
54	下新田c	奈良・平安	集落跡	112	堤入東塚群	中世	塚群	168	川井館	中世	城館跡
55	嘉願屋敷	近世	屋敷跡	113	森合館	中世	城館跡	169	上野	奈良	集落跡
56	中島館	中世	城館跡	114	森合西古墳群	古墳(終末期)	古墳	170	中の目	奈良・中世	集落跡
57	同心屋敷	中世	城館跡	115	森合東古墳群	古墳(終末期)	群集墳				
58	荒屋敷	中世	城館跡	116	森合	繩文・奈良	集落跡				
59	天神前中館	中世	城館跡	117							

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
171	天満神社	中世	経塚	226	城西1丁目	礎文(前期)	集落跡	278	原ノ上	礎文	集落跡
172	長手	中世	城館跡	227	米沢城跡	中世・江戸	城館跡・集落跡	279	稻神社	礎文	集落跡
173	長手古墳群	古墳(終末期)	群集墳	228	米沢城東二の丸跡	中世・江戸	城館跡・集落跡	280	古志田東	礎文(前期)・平安・中世	豪族屋敷・集落跡・城館跡
174	長手居館	礎文・中世	集落跡・城館跡					281	西野町赤坂館	中世	城館跡
175	中谷地北塚	中世	塚群	229	比丘尼平	礎文(前期・中期・晚期)	集落跡	282	八方屋道北館	中世	城館跡
176	中谷地南塚	中世	塚群		古墳(前期)			283	西野町	礎文	集落跡
177	古峰神社館	中世	城館跡	230	比丘尼平廢寺	中世	寺院	284	古志田館	中世	城館跡
178	古越山1号墳	古墳		231	立森山塚a	中世	塚	285	一本橋a	礎文(中期・後期)	集落跡
179	古越山2号墳	古墳		232	立森山塚b	中世	城館跡	286	一本橋b	礎文(中期・後期)	集落跡
180	古郷部館	中世	城館跡	233	立森山館	中世	城館跡	287	一本橋c	礎文(中期・後期)	集落跡
181	古郷部	礎文	集落跡	234	金谷a	礎文	集落跡	288	大塚山	礎文(前期・中期)	集落跡
182	兼ヶ島館	中世	城館跡	235	金谷b	礎文	集落跡	289	大塚A	礎文(前期・後期)	集落跡
183	谷ノ口館	中世	城館跡	236	金谷館	中世	城館跡	290	大塚b	礎文	散布地
184	谷ノ口山城	中世	城館跡	237	八幡原a	礎文(早期・中期)	集落跡	291	大塚c	礎文(前期・中期)	集落跡
185	花沢a	礎文(前期・後期)・近世	集落跡・墓跡	238	八幡原b	礎文(早期・中期・近世)	集落跡・墓跡	292	太田	礎文(中期)	集落跡
186	花沢b	礎文	集落跡	239	八幡原c	礎文(前期)	散布地	293	台ノ上	礎文(前期・中期)	集落跡
187	佐氏廬館	中世	城館跡	240	清水北a	礎文	散布地	294	芳泉塚	中世	塚
188	台坂	中世	集落跡	241	清水北b	礎文(早期・中期・後期)	集落跡	295	下原a	礎文(前期)	集落跡
189	下平沢a	礎文	集落跡	242	清水北c	礎文(早期・後期)・共生	集落跡	296	下原b	礎文	集落跡
190	下平沢b	礎文	集落跡				集落跡・墓跡	297	通町	礎文(中期)	集落跡
191	西谷地a	奈良・平安	集落跡	243	清水北d	礎文(前期)・共生	集落跡	298	東大通一丁目	礎文・平安	集落跡
192	西谷地b	古墳~中世	集落跡	244	慶治清水a	礎文(早期・中期・後期)	集落跡	299	第五中学校裏	礎文	集落跡
193	馳上(a・b)	奈良・平安	集落跡				集落跡	300	早坂山a	礎文・中世	集落跡
194	元立	奈良・平安	集落跡	245	慶治清水b	礎文(早期・中期・後期)	集落跡	301	早坂山b	礎文・中世	集落跡
195	羽黒神社館	中世	集落跡				集落跡	302	早坂山c	礎文	集落跡
196	東裏敷館	古墳(前期)・奈良~中世	城館跡・集落跡	246	慶治清水c	礎文	散布地	303	早坂山d	礎文	集落跡
197	經塚山館	礎文・平安・中世	集落跡	247	山影	礎文	集落跡	304	早坂山館	中世	城館跡
198	野原	礎文	集落跡	248	耳取a	礎文(前期)	集落跡	305	難城	中世	城館跡
199	野原塚	中世	塚	249	耳取b	礎文(早期・前中期)・平安	集落跡	306	下屋敷	礎文	集落跡
200	上谷地館	中世	城館跡	250	燒山下	礎文	集落跡	307	堤屋敷	礎文・中世	集落跡
201	上谷地a	中世	集落跡	251	中燒山下	古墳(終末期)	散布地	308	山下	礎文	集落跡
202	上谷地b	礎文(前期・後期)	集落跡	252	空森塚	礎文	集落跡	309	普門寺	礎文	集落跡
203	上谷地c	奈良~中世	集落跡	253	牛森山古墳	中世	塚群	310	稱荷山館	中世	城館跡
204	上谷地d	礎文(前期・後期)	集落跡	254	牛森山古墳	古墳(終末期)	古墳	311	八幡原上壇群	礎文(後期)・中世	集落跡・土壙
205	河川土壤	中世	土壤	255	牛森山南下	平安~中世	集落跡	312	桝山館	中世	城館跡
206	玉ノ木a	奈良・平安	集落跡	256	長坂	礎文(後期)	散布地	313	万世館山城	中世	城館跡
207	玉ノ木b	奈良・平安	集落跡	257	辻の堂a	近世	散布地	314	松林寺	中世	城館跡
208	竹井	礎文(晚期)・奈良・平安	集落跡	258	辻の堂b	近世	散布地	315	松林寺	礎文(前期)	集落跡
209	竹井塚a	礎文(前期・後期)	古墳(前期)	259	八幡堂	礎文(前期・後期・晚期)	集落跡	316	松林寺c	礎文(前期)	集落跡
							集落跡	317	町在家館	中世	城館跡
210	竹井塚b	礎文(前期・後期)	集落跡	260	前野	礎文	散布地	318	町在家	散布地?	
								319	上羅	礎文(中期・後期)	集落跡
211	竹井塚c	中世	土壤	261	我妻跡	中世~近世	城館跡	320	足利寺	礎文(早期・中期)	集落跡
				262	二タ保a	礎文(早期・晚期)	集落跡				
				263	二タ保b	礎文(後期)	集落跡				
212	横山a	礎文(早期・後期)・奈良	集落跡	264	下原田	礎文	集落跡	321	横山a	礎文	集落跡
213	横山b	奈良・平安	集落跡	265	原田館	中世	城館跡	322	横山b	礎文	集落跡
214	横山c	礎文(晚期)・奈良・平安	集落跡	266	東原塚	礎文	集落跡	323	横山c	礎文(中期)	集落跡
215	木和田塚a	中世	塚群	267	稀の木	礎文(早期・晚期)	集落跡	324	横山d	礎文(前期)	集落跡
216	木和田塚b	中世	塚群	268	水神前	礎文(前期)	集落跡	325	西野山館	中世	城館跡
217	木和田塚c	中世	塚群	269	小谷地	礎文	散布地	326	西野ナヤシ跡	奈良・平安~(戰国)?	城跡
218	木和田館	中世	城館跡	270	大清水	礎文(早期・晚期)	集落跡	327	麓上在家館	中世	城館跡
219	木和田中屋敷館	中世	城館跡	271	十文字西	中世	集落跡	328	西野觀音堂西	礎文	集落跡
220	木和田古墳	古墳(終末期)	古墳	272	牛山	礎文	集落跡	329	西野館ノ内館a	中世	城館跡
221	木和田窪跡	奈良	古窪跡	273	縄原b	礎文	集落跡	330	西野館ノ内館b	中世	城館跡
222	木和田月ノ原館	中世	城館跡	274	縄原前川原	中世	散布地	331	尾在家館	中世	城館跡
223	木和田	礎文	集落跡	275	牛森古墳	古墳(終末期)	古墳	332	館ノ内a	礎文(中期・後期)	集落跡
224	馬ノ越道館	中世	城館跡	276	牛森	礎文	集落跡	333	館ノ内b	礎文(前期初頭・中期後葉・後期初頭)	集落跡
225	上海上	奈良・平安	集落跡	277	井ノ井	礎文・中世	集落跡				

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
334	館内 c	圓文・平安	集落跡	349	横幅	圓文・中世	集落跡	364	大海老ヶ沢 a	圓文（後期）	集落跡
335	廟葬館	中世	城館跡	350	横幅廻寺	中世	寺院跡	365	大海老ヶ沢 b	圓文	集落跡
336	高山裏	圓文	集落跡	351	松原	圓文（前期・中期）	集落跡	366	閑根中層敷（西館）	中世	城館跡
337	長次郎屋敷	中世	城館跡	352	小峠	圓文	集落跡	367	坊中 a	圓文	集落跡
338	長泉寺	圓文	集落跡	353	丸山日景館	中世	城館跡	368	坊中 b	圓文・中世	集落跡
339	南原中学校	圓文	集落跡	354	中島	圓文	集落跡	369	坊中 c	圓文	集落跡
340	猪苗代新屋敷	中世	城館跡	355	三沢 a	圓文（前期）	集落跡	370	坊中前館	中世	城館跡
341	先達在家館	中世	城館跡	356	三沢 b	圓文	集落跡	371	喜多（北）館	中世	城館跡
342	世野屋敷田館	中世	城館跡	357	白旗	圓文（早期～中期）	集落跡	372	普門院	圓文（早期～晚期）	集落跡
343	夏屋敷	中世	城館跡	358	山崎 a	圓文	集落跡	373	普門院館	中世	城館跡
344	十郎在家館	中世	城館跡	359	山崎 b	圓文	集落跡	374	普門院北	圓文（中期）	集落跡
345	大坊東館	中世	城館跡	360	山崎 c	圓文	集落跡	375	普門院東	圓文（中期～晚期）	集落跡
346	上道弓館	中世	城館跡	361	三沢前田下館	中世	城館跡	376	普門院西	圓文（中期）	集落跡
347	東裏町	平安	集落跡	362	三沢館	中世	城館跡	377	前万沢	圓文	集落跡
348	石垣町	中世	散布地	363	三沢京塚	中世	絆跡				

則的な配置の建物群や貝具注跡の漆紙文書、布目瓦の出土から8世紀後半から9世紀前半の置賜郡断跡と推定されている。笠原遺跡では木簡や墨書き土器、円面鏡が出土し、古代置賜七郷の一つ「広瀬郷」との見解もある。

11世紀、摂関政治の最盛期には、米沢は成島荘として摂関家の莊園となっている。鎌倉期の武将大江広元の次男時広が「長井庄」の地頭として、暦仁元（1238）年、米沢に居城を構えたと伝えられる。大江氏は長井氏を称し、八代約200年に及ぶ支配を受けたが、天授6（1380）年に伊達宗遠の侵攻によって長井氏は置賜を追われ、置賜は伊達領となった。以後、置賜支配の中心は高畠であったが、15代伊達晴宗が当主となり米沢に入部後、その中心が移った。その後は輝宗・政宗と続いたが、天文19（1591）年に豊臣秀吉により政宗が岩出山へ移封となり、210年にわたる伊達氏の治世は終わりを告げる。1590年の奥州仕置において米沢は備生氏の支配下に置かれ、農村は文禄3（1594）年検地によって年貢の村請制のもとに共同体として編成され、武家の支配する近世領知制社会の基礎とされた。このとき、村名と村域が画定し、現在は大字名として存続している。1598年、上杉氏が120万石の大大名として会津に移封され、米沢は家老直江兼続の治めるところとなる。1601年閑ヶ原の敗戦で上杉氏は本拠を会津から米沢に移し、ここに米沢藩30万石が成立した。

当該期は主に城館跡が多数を占める。最も古い館跡として、12世紀代と推定される木和田遺跡がある。ほかに鎌倉期の堂森山館跡や南北朝時代に築城されたとされる万世館山城跡、早坂山館跡、戦国期に築城された鷺城跡などが旧街道上に分布している。

荒川2遺跡、大浦C遺跡、上浅川遺跡、東屋敷館跡、我妻館跡では、方形館とその周りを巡る溝跡が確認されている。荒川2遺跡、大浦C遺跡では、伊達家の三引両がある漆器が出土し、伊達家との関連が想定される。

堤屋敷遺跡は、鎌倉時代と室町時代後半の二時期を主体とする遺構群が確認される。室町時代後期では、内耳土鍋の焼成遺構が認められ、城館跡に付随した根小屋としての性格や土師質土器・瓦質土器の生産集落跡と推測されている。同地区内の下屋敷遺跡は、平安時代の河川跡と中世の井戸跡3基が確認される。

近世は、米沢藩上杉家の支配のもと推移していく。当初30万石であった石高は、寛永15・16（1638・39）年の総検地には実高約51万石を記録したとある。これは、重臣直江兼続による積極的な新田開発が実を結んだ出来事で、米沢藩政の基礎を確立するに大きく貢献している。ところが、寛文4（1664）年、表高15万石に減封となる。それでも家臣の召し放ちは知行取て約1割、全体でも約2割に止まり、領知高の割に多数の家臣団を擁し続け、藩財政や家臣の生活の窮乏化に拍車がかかった。明和4（1767）年、恒常的な財政難に苦しむ米沢藩に、日向高鍋藩主秋月種美の二男が9代藩主として迎え入れられた。上杉鷹山である。鷹山による改革により、殖産興業・農村復興・借用金の完済がなされた。そして、戊辰戦争では仙台藩とともに奥羽越列藩同盟の盟主として新政府と対立し、のち降伏。明治4（1871）年の廢藩置県にともない置賤県となり、明治9年には山形県に合併、明治22年（1889）年市制が施行され現在に至っている。

III 調査の成果

1 基本層序

馳上遺跡・西谷地 b 遺跡は、西域を北流する羽黒川の影響を受け、発達した自然堤防と後背湿地に形成されている。調査区における遺構検出面は、相対的に北側へと徐々に低くなる傾向が窺える。遺跡の基本層序は各区において観察し、表土から地山までの層序は、地山質土と判断したIV・V層に至るまでの次の3層に分かれる(第15・16図)。

I層は表土でA～B区では灰黄褐色を基調としたシルト質土、C～D区では黒褐色もしくは褐色を基調とする粘土質のシルトとなる。耕地整理などの際に元表土が盛土されたと判断できる。II層は旧耕土と考えられる粘質土で、地山をブロック状に含む。C区のII層直下では、黒褐色の堆積土が約10cm程度の層厚で認められ、人為的な整地層の可能性がある。III層は概ね遺構検出面である。場所によりa・bに細分されるが、IIIa層の遺物包含層は、各調査区より厚薄の別がある。特に検出面の標高が高いA区・B区の北側や中央域では、包含層が削平されて表土直下が地山面という区域も認められた。したがってこれら区域の竪穴住居跡の中には、壁面が存在せずに検出面で住居床面となる事例も存在する。

遺構検出面以下の地山層IV・V層の堆積状況については、土層観察から各区の層厚に差があるが、主に砂礫や粗砂層から形成される土壌は、この範囲が地形的に河川の氾濫原や後背湿地であったこと、平坦な土地ではなく起伏にとんだ地形であったことを裏付けるものである。

2 遺構と遺物の分布

遺構の全体図を第18～29図に掲載し、各図の割付を第17図に示した。各図を統合した図は、巻末に付図として収納している。遺構の配置、遺構の番号等はこれらの図を参照されたい。遺構の分布は、調査区の面積により左右されるが、A・B区の西谷地 b 遺跡の範囲に濃い傾向がある。検出された遺構の大半は、西谷地 b 遺跡第1・2次発掘調査時と同じく、小型の柱穴で多数検

出されている。B区中央部から南域で検出された柱穴群も同様に中世以降の建物に属する柱穴であるが、建物として組み合うものは明示しがたい。C区は100m程の狭小な調査区であるが、遺構の密度と出土遺物は比較的多い傾向にある。馳上遺跡第1次発掘調査区と照合すると、竪穴住居跡が複数重複する地点にあたる。遺構検出面直上には、整地の際に遺構面が削平されて遺物が巻き上げられたと考えられる層厚が確認される。一方で、馳上遺跡の南東側にあたるD区は、第3次発掘調査の8・9区の東側に隣接する範囲である。川跡や小柱穴が数基確認される程度で、遺構や遺物共に極端に少ない傾向である。本調査の遺物は、馳上遺跡・西谷地 b 遺跡を合わせ整理箱数にして15箱出土した。平安時代・中世に属する土器類が主体を占める。他に土製品・石器・石製品・木製品がある。

3 検出遺構と出土遺物

A 竪穴住居跡

本調査で確認された竪穴住居跡は7棟を数える。西谷地 b 遺跡にあたるA区のST3、238・239、268、314・339、馳上遺跡西側に位置するC区ST732である。以下、検出順に従って位置・規模・カマドほか施設・出土遺物の概要を列記していく。

竪穴住居跡 ST3 (第30図、第50図1・2)

A区南東端300-410グリッドに位置する。大半が東側の調査区外に延びる。15cm程の層厚を測る住居の掘り込みと南壁にカマドが確認される。南へと延びる煙道部と焚口部の炭化物の広がりが検出された。カマドを基軸とする主軸方向はS-3°-E、平面形と規模は南北約2.2m、東西3.0m以上の方形である。床面構築上による硬化面は、断面観察で3層と捉えたが判然としない。

出土遺物はカマド覆土から1・2が出土する。1は底部を欠く須恵器環、2はロクロ成形の土師器環である。内面に丁寧なヘラミガキ調整と黒色処理を施す。底部の切り離しは不明瞭だが、回転ヘラ切り後に高台を貼付け、

ナデ調整で磨消している。検出範囲が狭小で判然としないが、カマドを有することも勘案すると平安時代前半段階に帰属すると推察される。位置関係から馳上遺跡第4次SX7502との関係性が検討されよう。

豎穴住居跡 ST238・239 (第31・32図、第50・51・613～17)

A区中央部の225-415グリッドに位置する。調査段階で壁面が二重に存在する要因から、二棟の住居跡が重複したと捉えた。住居跡ST238は東西4.9m、南北3.6mの方形プランで、南半域がST239と重複している。遺構上面が削平を受け、住居掘方埋土がわずかに遺存する状態である。南壁では住居外南側に細長く伸び出す煙道部が検出されるが、遺物は確認されない。

後に構築された住居跡ST239は東西辺3.6m、南北辺3.0m規模の方形プランをなし、主軸方向はS-9°-Wである。覆土は30cm程の層厚で、黒褐色もしくは灰黄色を基調とするシルト質土が凸レンズ状に堆積する。3層は炭化物を多く包含する薄層で、住居の焼失部材を作り堆積層と推察される。それ以後の7層までは炭化物や遺物が一括で出土する住居床面、カマド焚口部の覆土である。壁高は約20cmを測り、壁面が垂直に立ち上がる。住居内から柱穴EP1～3の3基が検出されたが、住居柱穴とは特定できない。カマドは南壁の東寄りにEL1、南壁中央にEL2が構築されている。EL1は袖部、燃焼部、煙道の一部が検出され、袖部にはカマドの構築材に用いた径30cm程の円鑓が遺存する。EL2では燃焼部と煙道の一部が確認されるが、袖部が削平されている断面状況から、EL2からEL1に付替えた流れが確認できる。

遺物は、住居床面上やカマドEL1の周囲に遺存する須恵器や土師器が散見され、復元・図化し得た出土土器類は、3～17の15点、床面上出土の螺旋石器161・162の2点である。出土状況は、EL1で集中する傾向が指摘できる。床面上土の須恵器無台坏3は、底部回転ヘラ切り後に手持ちヘラケズリ調整を施す。また、住居焼失時に際して器面全体に被熱痕がみられる。他に内黒の坏や須恵器底片がある。須恵器底片の5・6は外面に平行する叩き目、内面に当て痕がある。カマド下燃焼部内の12～15の土師器底は、底部を上にする逆位で入れ子状で検出された。カマドまたは住居廃棄の祭祀儀礼の

可能性も指摘される。カマド周辺では土師器底の出土が多くを占める。図化し得た14～17は、いずれも長胴壺で口縁部が頸部で短く屈曲して外傾するものが散見される。12・13・16・17は底部に木葉痕が確認できる。これらの一括遺物の特徴から住居廃絶時期は少なくとも9世紀第1四半期まで遡れると考えられる。また、土器内の土壤を採取して包含される炭化物の年代測定を実施し、出土土器の時期とほぼ同じ年代が示された。詳細はIV章に示す。

豎穴住居跡 ST268 (第30図、第52図18～24)

A区170-420グリッドに位置する。検出範囲は住居北西隅の掘り込みに限られ、大半は東側の調査区外へ及んでいる。西谷地b遺跡第2次調査の住居跡ST3248と重複関係にある。住居北西辺を基軸とする主軸方向はN-60°-Wとなる。覆土は灰黄褐色のシルト質土を基調とする30cm程の層厚である。カマドまたは炉跡、柱穴などは未検出である。住居の平面形態や規模は明示しがたいが、一辺2.5m以上を測る方形プランを成すと推察される。遺物は覆土中から出土した18～24がある。底部が回転糸切りの須恵器坏、須恵器蓋の転用硯、内黒の丸底坏、土師器底、壺などが散見できる。住居に作られた明確な時期判断の要素とはなり得ないが、遺物の組成からみると6世紀代と9世紀代の二時期が窺える。前述したST3248との重複関係による流れ込みの影響を考慮する必要がある。後の報告を待ちたい。

豎穴住居跡 ST314・339 (第33図、第52図25～33)

A区西側の北端から南へ約5～12mの範囲で重複して検出された。住居跡ST314の北側を削って住居跡ST339が構築されており、ST339の北側は溝跡SD328・不明遺構SX335に切られている。調査区が狭いため平面的に確認できたのは両遺構の南端の一部に限られるが、外傾して立ち上がる遺構南端のラインが直線的である点や、調査区東壁で確認できる覆土の層厚がともに南北約3mにわたって概ね一定であることなどから、豎穴住居跡の可能性が高いと判断した。カマドないしがれ跡が未検出なので住居跡の主軸方向は明示しがたいが、ST314南端がN-67°-W、ST339南端がN-71°-Wの方位に走ることから、住居跡の南北軸は座標北より北東に偏るものと考えられる。また東隣の西谷地b遺跡第2次調査区西側では、住居跡の存在が確認されて

いないので、ST314・ST339の東側は本調査区との間の未掘部分（東西幅約1.5m）内におさまると判断できる。調査区東壁・西壁の土層断面を勘案すると、ST314は一辺3.6m前後、ST339は一辺3.2m前後の方形プランと推定される。覆土の大半は地山由來の土質で出土器もわずかであり、基本的には住居掘方埋土と捉えられる。ST314の26層やST339の18層は土質から床面構築土の可能性があるが、硬化面は認められず住居機能面の大部分が削平されていると考えられる。ST314内の北側には短軸1.3m、長軸1.8m以上、検出面からの深さ30cm前後を測る土坑EK873が存在し、土師器が多数出土した。ST314の住居掘方埋土を掘り込むEK873は、ST314床面構築土と思われる25層より下位で確認されたので、ST314に伴う床下土坑の可能性が考えられる。

出土遺物はEK873出土の25～31がある。器形が把握できるものが多く、床下土坑と限られた範囲で出土した点からも住居廃絶時の良好な一括遺物であることが窺える。25は他と比較して小型の杯である。26～29は扁平な体部に外反する口縁部が付く環類で底部の形態が丸底となる。30は底部が欠損するが、口縁部の傾きから身の深いものと考えられる。他に高环31がある。環部外面に段を持ち、強く外傾する口縁部が付く。口径約16cm、内面には黒色処理を施す。土師器の環類の形態からも推して、5世紀末葉から6世紀初頭が与えられよう。この段階で住居が廃絶したことが推察される。

後に構築されるST339は遺存状況が悪く、良好な一括資料には恵まれない。出土遺物は覆土中の32・33のみである。32は高环脚部で、外面にハケメ、ナデ調整が施される。33は半球状の体部にやや内湾する口縁部が付く。底部には径3cmの輪台の貼付けを有する。いずれも古墳時代後期段階に属すると考えられるが、住居の時期判断は困難である。

豊穴住居跡 ST732（第34図、第53・54図34～53）

C区東壁の480-395グリッドに位置する。大半が東側の調査区域外となるが、比較的良好な状態で遺存している。また、同一方向にまとまりを持って延びる小溝状遺構と重複関係がある。南北3.5m以上、東西は検出長で1.5mを測る方形プランである。住居覆土の厚さは約60cm以上、10層の住居掘方までは80cmを測る。南壁

に付設されるカマドから主軸方向はN-6°-Eと捉えた。柱穴は未検出である。覆土15・16層は平坦で固く締まる床面構築土である。

図化し得た遺物は34～53の20点である。34～40は住居上位層出土の遺物群で、整地の際の流れ込みと考えられる。特に34は、逆丁字状の透孔を持つ高环の脚部である。40は両面に黒色処理を施す有台杯で、内面全体に漆膜が付着する。41～53は、カマド周辺や床面に多く遺存し、大半は住居廃絶段階の一括遺物として捉えてよいと判断される。ほぼ完形の43は、底部回転糸切りの須恵器無台杯で器形が高くなる直前段階と捉えた。これらの組成の中で須恵器の蓋類が加わることに着目すれば、廃絶段階に遺棄された土器類は、大まかに9世紀後半段階と捉えられる。カマド内の炭化物について年代測定を実施したが、その測定結果は出土土器にみられる時期より古い段階を示す。

B 掘立柱建物跡・柱穴列

本調査で建物として組めたのは、西谷地b遺跡の範囲にあたるA区SB870～872の3棟である。いずれも全体のプランを確認できるに至らないが、前回の発掘調査で確認された柱穴列と対応する場合は、併せて図に示した。また、西谷地b遺跡第2次発掘調査では多数の柱穴、ピットが確認されている。本来ならば、さらに多くの建物、掘立柱列が存在したと考えられ検討の余地がある。後の調査報告を待ちたい。なお、遺構図には上端線・下端線のほかに柱痕跡を点線で示した。

掘立柱建物跡 SB870（第35図、第54図54）

A区中央部260-415グリッドに位置している。西谷地b遺跡の第2次調査で確認された掘立柱建物跡SB3260と同一とされる。梁間3間、桁行3間、主軸方向軸はN-11°-Wである。柱間寸法は、梁行約1.4m、桁行約1.7m、柱穴の深さは約40～60cmを測る。柱穴SP85～89からは、径15～20cmを測る柱痕、柱の抜き取り痕が確認される。柱穴の規模は約70～100cm、隅丸方形を主体とする。柱穴SP86からロクロ成形の土師器有台皿54が出土する。内面に黒色処理と丁寧なミガキ調整を施し、底部回転糸切り後に高台を貼付けた痕跡がみられる。9世紀後半に属すると考えられる。出土状況はSP86柱痕埋土の中位で正位状態で

検出される。建物廃棄時に土器を埋納した祭祀・儀礼的行為の可能性が指摘される。

掘立柱建物跡 SB871（第 36 図）

A 区中央部 240-415 グリッドに位置し、一部が調査区域外となる。主軸方向軸が N-10° -W に振れる 2×2 間の総柱建物である。柱間寸法は梁行約 1.6 m、桁行約 2.0 m、柱穴の深さは約 40cm である。柱穴 SP201～207 では径 20cm を測る柱痕、柱の抜き取り痕を有する。柱穴の規模は約 70～100cm、不整円形や隅丸方形を主体とする。遺物の出土はないが、近接する SB871 掘立柱建物跡と同じ主軸方向であることから、同時に存在した建物群の可能性が高い。

掘立柱建物跡 SB872（第 36 図）

A 区中央部 225-415 グリッドに位置し、一部が西側の調査区域外となる。確認されたのは、建物の西辺にあたる柱穴列 SP241・245・307・308 である。ただし、柱穴の配置や規模から確信が持てる組み合わせではなく再考の余地を残す。柱間寸法は、西辺の柱穴列で約 1.6 m、柱穴は円径 40cm、深さが約 30cm を測る。建物に属する SP245 覆土中から土師器の小片が出土するが圖化まではし得ない。

C 土 坑

今回の調査で検出された土坑は約 20 基以上を数える。遺構の中には須恵器や土師器などが出土するが、大半が覆土上面から確認される。中世の柱穴と覆土の特徴が類似するものが多く、大半が中世以降に帰属すると考えられる。ここでは近代までに廃絶した遺構や特記できるものを使い、考察できる範囲で述べたい。

土坑 SK1・5（第 22 図、第 55 図 64～66）

A 区 300-415 グリッド、調査区南端部に位置し、溝跡 SD4 を掘り込む重複関係にある。土坑 SK1 は長径 3.0m、短径 2.5m の長楕円形で深さ 50cm を測る。覆土中からは廃絶時に棄て入れられた円碟と共に陶磁器 64～66 が出土する。64 は鉄軸がかかる鉢鉢破片である。片口が付く口縁部と卸目がわずかに確認される。胎土や器種形態、胎土分析の結果からも岸窯産の擂鉢の可能性が高い。65 は底部糸切りの鉢底部である。胎土や外面の施釉から成島系陶器と目される。他に磁器蓋 66 がある。SK5 は径約 80cm、深さ 10cm を測る円形の土

坑である。遺物は確認されないが、いずれも近世以降の掘り込みと捉えた。

土坑 SK20・21（第 22 図、第 54 図 55・56）

A 区 285-415 グリッドに位置する不整形の土坑である。調査段階では重複関係にある土坑と判断したが、本来は一体の土坑であったと考えられる。深さ 10cm 前後と浅く、東側では焼土塊が底面に貼り付いた状態であった。出土遺物 55・56 の器面が被熱の影響を受けていることからも焼成遺構の可能性が指摘された。ただし、底面出土の炭化物は放射性炭素年代測定の結果、比較的新しい時期に比定され、出土遺物の古代の年代観と大幅に差がある。分析結果の詳細は IV 章に示した。

土坑 SK141（第 21 図、第 54 図 57）

A 区 250-415 グリッドに位置する円形の土坑である。長軸 3.0m、短軸 2.5m の大型の土坑だが、覆土は 15cm の層厚で浅い。覆土中から須恵器 57 が出土する。無台坪で底部切り離しは糸切りである。他に土師器小片が出土する。帰属時期は平安時代後半に留める。

土坑 SK234（第 20 図）

A 区 230-415 グリッドに位置する。長軸 1.1m、短軸 70cm、深さ 15cm を測る。覆土から土師器小片が出土するが、図化まではし得ない。埋土の断面観察では、西側が一段掘り込む形状から柱穴の可能性も指摘される。

土坑 SK622（第 26 図、第 54 図 58）

B 区 255-340 グリッドに位置する円形の土坑である。長軸 1.3m、短軸 1.2m、深さは最深で 1.0m を測る。遺構上面が削平されている点や、周辺遺構と比較して一段と深い掘り込みであることが注目される。埋土断面の観察から地山質土Ⅴ層まで掘り込まれ、下層では人為的な堆積も見受けられる。素掘りの井戸の性格も指摘されるが判断に乏しい。覆土上面から土師質土器 58 が出土する。口縁部を引き出す形状で口径 10cm を測る。底部回転糸切り痕が残るロクロ成形のかわらけと判断した。

土坑 SK640～645（第 26 図、第 54・61 図 60・62・159）

B 区 250-340～260-340 グリッドの範囲で検出された。いずれも円形を主体とする土坑だが、削平の影響から深さ 10cm 程と極端に浅い。覆土上面では遺物が検出されるものがある。SK641 出土の 60 は、非ロクロ成形の土師器甕で内面には輪積み痕がみられる。SK642

出土の 61 は須恵器裏片で外面に格子状の叩き痕、内面に当て痕がみられる。これら土師器や須恵器が散見されるが、SK640 上面出土の 159 は、黒色の粘板岩を用いた薄厚の石製品である。板状の模造品で、先端部は両端から山形に研磨した加工を施す。

土坑 SK733 (第 34 図、第 55 図 63)

C 区 400-485 グリッドに位置する。長軸 50cm 前後、短軸 30cm、深さ 20cm 程を測る。覆土からは、底部回転系切りの須恵器環 63 が出土する。遺構の時期は平安時代後半とした。

D 溝 跡

各区で性格が異なる数種の溝跡の存在が確認される。流路跡と考えられる A 区の溝跡 SD4・6・30 西谷地 b 遺跡第 2 次調査検出の区画溝に対応する溝跡、馳上遺跡にあたる C 区で検出された同方向に数条延びる小溝跡である。以下詳細を述べる。

溝跡 SD4・6・30 (第 22 図)

A 区南側で確認される 3 条の溝跡 SD4・6・30 は、幅 2.0 ~ 最大 4.0m、深さは最深部で約 50cm を測る。壁面が垂直気味に立ち上がる U 字状の断面形をなすが、削平の影響で極端に浅い部分もみられる。近世に属する土坑と重複関係にある SD4 は、調査区外の東側へ延びている。延長線上に位置する馳上遺跡第 4 次の溝跡 SD7455・7475 があり、同一と推察される。溝跡 SD6・30 は検出長約 18m、幅 50cm 程を測る。南北方向に延びるが北端で SD4 と合流する広がりをみせる。いずれも灰黄褐色を基調とするシルト質の覆土で、断面観察から短期間に一括して埋没した形跡が窺える。遺物はいずれも確認できないが、近世の土坑に掘り込まれる重複関係から、近世以前から存在した流路の性格を考えられる。

溝跡 SD680 (第 23 図)

155-340 グリッドで検出された溝跡である。北西から南西方向に延びる幅約 1.0m、Ⅲ 層下の検出面から 40cm 程の深さを測る。西谷地 b 遺跡第 2 次調査で確認された溝跡 SD2191 と同一の溝跡である。堆積層の観察から、人為的に埋め戻された形跡が確認できた。遺物の出土はないが、同一とされる溝跡 SD2191 の出土遺物などから、中世に属する溝跡と考えられる。

溝跡 SD726 (第 25 図、第 55・61 図 67 ~ 70・163)

B 区 240-340 グリッドに位置する東西方向に延びる溝跡である。西谷地 b 遺跡第 2 次調査の溝跡 SD2102 と同一である。本調査の検出地点から西進約 20m 地点で屈曲して北方向へと延びている。削平で遺構上面が失われるが、S23・S24 断面からⅣ 層を掘り込む幅 2.5m、深さは最大 70cm を測ることが知り得る。

遺物は少量だが、覆土 7 層から内耳土鍋や土師質擂鉢、木製品の連歯下駄が出土した。図化し得たのは 67 ~ 70・163 の 5 点である。67・68 は内耳土鍋で双方とも体部に内耳が付く。68 は復元実測により底面までの器形が把握できる。体部上半から口縁部に屈曲して外傾する形態となる。内耳部分の断面形は、縦断面で半円状である。外面全体に煤が付着するが、内面には炭化物の付着はない。大きさは推定値で口径 34cm を測り、大型のものと捉えた。69 は内面に 8 条の鉗目がみられる擂鉢である。焼成良好で硬質な印象を受ける。器面が部分的に赤く、二次的な被熱を受けている可能性も考えられる。70 は須恵器系陶器で蓋の体部破片である。外面に条痕の平行叩き、内面には円礫を用いた当て痕がみられる。他に木製品の連歯下駄 163 があり、放射性炭素年代測定の結果から 16 世紀代に比定される。

溝跡 SD729・864 (第 23 図、第 55・60・61 図 71 ~ 73・164 ~ 166)

溝跡 729 は B 区 150-340 ~ 155-345 グリッドで検出された溝跡である。北西から南西方向に延びる溝跡で幅約 1.0 ~ 1.5m、Ⅲ 層下の検出面から 50cm 程の深さを測る。今回検出した範囲で北東と南東へ分岐して延びることが把握された。西谷地 b 遺跡第 2 次調査で確認された中世に属する溝跡に付隨し、溝跡 SD2186 と今回検出した溝跡 SD864 と同一である。SD864 は一連の溝跡の配置からみると、南東域にあたる溝跡であることが把握される。第 2 次調査区の検出状態を踏まえると、先に述べた溝跡 SD680、SD726 とある程度の新旧関係が把握される。後の調査報告にて詳細を待ちたい。

遺物は SD729 覆土出土の 71 ~ 73 と、SD864 出土の木製品 164 ~ 166 がある。71 は内耳土鍋の破片資料で、内耳が付く体部上半から口縁部が明瞭に屈曲する形態と考えられる。内耳部分の断面形は、縦断面で逆 L 字状である。外面全体に煤が付着するが、内面に炭化物

の付着はない。既存の編年案（高桑 2003）に対応すると 6 期前半 2 の 16 世紀後半に相当すると考えられる。72 は、土師器壺の体部破片である。外面には平行叩き、内面には当て具痕が施される。73 は径 48mm を測る土師器の底部破片で、ナデ調整が施される。SD864 の木製品は、全て加工材で欠損する箇所も多い。漆塗製品の 166 は、本来は環状になるものと推察される。樹種同定や漆塗膜構造の理化学分析を実施している。その結果、ブナ材を削出して作り上げている。木炭粉を混和した膠着剤を下地に施した後、黒漆を塗布している。

溝跡 SD734・740・741・779・800・831・832（第 34 図）

いずれも C 区で確認される溝跡で、大半が竪穴住居跡 ST732 の周辺で多く検出される。東西方向へ平行に延びる浅い溝状を呈する。検出長は約 6 ~ 7m、幅は 20cm 前後である。黒褐色土を基調とする覆土で、検出面下 10cm 程度の深さを測る。遺構の形態や配置から、歎の間にあたる溝状部分と考えられる。一部住居跡に掘り込まれる古相のものも確認されるが、大半が住居跡に掘り込まれる重複関係から 9 世紀後半段階以降の時期が与えられよう。

E 柱穴・ピット

柱穴・ピット SP18 ~ 866（第 37 ~ 49 図）

建物や柱穴列に組み合わせることができなかった 200 基以上の柱穴・ピットを掲載した。柱抜き取りの痕跡を残すもの、柱痕が明確に残る柱穴・柱穴と考えられるが判然としない小ピット状のものがみられる。規模は様々だが柱痕の位置や抜き取り痕が明確なものは、平面図上にその範囲を示した。また掲載した図版の土層注記で詳細を明示した。本来は建物の構成要素として、柱穴同士の組み合わせが検討されるが、ここでは遺物が伴出するものなどを中心に取り上げ、把握できる範囲で述べたい。

柱穴 SP178（第 37 図、第 56 図 75）

A 区中央部の 245-415 グリッドで検出された。径 50cm の円形の柱穴で、検出面下 30cm 程の深さを測る。柱掘方からロクロ成形の土師器皿 75 が出土する。内面に黒色処理を施し、回転糸切り後に高台を貼付けている。

柱穴 SP325（第 39 図、第 56 図 76）

A 区北側の 155-420 グリッドで検出された。規模は径 30cm 前後、深さ 20cm 程を測る。柱穴底面から非

ロクロ成形の土師器皿 76 が検出される。底部が欠損する破片資料だが、その形態から深身の壺であることが推察される。古墳時代後期に帰属する竪穴住居跡 ST314 が近接することに注目したい。

柱穴 SP671 ~ 715・751 ~ 755・865・866（第 23・24・45 ~ 47・49 図）

B 区北側の 155-345 ~ 195-345 グリッドで検出された柱穴群である。規模は径 20 ~ 30cm 前後、深さ 20 ~ 30cm 程を測る。これらの柱穴群は、溝跡 SD729・864 溝跡に囲まれた区画内で検出されている。区画内の建物を構成する柱穴の可能性が高く、西側に隣接する第 2 次調査で検出された柱穴との組み合せが検討される。

F 不明 遺構

不明遺構 SX31（第 22 図）

A 区 280-415 グリッドの調査区壁面付近で検出された。溝跡 SD32 を切る重複関係にあり、延長線上の土坑 SK26 との対応関係が考慮される。ただし、近代の削平の影響を強く受けたため、不明確な点が多く判断は困難である。

不明遺構 SX82（第 21 図、第 56 図 77）

A 区 265-425 グリッドで検出された。調査区西端部に位置し、断面観察による検出に留まる。幅は検出長で約 3.8m、検出面から 50cm 下の地山質まで掘り込んでいる。覆土は中位層で細かく分層でき、炭化物や焼土塊を含む灰黄褐色の薄層の堆積が観察される。この層位から遺物が集中して検出されるが、その大半が土師器の細片である。

77 は、体部上半部まで復元できたロクロ成形の土師器壺である。ロクロ成形痕を磨消すように縱方向のヘラナデやケズリ調整が施される。口径は復元値で 22cm、口縁部が若干外傾して引き出される形状である。遺構の時期や形態は、断面観察による検出に留まるため、不明瞭な点が多く判然としない。

不明遺構 SX821・822（第 24・25 図、第 56 図 78 ~ 79）

B 区 210-337 グリッドで検出された。大半が調査区東側に及んでいる。検出範囲で確認された平面は長軸 2.4m、短軸 1.7m の不整形で、深さは 50cm を測る。覆

土は黒褐色を基調とするシルト質土で、覆土の下位にあたる4層から青磁78、白磁79が出土する。

78は青磁棱花皿の細片で、内面に細描の草花文がわずかに確認できる。79の白磁も同様に細片のため、判然としないが、外面に施された蓮弁文から帰属時期は、15世紀後半段階と考えられる。

不明遺構 SX823（第23図）

B区150・340グリッド付近の調査区東壁面にかかり、断面観察による検出に留まる。幅70cm、検出面からの深さは30cmを測る。出土遺物は確認されない。溝跡SD729の分岐地点に近接している点が注目される。

G 川 跡

川跡 SG250（第19・20図、第56・61図80～89・160）

A区中央部で検出された北東から南西方向に延びる川跡で、西谷地b遺跡の西側に位置する。西谷地b遺跡第1・2次調査時の川跡SG2966と同一で、川幅は最大で約25mを測る。本調査では、幅1m前後のトレンドを設定して掘り下げた。川底までの深さは検出面から約1.2mである。堆積土の状況から、洪水堆積の灰黄褐色シルト質土で川底が浅くなり、その後の堆積土で徐々に埋没したことが想定される。

上位層から土師器高环82・83や手捏土器84～86、下層からは、須恵器甕片80・81が出土する。これらの遺物の出土状態から川跡の時期は、少なくとも奈良・平安時代以前から存在することがいえる。

川跡 SG513（第25・26図、第56図90・91）

B区南側の260・335・260・240グリッド範囲に位置する。西谷地b遺跡の南側にあたる。覆土は浅く、黒褐色シルトを主体とするシルト質土が浅く堆積する。馳上遺跡第4次調査の川跡SG7657に属し、洪水や氾濫時に堆積した覆土と考えられる。

クロコ成形の土師器皿90と土師器环91の2点が出土する。90は内外面に丁寧なヘラミガキ調整と黒色処理を施す有台皿である。身が深く、口縁部で引き出されるように外反する形態である。底部の切り離しは糸切りで、高台を貼り付けている。91は内面にミガキ調整と黒色処理を施す無台环である。底部切り離しは不明瞭で判然としない。

川跡 SG651（第23～25図、第57～59・61図92～135・155・158）

B区中央から北側の広範囲で検出された東西方向に延びる川跡で、西谷地b遺跡第2次調査の川跡SG1に対応する。本調査では南北の河岸を確認したが、その全体は検出していないため、明確な川幅の確認ができなかった。西谷地b遺跡で検出された川跡の中では最も規模が大きく、ほかの川跡および溝などの本流、あるいは水源となっていた可能性がある。ただし、削平により当時の地表面は失われているため、本来はもっと川幅は広いはずである。川跡の覆土は第23～25図の土層国S18・S22に示した。川底までの深さは最大で1.2m、各トレンド断面の川底の傾斜から、川の流れる方向は南東から北西方向と推察される。遺物は断面S20-S20'～断面22-22'の範囲で多く、川岸にあたるこの範囲に流れ込んだ遺物が遺存していることが把握される。図化したのは44点である。川跡出土の遺物は、9・10世紀を主体とする土師器や須恵器が大半を占める。以下、遺物の詳細を列記する。

92は、外面に数条の沈線がみられる口縁部破片である。口縁が逆コの字状に外反する。細砂混の精鍊された胎土で、周辺から流れ込んだ弥生土器の壺破片と目される。93～95は古墳時代に属する遺物である。93は刺突文のある小片だが、小型の壺の口縁部片と考えられる。94・95は高环の脚部である。96～109は土師器の环、皿である。有台のものが多く、底部は高台を貼り付け後、放射状のミガキ痕が残るものが多くみられる。110～112は土師器皿である。110は甕の底部片で網代痕が残る。内面に幾重も沈線が巡る113は、土師質土器の底部片で中世以降に属するものと考えられる。出土した須恵器は114～135である。环、壺、甕が散見される。120～128は短頸壺や長頸瓶の破片である。120は小型の短頸壺で比較的丁寧なつくりである。長頸瓶底部の126は、西谷地b遺跡第2次調査の川跡出土破片と接合した。129は横瓶上部で、口径は約10cmを測る。130～135の須恵器甕は大半が破片資料である。131は甕底部片だが、別の須恵器破片が溶着している。焼台などに再利用されたものと考えられる。135の甕片は西谷地b遺跡第2次調査時の出土破片と接合し、大甕の上半部が窺い知れる。口径は約45cmを測る。他に

上面層から鞆の羽口 155 が出土する。

川跡 SG748 (第 29 図)

D 区の北側で検出された東西方向に延びる川跡で、馳上遺跡第 3 次発掘調査時の 7・8 区東側にある。川跡の覆土は、第 29 図の土層図 S31 に示した。川跡南側の川岸が確認されるが、遺物は出土していない。

H 遺構外出土遺物

縄文時代の遺物 (第 61 図, 157・158)

縄文時代に付随する石器 2 点である。157 は凸基状の有茎石鏃で、基部の一部が欠損している。158 は横長削片を素材とし、湾曲する末端に微小な剥離を施して刃部を作り出している。石匙の未完成品の可能性もある。双方とも頁岩を石材として用いている。

古墳時代の遺物 (第 61 図, 156・160)

156 は土製の紡輪で厚さ 11mm、内孔は復元値で径 18mm を測る。160 は滑石製の管玉で研磨されているが光沢はない。上下から穿孔が施されており、内径は孔の中央部が開口部より狭くなる。

古代の遺物 (第 56 図, 136・137)

136 は口縁部破片で、ロクロ成形の土師器甕である。口縁部が直線的に短く外傾する長胴甕と考えられる。137 は須恵器長頸壺の頸部にあたり、突帶部がみられる。

中世以降の遺物 (第 60 図, 138～151)

138～151 は陶磁器である。138・139 は 14 世紀代に属する青磁碗の口縁部である。138 の外面には細描の蓮弁文、139 の内面には草花文が施される。140 は細片で判然としないが大窯第 4 段階 (17 世紀初) に属する志野皿と考えられる。内面と外面の口縁部側に白色釉が施される。141・142 は灰釉の塊で、141 は緑釉のかかる口縁部破片である。142 は口径 10cm を測る。底部片 143 と片口の鉢 144 は成島系陶器で 19 世紀代に属すると考えられる。145 の鉢は、胎土の観察から岸窯産の可能性が高い。146 は大堀相馬産の塊で、外面上には糠白釉とともに数条の段が施釉される。147～151 は磁器である。型押成型の紅皿 147 や肥前系の徳利 148・149 である。150 は内面に目痕が残る染付碗で、151 はクロム青磁の小碗である。これらの帰属時期は 19 世紀以降と考えられる。

I 製鉄関連遺物

152 の鉄滓、鞆の羽口 153～155 である (第 60 図)。川跡や溝跡の上位層から出土したもので、明確に付随する遺構の存在は確認されなかった。152 は幅 3cm、厚さ 9mm 程度の鉄滓片で鋳造が進行している。153 は残存長 23mm、厚さ 12mm の羽口小片である。溝跡 SD864 上面出土の 154 は、径 71mm の円筒形を呈する。155 は全体の形が窓い知れる羽口である。径 71mm、残存長約 27.5cm の砲弾形で、中心部には径 25～40mm 程度の通風孔がみられる。いずれの羽口片も、端部に付着する鉱滓から製鉄炉側に位置する羽口と判断される。西谷地 b 遺跡第 2 次調査では、鍛冶遺構に関連する遺物や炭窯が確認されている。これに付随する遺物の可能性が高い。集落内の生業として製鉄が行わされたことが確認されており、本調査で検出された鞆の羽口は、これに関連する遺物と捉えられる。

J 木 製 品

木製品は 4 点を数える (第 61 図)。いずれも溝跡出土の下駄や加工材である。溝跡 SD726 出土の 163 は、全体の形が把握できる連歛下駄である。台の前部と左側面には方形の緒穴が穿たれる。歛先には用いた際に生じた摩耗がみられる。164～166 は溝跡 SD864 中位層からまとめて出土した。板材 164、棒状の 165 には部分的な面取りがなされている。166 の塗塗製品は、半球が欠損する環状の木製品と考えられる。本来は径 8cm、幅 10mm の環状に、幅 5mm 程度の輪台が付く形状と推察される。一木から製作された例物で、台の下面部以外には全面に黒漆を塗付している。器種や用途など不明な点も多く、県内でも類例がない。今後の資料の増加を待ちたい。

なお、これらの木製品は樹種同定と塗塗膜分析、一部剥離した木片を用いて放射線炭素年代測定を実施した。分析結果など詳細は IV 章に示したので参考にされたい。

IV 理化学分析

1 放射性炭素年代測定

(株) 加速器分析研究所

A 測定対象試料

測定対象試料について、表3のとおりである。竪穴住居跡ST239・ST732、土坑SK20出土の炭化物と、河川跡、溝跡出土の木製品や種子の合計19点である。

竪穴住居跡ST239では、中央付近の床面、RP2（土圧で押し潰された土師器壺）の西隣からNo.1、RP2内部の土壤からNo.2、カマド中央で出土したRP6（土師器壺）内部の土壤からNo.3、同じくカマド中央で出土したRP7（土師器壺）内部の土壤からNo.4、RP6・7下部の土壤からNo.5が採取された。ST239は出土土器から奈良・平安時代と推定される。

土坑SK20は底面が被熱しており、底面を覆う土層からNo.6が出土した。土器などの遺物は出土していない

が、古代の焼成遺構の可能性がある。

河川跡SG250では、中層に当たる5層からNo.7、下層に当たる6層からNo.8が出土した。河川跡SG651では、覆土からNo.9～12、SG250、SG651の覆土からは古墳時代から古代の須恵器、土師器が出土している。溝跡SD726の6層からはNo.13、14が、溝跡SD864の2層からはNo.15、16が採取された。No.18は、溝跡SD726出土の連歯下駄の歯部で、残存する最外輪と見られる部分から採取された。No.19は、溝跡SD864出土の漆塗りの環状木製品の一部である。SD726の6層からは内耳土鍋、SD864の2層からは木製品が出土しており、これらの溝跡はSG651より新しい中世の区画溝と考えられている。

竪穴住居跡ST732では、カマド前の床面近く、RP26（土師器壺）付近でNo.17が出土した。この住居跡の時期は、床面直上から出土した須恵器により9世紀頃と推定されている。

表3 放射性炭素年代測定分析試料一覧

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (A M S)		$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					Libby Age (yrBP)	pMC (%)		
IAAA-123486	No.1	ST239 8層(床面)	炭化物	AaA	-22.40 ± 0.29	1,240 ± 30	85.69 ± 0.28	
IAAA-123487	No.2	ST239 8層(床面)	炭化物	AaA	-26.04 ± 0.53	1,320 ± 30	84.82 ± 0.28	
IAAA-123488	No.3	ST239 カマド 6層	炭化物	AaA	-22.92 ± 0.47	1,280 ± 20	85.31 ± 0.26	
IAAA-123489	No.4	ST239 カマド 6層	炭化物	AaA	-26.66 ± 0.34	1,260 ± 30	85.47 ± 0.27	
IAAA-123490	No.5	ST239 カマド 8層(床面)	炭化物	AaA	-23.57 ± 0.45	1,280 ± 30	85.25 ± 0.27	
IAAA-123491	No.6	SK20 2層	木炭	AAA	-24.54 ± 0.44	220 ± 20	97.31 ± 0.28	
IAAA-123492	No.7	SG250 5層	木片	AAA	-24.41 ± 0.46	1,530 ± 30	82.66 ± 0.26	
IAAA-123493	No.8	SG250 6層	種子(クルミ殻)	AAA	-24.06 ± 0.43	1,270 ± 30	85.40 ± 0.27	
IAAA-123494	No.9	SG651	木片	AAA	-25.64 ± 0.37	210 ± 20	97.41 ± 0.30	
IAAA-123495	No.10	SG651	種子(クルミ殻)	AAA	-23.81 ± 0.54	1,650 ± 20	81.46 ± 0.25	
IAAA-123496	No.11	SG651	種子(クルミ殻)	AAA	-25.78 ± 0.38	1,330 ± 30	84.69 ± 0.28	
IAAA-123497	No.12	SG651	種子(クルミ殻)	AAA	-26.52 ± 0.35	1,340 ± 30	84.67 ± 0.27	
IAAA-123498	No.13	SD726 6層	木片	AAA	-29.01 ± 0.45	320 ± 20	96.06 ± 0.28	
IAAA-123499	No.14	SD726 6層	種子(クルミ殻)	AAA	-29.24 ± 0.50	340 ± 20	95.84 ± 0.27	
IAAA-123500	No.15	SD864 2層	木片	AAA	-29.99 ± 0.45	370 ± 20	95.52 ± 0.27	
IAAA-123501	No.16	SD864 2層	木片	AAA	-20.99 ± 0.49	640 ± 20	92.40 ± 0.26	
IAAA-123502	No.17	ST732 4層	炭化物	AAA	-26.27 ± 0.48	1,250 ± 30	85.56 ± 0.27	
IAAA-130340	No.18	遺物番号163 SD864	連歯下駄	AAA	-26.89 ± 0.34	310 ± 30	96.26 ± 0.30	
IAAA-130341	No.19	遺物番号164 SD864	漆塗製品	AaA	-27.45 ± 0.437	400 ± 30	95.16 ± 0.31	

B 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸 - アルカリ - 酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合には「Aaa」と表 3 に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

C 測定方法と算出方法

測定には、加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とし、バックグラウンド試料の測定も同時に実施する。算出方法は、次のとおりである。

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (表 3)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値、補正していない値を参考値として表 4 に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下 1 術を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代

の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 4 に示した。

(4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 術を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によって結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal09 データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 4 に示した。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

D 測定結果

ST239 出土試料の ^{14}C 年代は、8 層 (床面) 出土炭化物 No.1 が $1240 \pm 30\text{yrBP}$ 、No.2 が $1320 \pm 30\text{yrBP}$ 、カマド 6 層出土炭化物 No.3 が $1280 \pm 20\text{yrBP}$ 、No.4 が $1260 \pm 30\text{yrBP}$ 、カマド 8 層 (床面) 出土炭化物 No.5 が $1280 \pm 30\text{yrBP}$ である。5 点の値は $1240 \pm 30\text{yrBP}$ (No.1) から $1320 \pm 30\text{yrBP}$ (No.2) の間に收まり、誤差 ($\pm 1\sigma$) の範囲で値が重なる試料が多く、おおむね近い年代を示している。历年較正年代 (1σ) は、No.1

が691～810cal AD、No.2が658～762cal AD、No.3が685～770cal AD、No.4が691～774cal AD、No.5が680～769cal ADの間に各々複数の範囲で示される。出土土器の時期(奈良・平安時代)と矛盾しない値となっている。

土坑SK20-2層出土木炭No.6の¹⁴C年代は、220±20yrBP、暦年較正年代(1σ)は1652～1951cal ADの間に3つの範囲で示される。古代の焼成遺構の可能性が指摘されているが、測定結果は大幅に新しい年代値となった。

河川跡出土試料の¹⁴C年代は、SG250-5層出土木片No.7が1530±30yrBP、同6層出土種子No.8が1270

表4 暦年較正年代結果

測定番号	試料No.	¹⁴ C補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ 暦年年代範囲	2σ 暦年年代範囲
		Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-123486	No.1	1,200 ± 30	86.15 ± 0.27	1,240 ± 25	691calAD - 750calAD (42.5%) 763calAD - 782calAD (14.2%) 790calAD - 810calAD (11.5%)	687calAD - 870calAD (95.4%)
IAAA-123487	No.2	1,340 ± 30	84.64 ± 0.26	1,322 ± 26	658calAD - 691calAD (56.5%) 751calAD - 762calAD (11.7%)	652calAD - 721calAD (74.9%) 741calAD - 770calAD (20.5%)
IAAA-123488	No.3	1,240 ± 20	85.68 ± 0.25	1,276 ± 24	685calAD - 722calAD (37.8%) 741calAD - 770calAD (30.4%)	671calAD - 776calAD (95.4%)
IAAA-123489	No.4	1,290 ± 30	85.18 ± 0.26	1,260 ± 25	691calAD - 751calAD (57.6%) 762calAD - 774calAD (10.6%)	671calAD - 783calAD (89.2%) 789calAD - 813calAD (4.8%) 844calAD - 857calAD (1.4%)
IAAA-123490	No.5	1,260 ± 20	85.5 ± 0.26	1,282 ± 25	680calAD - 720calAD (39.8%) 742calAD - 769calAD (28.4%)	669calAD - 775calAD (95.4%)
IAAA-123491	No.6	210 ± 20	97.4 ± 0.26	219 ± 22	1652calAD - 1668calAD (29.1%) 1782calAD - 1798calAD (33.5%) 1947calAD - 1951calAD (5.7%)	1645calAD - 1681calAD (39.1%) 1763calAD - 1801calAD (42.6%) 1938calAD - 1955calAD (13.8%)
IAAA-123492	No.7	1,520 ± 20	82.76 ± 0.25	1,530 ± 25	442calAD - 484calAD (23.4%) 533calAD - 578calAD (44.8%)	432calAD - 495calAD (32.0%) 504calAD - 600calAD (63.4%)
IAAA-123493	No.8	1,250 ± 20	85.56 ± 0.26	1,268 ± 25	689calAD - 728calAD (39.8%) 737calAD - 754calAD (16.7%) 759calAD - 771calAD (11.7%)	667calAD - 780calAD (93.4%) 792calAD - 805calAD (2.0%)
IAAA-123494	No.9	220 ± 20	97.29 ± 0.29	210 ± 24	1653calAD - 1675calAD (24.1%) 1777calAD - 1799calAD (30.4%) 1941calAD - 1953calAD (13.6%)	1647calAD - 1683calAD (30.7%) 1736calAD - 1805calAD (48.0%) 1936calAD - 1956calAD (16.7%)
IAAA-123495	No.10	1,630 ± 20	81.66 ± 0.23	1,647 ± 24	359calAD - 362calAD (2.1%) 382calAD - 429calAD (66.1%)	268calAD - 272calAD (0.3%) 335calAD - 439calAD (88.7%) 487calAD - 531calAD (6.4%)
IAAA-123496	No.11	1,350 ± 30	84.56 ± 0.27	1,334 ± 26	655calAD - 687calAD (68.2%)	647calAD - 714calAD (82.8%) 745calAD - 768calAD (12.6%)
IAAA-123497	No.12	1,360 ± 30	84.41 ± 0.26	1,336 ± 25	655calAD - 685calAD (68.2%)	648calAD - 711calAD (85.2%) 747calAD - 766calAD (10.2%)
IAAA-123498	No.13	390 ± 20	95.27 ± 0.26	322 ± 23	1519calAD - 1593calAD (55.5%) 1619calAD - 1636calAD (12.7%)	1489calAD - 1603calAD (75.2%) 1610calAD - 1643calAD (20.2%)
IAAA-123499	No.14	410 ± 20	95.01 ± 0.25	341 ± 22	1492calAD - 1524calAD (22.8%) 1558calAD - 1603calAD (31.4%) 1611calAD - 1631calAD (14.0%)	1471calAD - 1636calAD (95.4%)
IAAA-123500	No.15	450 ± 20	94.55 ± 0.26	368 ± 23	1461calAD - 1516calAD (48.4%) 1596calAD - 1618calAD (19.8%)	1450calAD - 1524calAD (57.3%) 1558calAD - 1632calAD (38.1%)
IAAA-123501	No.16	570 ± 20	93.16 ± 0.25	635 ± 22	1295calAD - 1315calAD (25.9%) 1356calAD - 1388calAD (42.3%)	1287calAD - 1326calAD (39.1%) 1344calAD - 1394calAD (56.3%)
IAAA-123502	No.17	1,270 ± 20	85.34 ± 0.26	1,252 ± 25	690calAD - 751calAD (55.2%) 762calAD - 777calAD (13.0%)	676calAD - 826calAD (91.3%) 840calAD - 863calAD (4.1%)
IAAA-130340	No.18	340 ± 20	95.89 ± 0.29	306 ± 24	1522calAD - 1575calAD (48.3%) 1584calAD - 1590calAD (4.1%) 1625calAD - 1644calAD (15.8%)	1493calAD - 1602calAD (72.2%) 1615calAD - 1649calAD (23.2%)
IAAA-130341	No.19	440 ± 30	94.68 ± 0.29	398 ± 25	1446calAD - 1490calAD (62.8%) 1603calAD - 1609calAD (5.4%)	1438calAD - 1521calAD (81.3%) 1592calAD - 1620calAD (14.1%)

[参考値]

SG651から出土した4点では、No.11とNo.12がほぼ同年代を示すものの、他の2点との間に明瞭な年代差が認められる。また、出土土器の時期（古墳時代から古代）に対して、No.9の値は大幅に新しいが、他の5点の値はおむね土器が示す時期の範囲内と考えられる。

溝跡出土試料の¹⁴C年代は、SD726-6層出土木片No.13が 320 ± 20 yrBP、同出土種子No.14が 340 ± 20 yrBP、さらに同出土木製下駄から採取のNo.18が 310 ± 20 yrBPである。SD864 2層出土木片No.15が 370 ± 20 yrBP、No.16が 640 ± 20 yrBP、同出土木製品採取のNo.19が 400 ± 30 yrBPである。SD726から出土した3点の値は誤差範囲で重なり、近い年代を示す。他方、SD864出土の3点の値には明瞭な年代差がある。

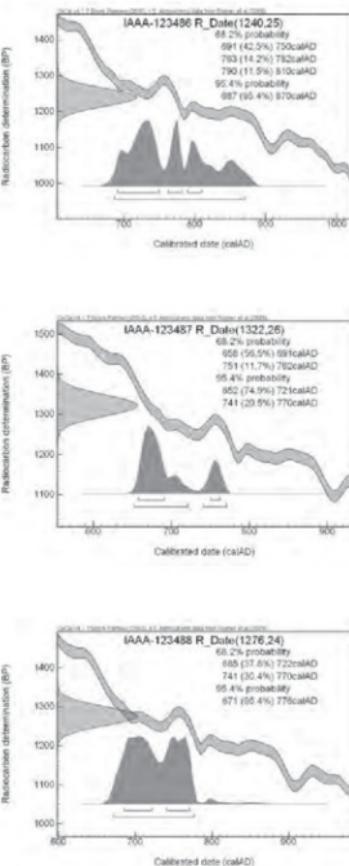
曆年較正年代（ 1σ ）は、No.13が $1519 \sim 1636$ cal AD、No.14が $1492 \sim 1631$ cal AD、No.15が $1461 \sim 1618$ cal AD、No.16が $1295 \sim 1388$ cal AD、No.18が $1522 \sim 1644$ cal AD、No.19が $1446 \sim 1609$ cal ADの間に各々複数の範囲で示される。

これらの試料が出土した溝跡SD726、SD864は、SG651より新しい中世の区画溝と推定されている。関連する3遺構のうち、SG651とSD864の試料の年代値には各々変異があり、時期を絞り込むのが難しいものの、SG651のNo.9を除く7点の測定結果は、出土遺物の検討に基づくこの推定に矛盾しない。ST732-4層出土炭化物No.17の¹⁴C年代は 1250 ± 30 yrBP、曆年較正年代（ 1σ ）は $690 \sim 777$ cal ADの間に2つの範囲で示される。床面直上出土須恵器が示す9世紀頃という時期よりやや古い年代値となっている。

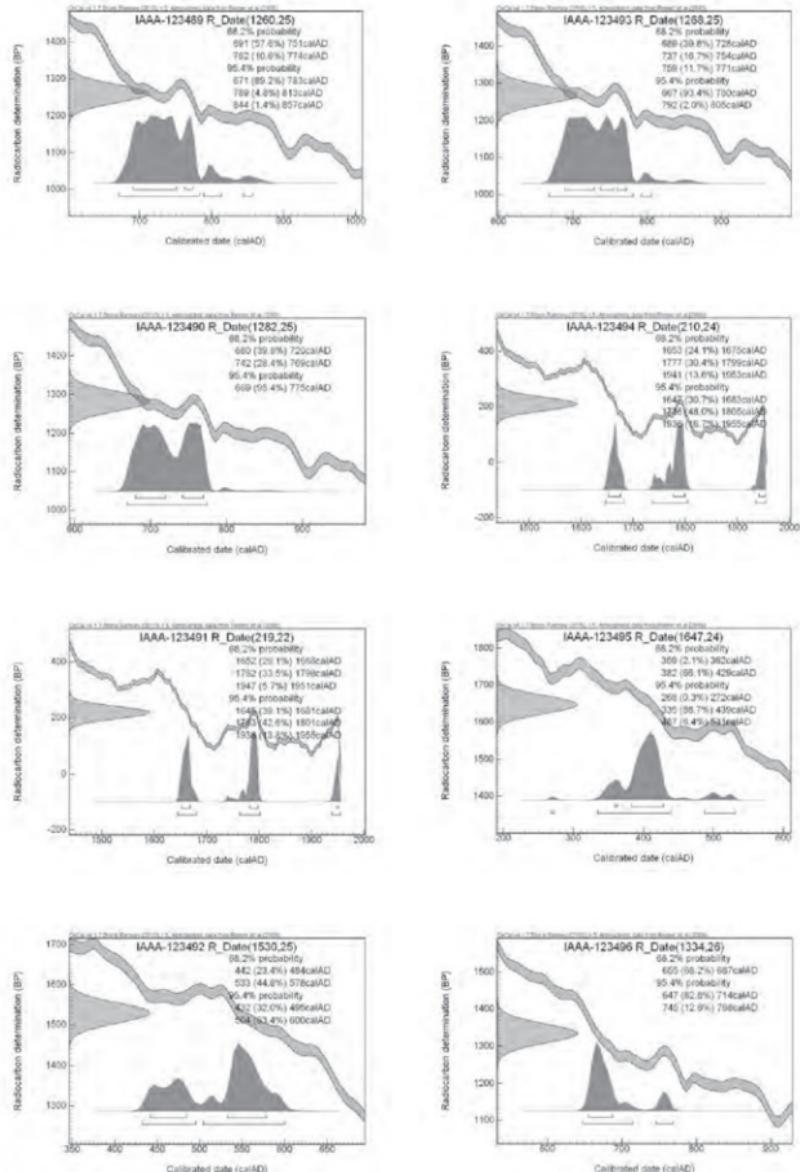
試料の炭素含有率は、44%（No.4）、39%（No.5）という通常より若干低い値を示すものも見られるが、他はすべて50%を超えており、化学処理、測定上の問題は特に認められない。

引用・参考文献

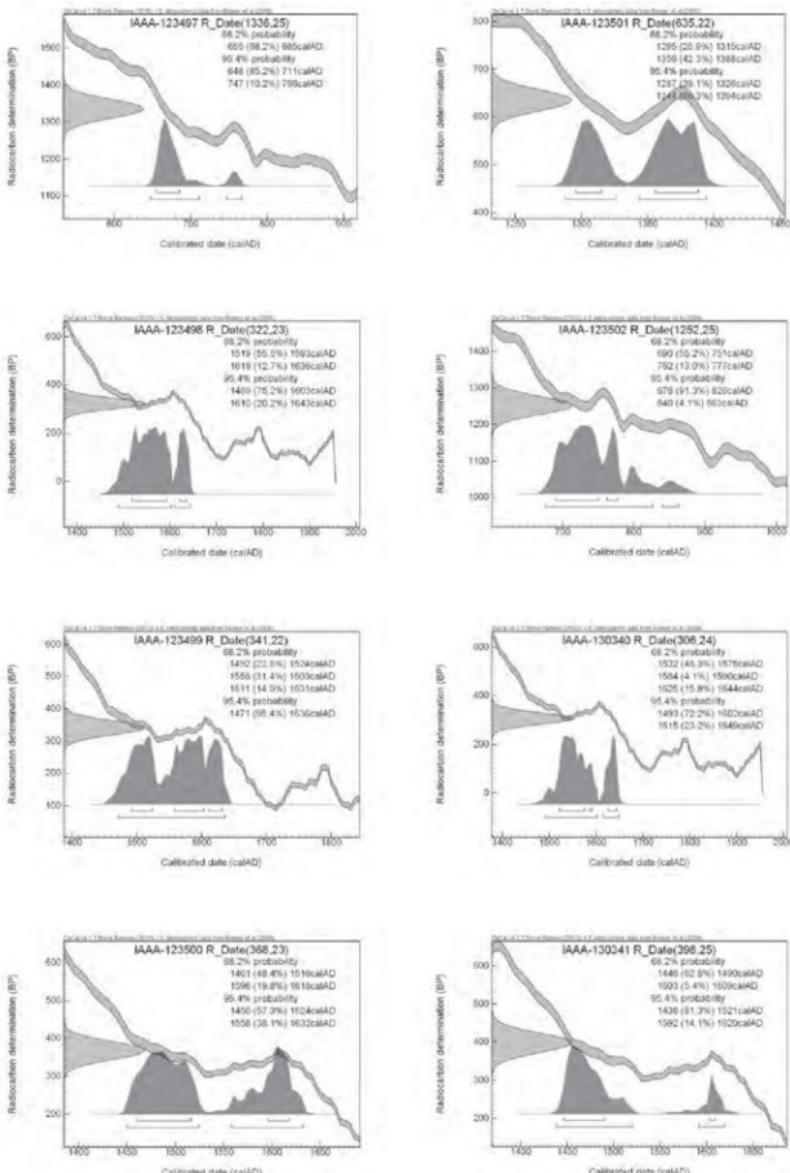
- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1) p.377 ~ p.360
 Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50.000 years cal BP, Radiocarbon 51(4) p.1111 ~ p.1150
 Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, Radiocarbon 19 (3) p.355 ~ p.363



第4図 曆年較正年代グラフ（1）



第5図 历年較正年代グラフ（2）



第6図 暦年較正年代グラフ (3)

2 出土木製品樹種同定

(株)吉田生物研究所

A 試料と観察方法

試料は、馳上遺跡・西谷地b遺跡から出土した木製品のうち、服飾品1点、用途不明品3点の合計4点である(表5)。観察方法は、剃刀で木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。使用顕微鏡はNikonDS-Fiである。

B 結 果

樹種同定結果(針葉樹1種、広葉樹2種)の表5と顕微鏡写真を示し、以下に各種の解剖学的特徴を記す。

1) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujopsis* sp.)

(遺物No.2,3)(写真No.2,3)

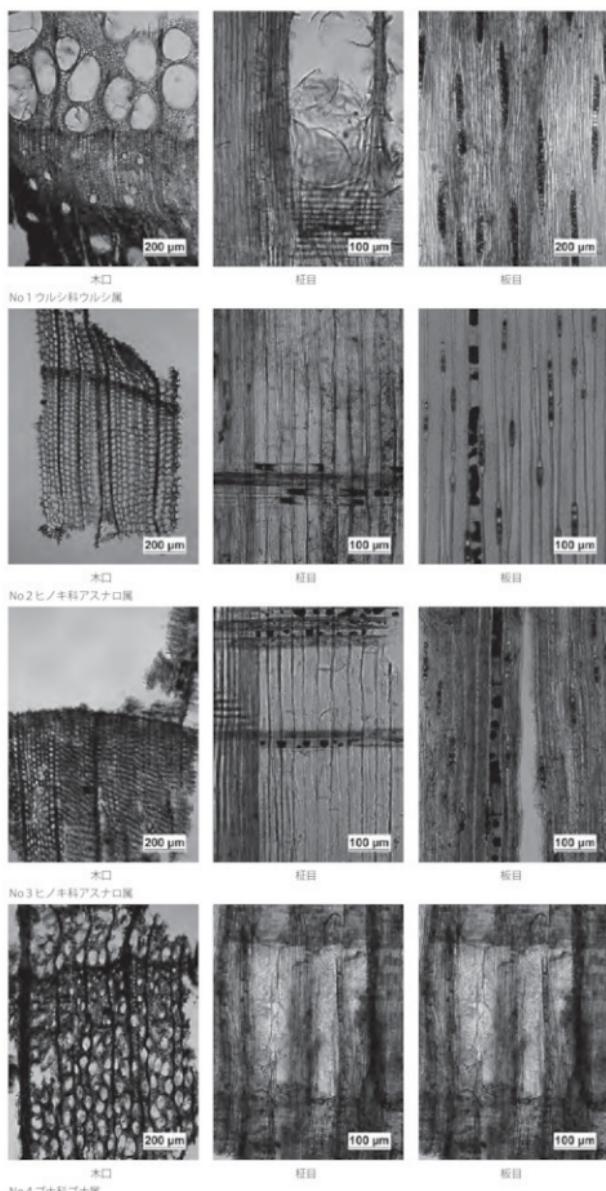
木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ、アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

表5 樹種同定分析試料一覧

試料No	遺物番号	出土地点	遺物名	樹種
1	163	B区溝跡SD726	遺歴下駄	ウルシ科ウルシ属
2	164	B区溝跡SD864	板材	ヒノキ科アスナロ属
3	165	B区溝跡SD864	棒状木製品	ヒノキ科アスナロ属
4	166	B区溝跡SD864	漆製品	ブナ科ブナ属

引用・参考文献

- 林昭三 1991 「日本産木材顕微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所
 伊東隆夫 1994 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ~V」 京都大学木質科学研究所
 烏地謙・伊東隆夫 1988 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版
 北村四郎・村田源 1979 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社
 奈良国立文化財研究所 1985 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」
 奈良国立文化財研究所 1993 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」



第7図 樹種同定分析試料顕微鏡写真

3 漆製品の塗膜構造調査

(株)吉田生物研究所

A 試料と分析方法

B区溝跡SD864出土の漆塗り製品について、制作技法を復元する目的で塗膜構造調査を行った。調査は、本体から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片ブレバラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

B 断面観察結果

塗膜構造：塗層が観察された。塗層の下面には、下地の混和材が付着していた。

下地：塗層の下面に、ごく微量の炭化物が付着していた。これは下地の混和材である。膠着剤は漆か柿渋かの可能性があるが、ごく一部しか観察できないため、どちらかは不明である。

塗層：極めて厚い層厚の、黄褐色を呈する透明塗層が1層観察された。層の中には、多数の気泡が認められた。精製度合いがあまり高くない状態を示している。

C 摘要

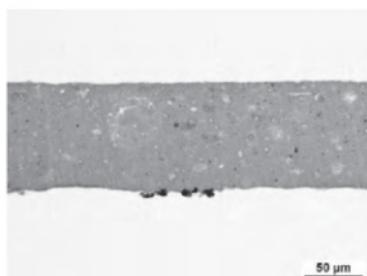
山形県に所在する駒上遺跡・西谷地遺跡から出土した、漆製品の塗膜分析を行った。その結果、ブナ属の素地の上に、何らかの膠着剤に木炭粉を混和した下地が施され、その上に顔料を混和していない透明漆が1層施された。この透明漆には気泡が多数含まれており、精製度合いがあまり高くなかった様子を示している。



第8図 漆製品（表面）



第9図 漆製品（裏面）



第10図 漆製品の断面拡大

表6 漆塗膜分析試料一覧

試料No	遺物番号	出土地点	遺物名	樹種	概要
1	166	B区 SD864-F	漆製品	ブナ属	何らかの漆製品の口縁部分
塗膜構造分析（下層から）					
試料No	品名	部位	下地	塗膜構造	顔料
1	漆製品	剥離片	膠着剤 ?	混和材 炭化物	透明漆1層 —

4 胎土分析

パリノ・サーヴェイ（株）

A 試料と分析方法

駒上遺跡第5次・西谷地b遺跡第3次調査において出土した平安時代とされる須恵器片2点と近世の陶器とされる捕鉢片1点の合計3点である。

当社では、これまでにも山形盆地や庄内平野に分布する古代の遺跡から出土した須恵器の胎土分析を行っている。高温焼成と胎土中の砂粒が少ない須恵器の胎土の特性により、分析手法は薄片作製観察と蛍光X線分析を併用し、両結果を合わせて解析を行っている。以下に各手法について述べる。

(1) 薄片作製観察

薄片観察は、胎土における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報が多い。この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか（1999）の方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるため、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。以下に手順を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顯微鏡による岩石学的な手法を行い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにし

た。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径0.5mm以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを示す。

(2) 蛍光X線分析

波長分散型蛍光X線分析装置を用い、ガラスピード法により分析を実施した。測定用のプログラムは、定量アプリケーションプログラムのFP定量法を使用し、 SiO_2 、 TiO_2 、 Al_2O_3 、 Fe_2O_3 、 MnO 、 MgO 、 CaO 、 Na_2O 、 K_2O 、 P_2O_5 の主要10元素および Rb 、 Sr 、 Y 、 Zr 、 Ba の微量元素について定量分析を実施した。なお、標準試料には独立行政法人産業技術総合研究所の地球化学会標準試料（JA-1JA-2JA-3JB-1aJB-2JB-3JCh-1JF-1JF-2JG-1aJG-2JG-3JGb-1JGb-2JH-1JLk-1JR-1JR-2JR-3JSd-1JSd-2JSd-3JSI-1JSI-2JSy-1）を用いた。

1) 装置

（株）リガク製 走査型蛍光X線分析装置 ZSX Primus III + (FP 定量法アプリケーション)

2) 試料作成

機械乾燥（110°C）した試料を、振動ミル（平工製作所製TI100: 10ml容タンクステンカーバイト容器）で粉碎・混合し、ガラスピードを表7の条件で作成した。

3) 測定条件

上記作成したガラスピードを専用ホルダーにセットし、走査型蛍光X線分析装置（（株）リガク製 ZSX Primus III +）を用い、表7の条件で測定を実施した。

表7 蛍光X線装置・ガラスピード作成条件

ターゲット	Rh	溶融装置	自動剥離機構付理学実験機工業社製 高周波ビートサンプラー（3491AI）
管電圧 (kV)	50	溶剤及び希釈率	融剤 (Spectroflux 100B) 5.000g 試料 0.500g
管電流 (mA)	50	剥離剤	Liq (溶融中1回投入)
試料マスク	30mm φ	溶融温度	1200°C (約7分)
試料スピン	ON		
ダイアフラム	30mm φ		
測定雰囲気	真空		

B 結 果

(1) 薄片作製観察

No.1: 砂粒の種類構成では、石英の鉱物片が多く、次いで斜長石の鉱物片も多い。他に少量のカリ長石の鉱物片や凝灰岩、花崗岩類の岩石片を伴い、微量の黒雲母の鉱物片、頁岩、流紋岩・ディサイト、多結晶石英、ホルンフェルスなどの岩石片や火山ガラスなどが含まれる。火山ガラスの形態は平板状のバブルウォール型と発泡した軽石型が混在する。長石類の周縁部が微弱に溶融していることから、五十嵐（2007）による焼成温度推定基準に従えば（以下同様）、本試料の焼成温度は1,150°C土と推定される。砂粒全体の粒径組成は、粗粒砂と中粒砂が同程度で突出して多い。碎屑物・基質・孔隙における碎屑物の割合は、15%から20%の範囲に入る。

No.2: 砂粒の種類構成では、石英の鉱物片と凝灰岩の岩石片が主体を占め、他に少量の斜長石や不透明鉱物の鉱物片を伴い、微量のカリ長石や斜方輝石の鉱物片と多

結晶石英の岩石片が含まれる。長石類は著しく溶融し、斜長石には針状ムライトが生成していることから、焼成温度は1,200°C土と推定される。砂全体の粒径組成は、細粒砂をモードとするが、極細粒砂や粗粒シルトの割合も比較的高い。碎屑物・基質・孔隙における碎屑物の割合は、15%程度である。

No.3: 砂粒の種類構成では石英の鉱物片が多く、次いで斜長石の鉱物片と火山ガラスが多い。石英の中には融食状石英があり、また火山ガラスはバブルウォール型を呈するが、溶融によって生じたガラスと識別が難しいものも存在する。他に少量～微量の珪質頁岩、凝灰岩、流紋岩・ディサイト、多結晶石英、花崗岩類の各岩石片が含まれる。長石類は著しく溶融し、斜長石には針状ムライトが生成している。さらに基質も溶融しており、発泡組織が形成されている。これらの状況から焼成温度は1,200°C土と推定される。砂全体の粒径組成は、細粒砂をモードとし、ほぼ対象に近い山形のヒストグラムを呈する。碎屑物・基質・孔隙における碎屑物の割合は、15%程度である。

表8 薄片観察結果

No.	砂粒区分	砂粒の種類構成												合計			
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	黒雲母	不透明鉱物	頁岩	凝灰岩	流紋岩	多結晶石英	花崗岩類	カルカフォーライト	葉青岩	火山ガラス	ジル・粘土	植物片
1 古代 須恵器 質	砂	圓錐															0
	砂	地和砂	1	1		1			1						1		5
	砂	粗粒砂	22	5	13		2	1	5	4	2	11		1	1	2	69
	砂	中粒砂	23	11	14		1		8	4	2	5	1	1			70
	砂	細粒砂	12	4	14		1		2		1	2			1		37
	砂	地和砂	7		3										1		11
	砂	粗粒シルト	4	1	1												6
	砂	中粒シルト	2														2
	基質																932
	孔隙																40
	備考	長石類はリムが微弱に消融している。火山ガラスはバブルウォール型と軽石型。															
2 古代 須恵器 長頭瓶	砂	圓錐															0
	砂	地和砂															1
	砂	粗粒砂															0
	砂	粗粒砂	1	1	1		1		2								6
	砂	中粒砂	9		3	1			14		1						28
	砂	地和砂	8		5		2		5								20
	砂	粗粒シルト	16		2		3										21
	砂	中粒シルト	3														3
	基質																490
	孔隙																24
	備考	長石類は著しく溶融し、斜長石には針状ムライトが生成している。基質には無化鉄が多く、暗褐色を示す。															
3 近代 植村	砂	圓錐															0
	砂	地和砂	1									1					2
	砂	粗粒砂	3		2							1					6
	砂	中粒砂	8		4			1	2	1	3	1		6			26
	砂	細粒砂	17		9			1	3	1	1			15			47
	砂	地和砂	15		2				2	1							20
	砂	粗粒シルト	10		2												12
	砂	中粒シルト	1														1
	基質																655
	孔隙																43
	備考	長石類の溶融が著しく、斜長石には針状ムライトが生成している。基質も溶融し、周辺組織が崩壊されている。 火山ガラスはバブルウォール型を呈するが、周囲で生じたガラスと隔壁が離れるものも存在する。無化鉄も見られる。															

表9 蛍光X線分析定量測定条件

測定元素	測定スペクトル	1次フィルタ	アッテネータ	スリット	分光結晶	検出器	PHA		角度(deg)			計測時間(s)	
							LL	UL	Peak	+BG	-BG	Peak	BG
SiO ₂	Si-K α	OUT	OUT	S4	PET	PC	120	300	109.030	105.00	113.00	40	20
TiO ₂	Ti-K α	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	80	340	86.140	84.50	88.50	60	60
Al ₂ O ₃	Al-K α	OUT	OUT	S4	PET	PC	110	300	144.770	138.00	-	40	20
Fe ₂ O ₃	Fe-K α	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	90	320	57.494	55.50	60.00	40	20
MnO	Mn-K α	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	90	20	62.966	62.00	63.68	60	20
MgO	Mg-K α	OUT	OUT	S4	RX25	PC	110	420	39.596	37.00-37.50 (0.10step) (0.20step)	41.50-42.50 (0.04step)	60	20
CaO	Ca-K α	OUT	OUT	S4	LIF(200)	PC	120	290	113.124	110.20	115.90	40	20
Na ₂ O	Na-K α	OUT	OUT	S4	RX25	PC	120	300	48.134	45.90	50.30	60	20
K ₂ O	K-K α	OUT	OUT	S4	LIF(200)	PC	120	280	136.674	-	142.00	40	20
P2O ₅	P-K α	OUT	OUT	S4	GE	PC	150	270	141.096	138.10	143.20	60	20
Rb	Rb-K α	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	26.598	25.60-25.80 (0.10step) (0.04step)	27.06-27.14 (0.04step)	120	40
Sr	Sr-K α	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	25.134	24.40-24.70 (0.10step) (0.04step)	25.60-25.80 (0.04step)	120	40
Y	Y-K α	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	300	23.758	23.04-23.16 (0.06step)	24.40-24.50 (0.10step)	120	40
Zr	Zr-K α	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	310	22.536	22.16	23.04	120	60
Ba	Ba-L α	OUT	OUT	S2	LIF(200)	SC	100	290	87.164	84.50	88.50	120	60

表10 蛍光X線分析結果

No.	主要元素									微量元素					合計 (%)	
	SiO ₂ (%)	TiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	MnO (%)	MgO (%)	CaO (%)	Na ₂ O (%)	K ₂ O (%)	P ₂ O ₅ (ppm)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Y (ppm)	Zr (ppm)	Ba (ppm)	
1	69.37	0.79	19.64	5.05	0.02	0.95	0.44	0.87	1.66	0.05	108	72	20	177	396	98.92
2	68.73	0.81	19.68	5.01	0.02	0.88	0.59	1.43	2.19	0.03	108	90	27	193	494	99.46
3	69.98	0.42	20.66	3.92	0.04	0.49	0.71	1.43	1.71	0.03	81	74	37	225	499	99.48

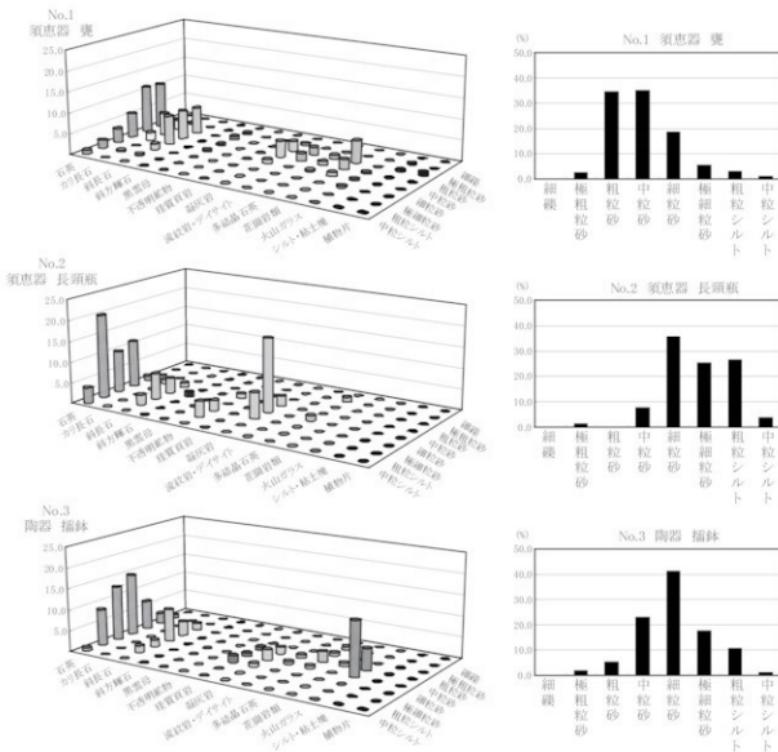
(2) 蛍光X線分析

各試料の化学組成を示す（表9・第13図）。

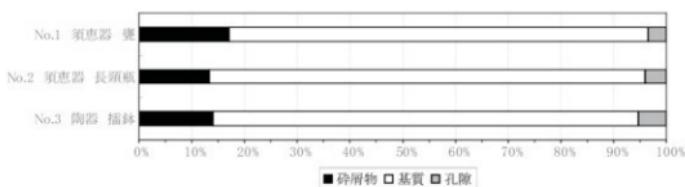
- a) 化学組成中で最も主要な元素のSiO₂とAl₂O₃。
- b) 粘土の母材を考える上で長石類（主にカリ長石、斜長石）の種類構成は重要である。このことから、長石類の主要元素であるCaO、Na₂O、K₂Oの3者を選択し、長石全体におけるアルカリ長石およびカリ長石の割合を定性的に見る。実際には、長石類全体におけるアルカリ長石の割合 (Na₂O + K₂O) / (CaO + Na₂O + K₂O) を横軸とし、アルカリ長石におけるカリ長石の割合 K₂O / (Na₂O + K₂O) を縦軸とする。
- c) 削石類や黒雲母、角閃石など有色鉱物における主要な元素。この場合、指標としてこれらの有色鉱物の主要な元素のうち、TiO₂、Fe₂O₃、MgOを選択し、Fe₂O₃を分母としたTiO₂、MgOの割合を見る。
- d) 各微量元素を選択する。組み合わせはRb-SrとZr-Baとする。作成した5つの散布図を概観すると、いずれの図においても3点間の組成は近接している。より詳細にみれば、長石類主要元素と有色鉱物主要元素の図において須恵器2点の組成がより近く、描録の組成はこれらより若干離れた位置にある。ただし、微量元素を軸とした2つの図では、3点間の差異はほぼ同程度である。

C考 察

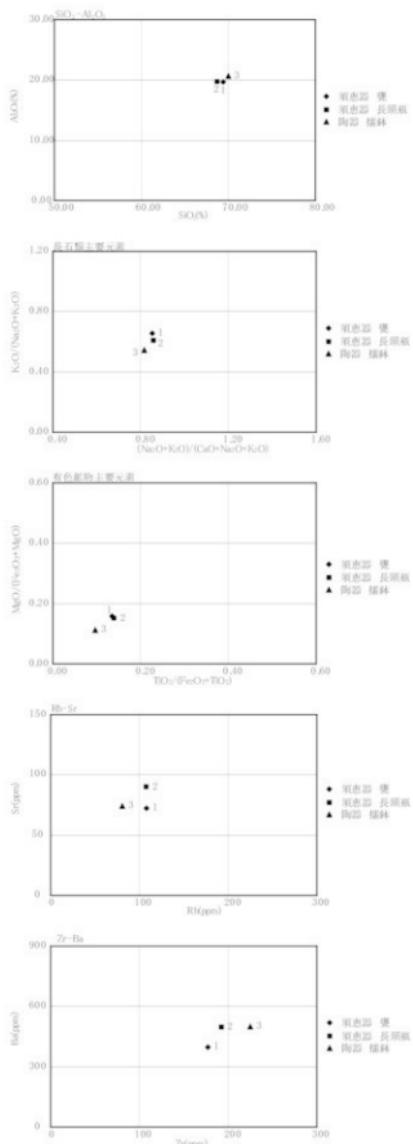
これまでの山形県内各地における古代の須恵器の胎土分析事例では、胎土中に含まれる岩片の種類構成が、最上川沿いに分布する米沢盆地から山形盆地、新庄盆地を経て庄内平野に至る各盆地および平野の地質学的背景と一致しているという試料がほとんどであった。大沢ほか(1986;1988) や日本の地質「東北地方」編集委員会(1989)、久保ほか(2003)などを参照すれば、それぞれの盆地および平野の背後の山地を構成する地質の主体は、頁岩、珪質頁岩、凝灰岩を主要な構成要素とする新第三紀中新世の堆積岩類からなり、また、同時期の流紋岩・デイサイトからなる溶岩も分布している。さらに、新第三紀の地質の背後には白亜紀～古第三紀に貫入した花崗岩類の分布も記載されている。上述した各盆地および平野は、多種の地質が分布する山地を流下した河川が運んできた碎屑物の堆積により構成されており、堆積物中には多種の地質に由来する岩石片が混在している。これまでの須恵器の胎土分析試料においても上述した各地質に由来する岩石片が混在していることが確認されたことにより、最上川沿いに分布する盆地・平野の地質学的背景と一致としたのである。おそらく須恵器



第11図 鉱物・岩石出現頻度及び砂の粒径組成



第12図 碎屑物・基質・孔隙の割合



第13図 胎土分析組成散布図

窯の立地条件の一つとして原材料の入手が容易すなわち窯の周辺地に原材料となる粘土や砂が分布するということがあったと考えられる。その場合、胎土の岩石組成が最上川沿いの盆地・平野の地質学的背景と一致することは、その須恵器が最上川沿いの盆地・平野に位置する窯で生産されたことを示していると言える。今回の須恵器試料2点のうち、No.1の岩石組成は、上述した各地質に由来する岩石片が混在している。したがって、No.1の須恵器は、最上川沿いの盆地・平野に位置する窯で生産されたものである可能性が高い。現時点では、米沢盆地、山形盆地、新庄盆地、庄内平野の各地域の違いを薄片観察から見出すことはできない。

No.2の岩片組成は、凝灰岩が突出して多いことや凝灰岩以外の岩石がほとんど含まれないことなど、明らかに上述した最上川沿いの盆地・平野の地質学的背景とは異なる。なお、No.2の焼成温度を考慮すれば、鉱物片や岩石片の一部は溶融しており、その鉱物・岩石組成は焼成前の素地土のそれとは等しくない。しかし、凝灰岩が堆積岩類や花崗岩類よりも高温に対して溶け難いということはないことから、高温により凝灰岩のみが溶け残ったということはない。すなわち素地土の岩石組成を考えても堆積岩類や花崗岩類はほとんど含まれていなかったことが推定される。したがって、No.2の産地は、最上川沿いの盆地・平野に分布する窯ではない可能性が高い。その特異な岩石組成からは、窯は凝灰岩から構成される山地の山間地に立地するかあるいは凝灰岩の分布域内に取り囲まれた盆地や平野に立地するなどが想定される。凝灰岩の分布する山間地は最上川流域にも存在し、東北地方以外の日本各地にも存在する。一方、凝灰岩の分布域内に取り囲まれた盆地・平野は最上川流域には認められないが、日本の各地には存在する。No.2の須恵器の産地については、今後の分析事例において類似の岩石組成を有する試料の出現を待って検討する必要がある。

蛍光X線分析による古代の須恵器の分析事例では、庄内平野に位置する荒沢遺跡、泉森南窯跡、山形盆地西部の寒河江市に位置する平野山窯跡、山形盆地東部の天童市に位置する二子沢古窯跡、山形盆地南縁の丘陵に位置する小松原窯跡、オサヤズ窯跡、三本木窯跡、そして長井盆地に位置する蛇崩窯跡と米沢盆地北部に位置する

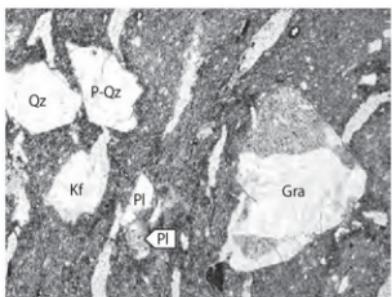
平野古窯跡の各遺跡がある。現時点では、各窯跡試料とともに分析試料数が少ないために、同一窯跡出土試料間の組成のばらつき状況が明瞭でない部分もあるが、散布図上での分布範囲を比較すると、庄内平野の窯跡産の組成は、他の地域の窯跡産の組成との差異が認められるが、山形盆地の窯跡産と米沢盆地の窯跡産との化学組成の違いは、散布図上からは区別することは難しい。このような状況下で、今回の試料の化学組成を比べてみると、やはり庄内平野の窯跡産とは異なることが看取でき、山形盆地および米沢盆地の窯跡産の試料との近似性が窺える。ただし、上述したようにNo.2については岩石組成から山形盆地および米沢盆地の窯跡産の可能性は低いから、今回の須恵器試料ではNo.1について、山形盆地あるいは米沢盆地に分布する窯跡産である可能性が高いことが言える。今後、山形盆地および米沢盆地に分布する窯跡出土試料の分析事例を蓄積することができれば、両者の違いを見出せる可能性もあると考えられる。

No.3については、発掘調査所見により福島盆地北側の山地に位置する岸窯産の可能性が指摘されている。福

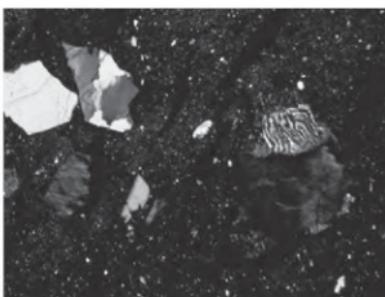
島盆地北側の地質学的背景は、上述した最上川沿いの盆地・平野の地質学的背景とほぼ同様である。したがって、岸窯産の擂鉢の岩石組成も、上述した最上川沿いの盆地・平野の窯跡産の須恵器の岩石組成と類似すると考えられる。No.3の岩石組成は、多種の岩石が混在し、今回の分析により最上川沿いの盆地・平野の窯跡産の可能性が高いとされたNo.1の岩石組成ともよく類似する。なお、No.3には火山ガラスが多く含まれているが、火山ガラスの形態がバブルウォール型であることから、広域に分布するテフラ由来するものであると考えられる。したがってNo.3の火山ガラスの産状は、地域的な指標というよりも、その産地で使用された材料の特徴と言える。ここで、本遺跡と近接する堤屋敷遺跡から出土した、岸窯産とされた擂鉢の当社による分析例と比較すると、多種の岩石が混在することと火山ガラスを多く含むという特徴が、No.3とよく一致する。また、蛍光X線分析による各散布図上の位置も、堤屋敷遺跡出土の岸窯産とされた擂鉢のそれと近似した位置にある。以上のことから、No.3は岸窯産の擂鉢である可能性が高いと考えられる。

引用・参考文献

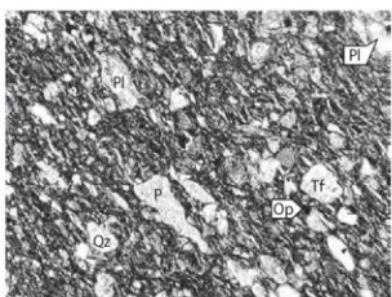
- 五十嵐俊雄 2007 「土師器・須恵器等に関する焼成温度推定手法の開発」『徳永重元博士献呈論集』p.281～p.297
パリノ・サーヴェイ株式会社
- 久保和也ほか 2003 『20万分の1地質図幅「福島」』 産総研地質調査総合センター
- 松田順一郎ほか 1999 「瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察—岩石学的・堆積学的による—」『日本文化財科学会 第16回大会発表要旨集』p.120～p.121 日本国文化財科学会
- 日本の地質「東北地方」編集委員会 1989 『日本の地質2 東北地方』 共立出版
- 大沢禮ほか 1986 『20万分の1地質図幅「仙台」』 地質調査所
- 大沢禮ほか 1988 『20万分の1地質図幅「新庄および酒田」』 地質調査所



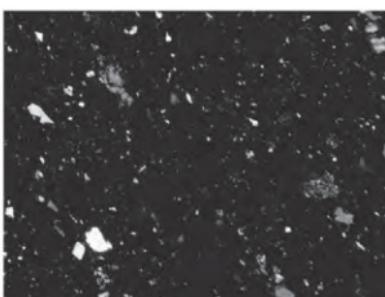
1.No.1(須恵器 長 A区 ST239)



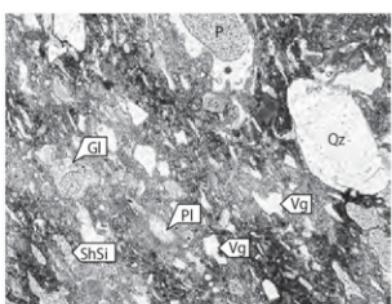
1.No.1(須恵器 長 A区 ST239)



2.No.2(須恵器 長頸瓶 B区 SG651)



2.No.2(須恵器 長頸瓶 B区 SG651)



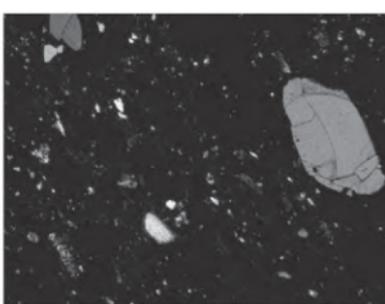
3.No.3(陶器 捣鉢 A区 SK1)

Qz:石英, Kf:カリ長石, Pl:斜長石, Op:不透明氈物, ShSi:珪質頁岩, Tf:凝灰岩,

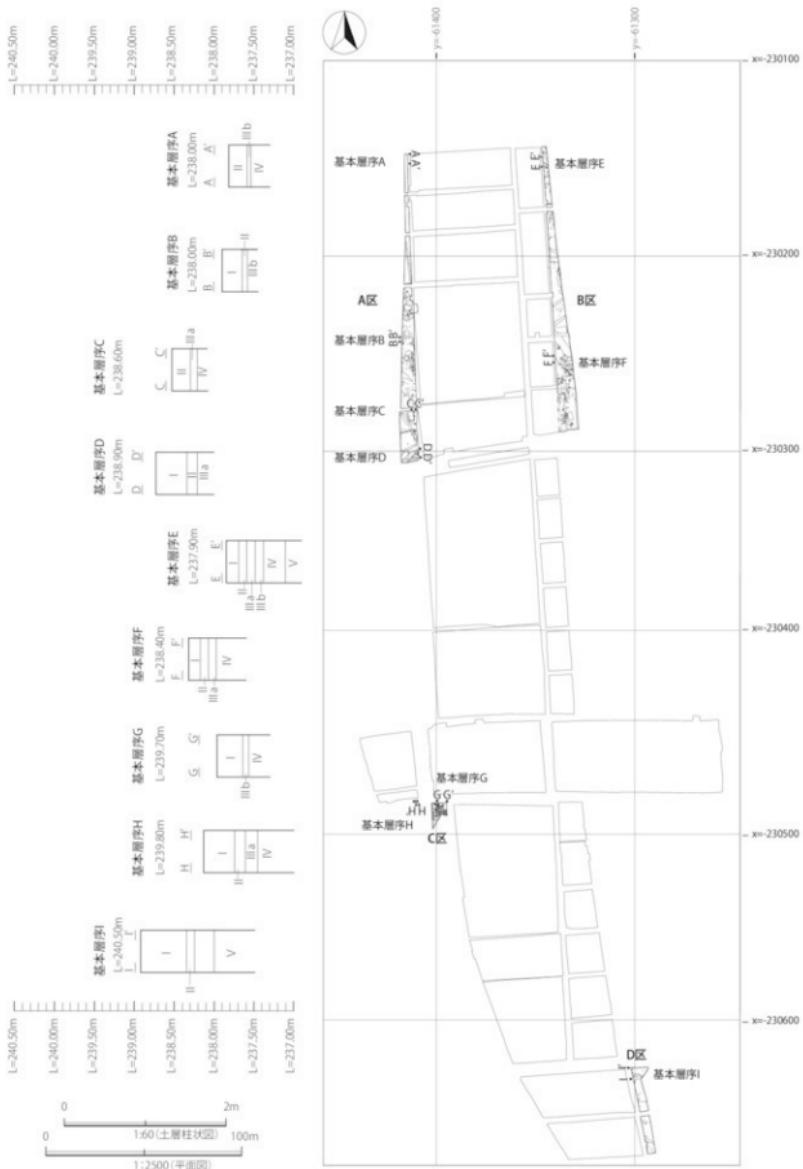
P-Qz:多結晶石英, Gra:花崗岩, Vg:火山ガラス, Gl:溶融ガラス, P:孔隙。

写真左列は下方ボーラー、写真右列は直交ボーラー下。

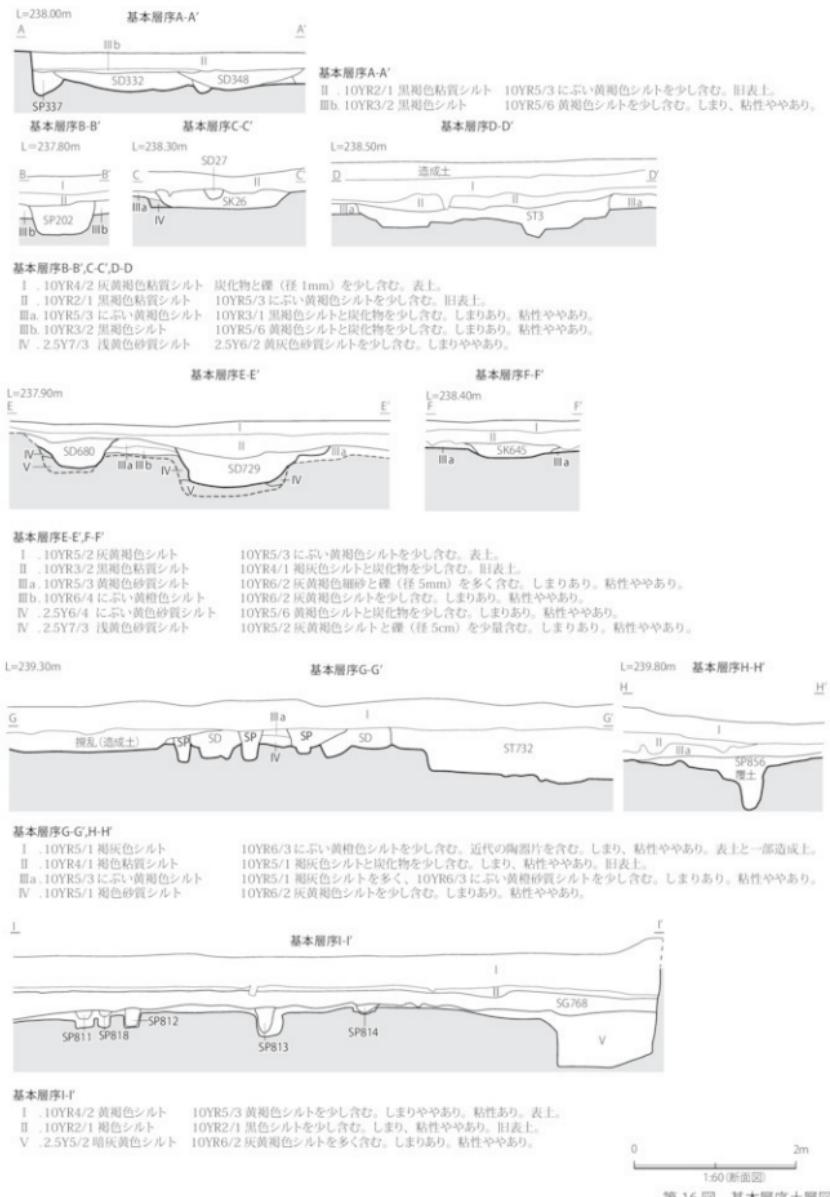
0.5mm



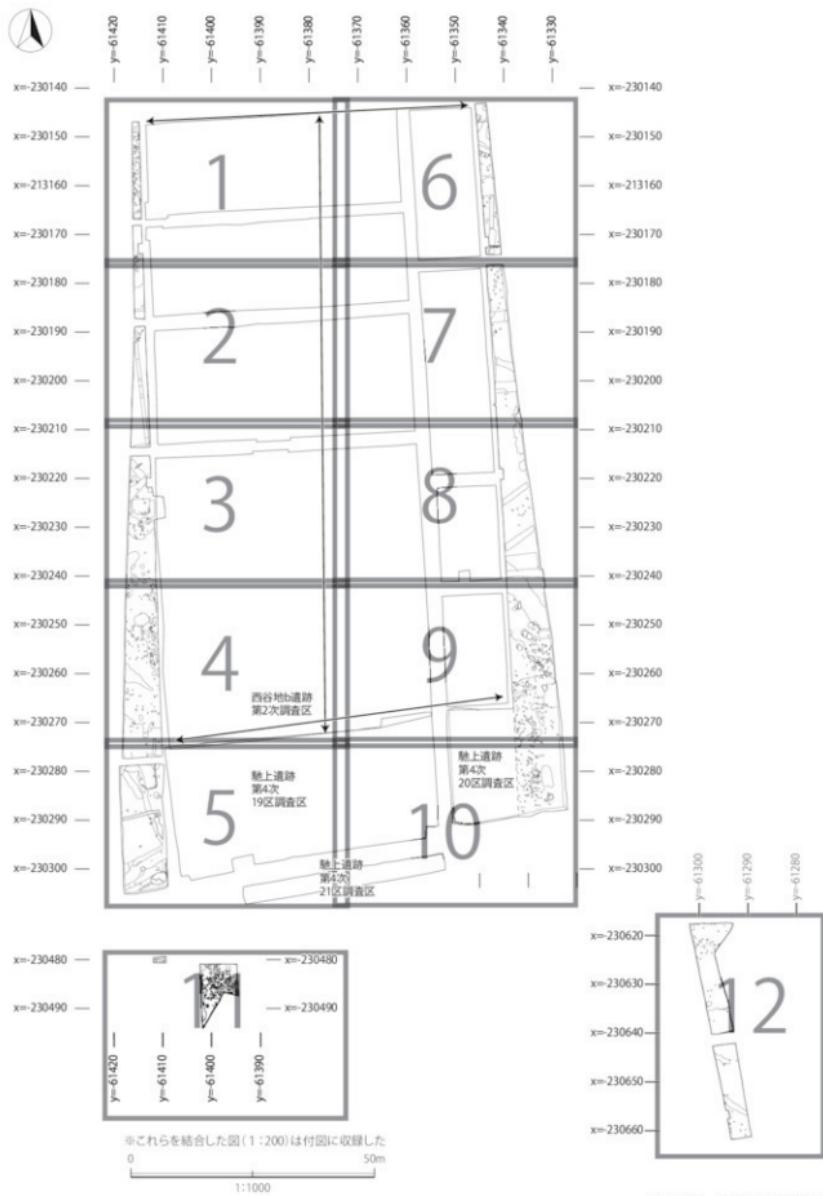
第14図 薄片観察顕微鏡拡大図



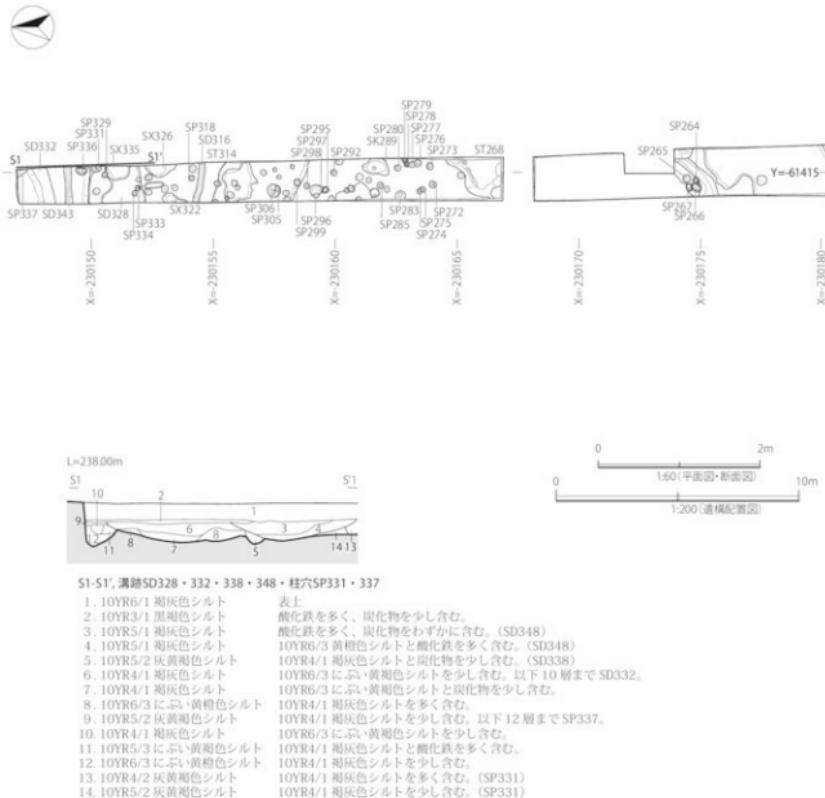
第15図 基本層序位置図



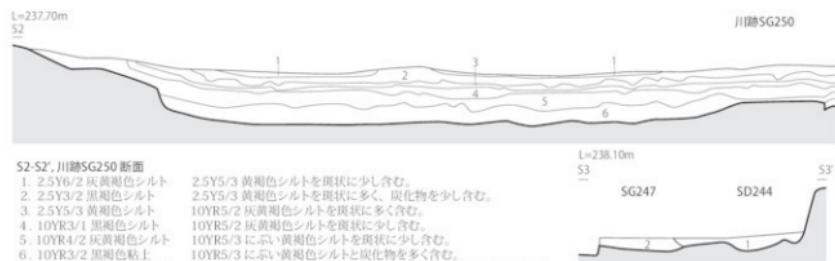
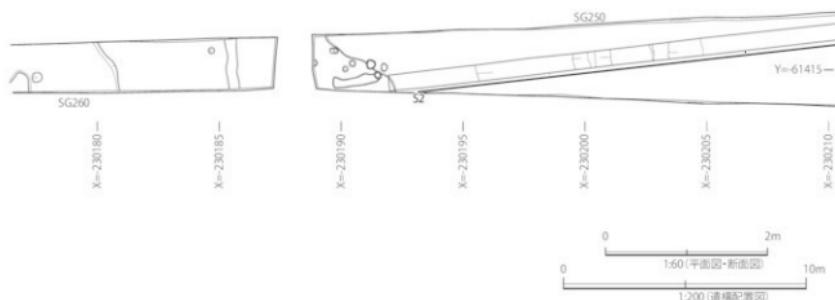
第16図 基本層序土層図



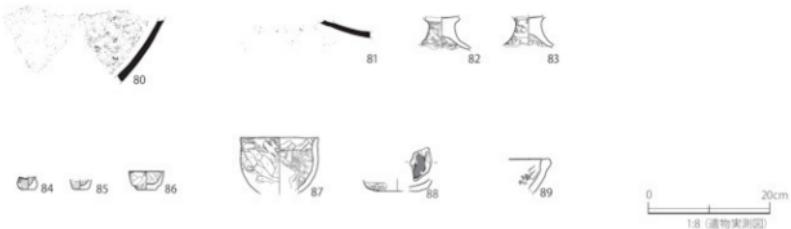
第 17 図 遺構配置図詳細図



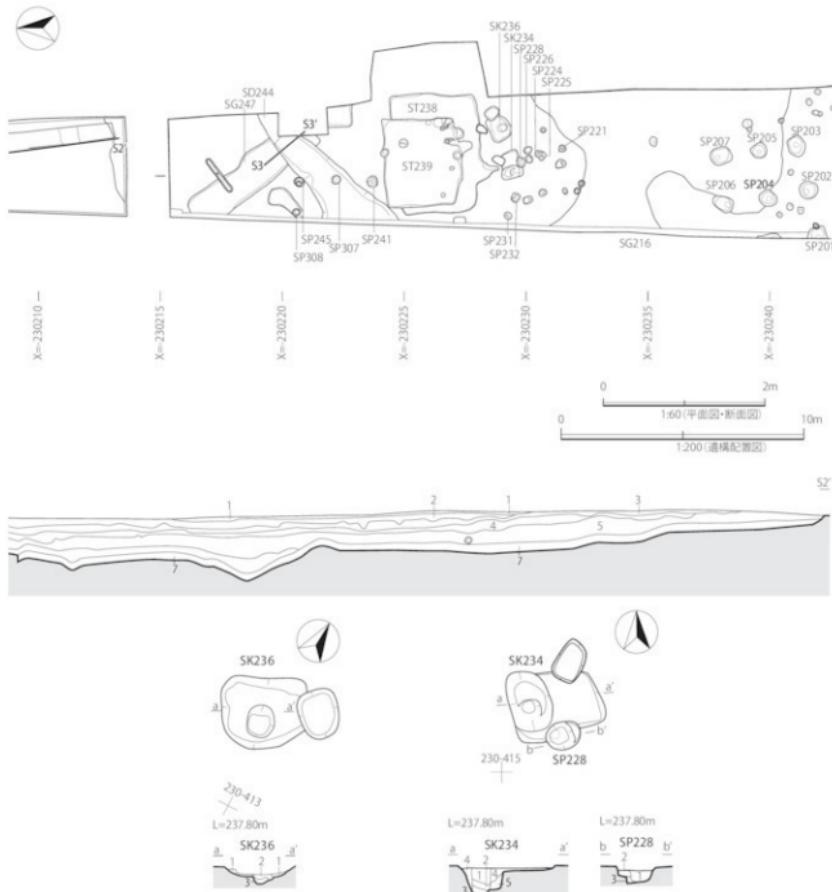
第18図 遺構配置図1・溝跡 SD328・332・338・348・柱穴 SP331・337・土坑 SK289



S3-S3' 溝跡SD244・川跡SG247
1. 10YR4/1 褐灰色シルト
2. 10YR5/2 灰黄褐色シルト
礫（径 5mm）と酸化鉄を少し含む。(SD244)
礫（径 1cm）と酸化鉄を少し含む。(SG247)



第19図 遺構配置図2・溝跡SD244・川跡SG247・250

**土坑SK236**

1. IORY3/2 黒褐色シルト
2. IORY4/2 灰黄褐色シルト
3. IORY3/1 黒褐色粘土
4. IORY5/2 灰黄褐色シルト
5. IORY3/1 黒褐色シルト
6. IORY5/3 黄褐色シルト

10YR6/4 黄褐色シルトを多く含む。(柱坑)
10YR6/4 黄褐色シルトを多く含む。
礫(径 1mm) をわずかに含む。
10YR6/4 黄褐色シルトを少し含む。
10YR4/2 灰黄褐色シルトを少し含む。
酸化鉄を少し含む。しまりややあり。

土坑SK234

1. IORY3/2 黒褐色シルト
2. IORY4/2 灰黄褐色シルト
3. IORY3/1 黒褐色粘土
4. IORY5/2 灰黄褐色シルト
5. IORY3/1 黒褐色シルト
6. IORY5/3 黄褐色シルト

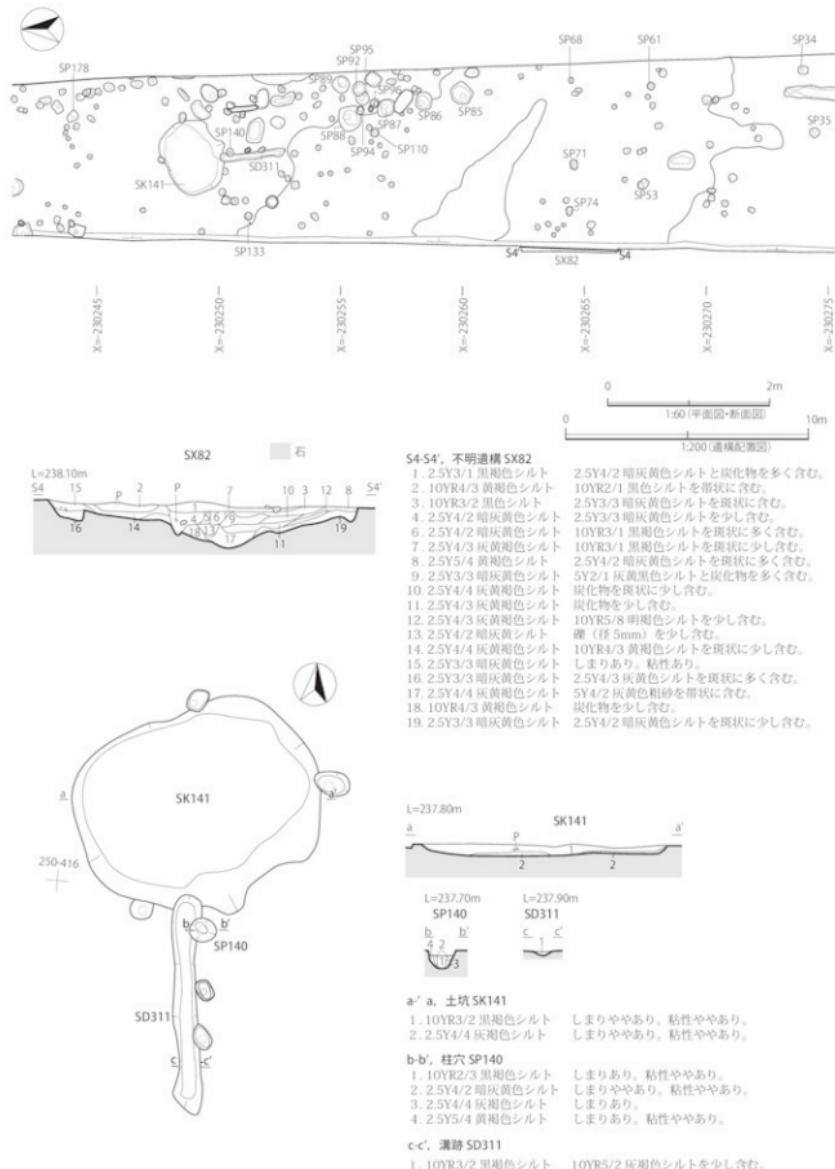
10YR6/4 黄褐色シルトを多く含む。(柱坑)
10YR6/4 黄褐色シルトを多く含む。
礫(径 1mm) をわずかに含む。
10YR6/4 にぶい黄褐色シルトを少し含む。
10YR4/2 灰黄褐色シルトを少し含む。
酸化鉄を少し含む。

柱穴SP228

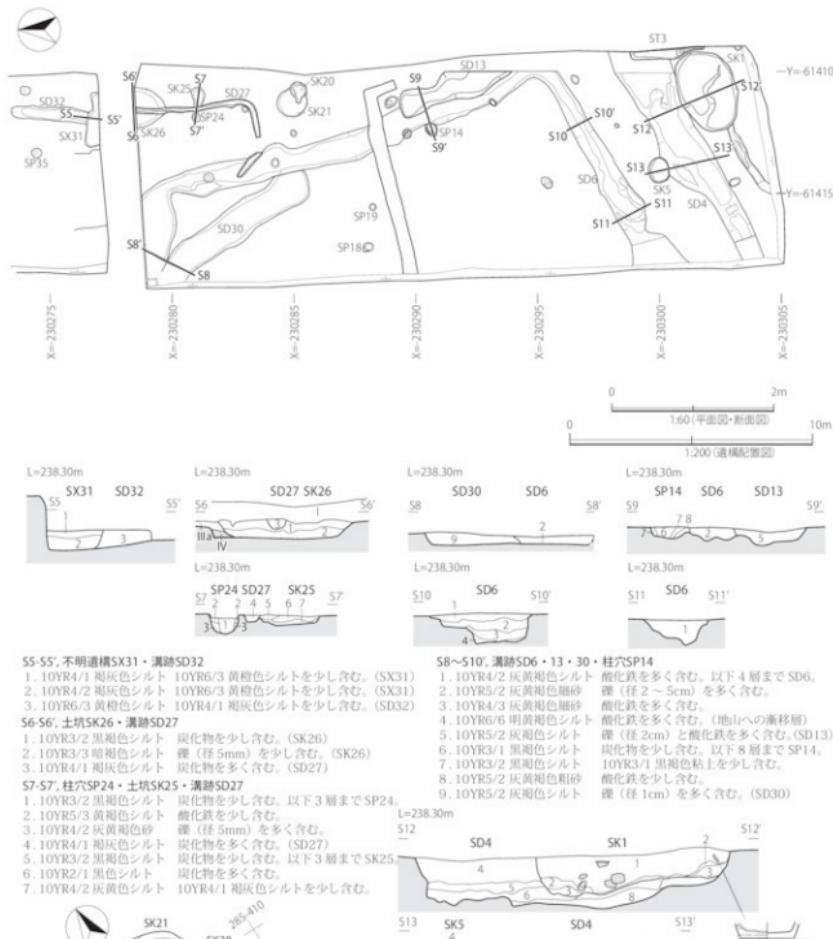
1. IORY3/2 黒褐色シルト
2. IORY4/2 灰黄褐色シルト
3. IORY5/3 黄褐色シルト

10YR5/3 黄褐色シルトを少し含む。
10YR6/4 黄褐色シルトを少し含む。
礫(径 5mm) を多く含む。

第 20 図 遺構配置図 3・土坑 SK234・236・柱穴 SP228



第21図 遺構配置図4・土坑SK141・溝跡SD311・柱穴SP140・不明遺構SX82



S5-S5': 不明構造 SX31 + 溝跡 SD32

1. 10YR4/1 褐灰色シルト 10YR6/3 黄褐色シルトを少し含む。(SX31)
 2. 10YR4/2 褐灰色シルト 10YR6/3 黄褐色シルトを少し含む。(SX31)
 3. 10YR6/3 黄褐色シルト 10YR4/1 褐灰色シルトを少し含む。(SD32)
- S6-S6': 土坑 SK26 + 溝跡 SD27**
1. 10YR3/2 黑褐色シルト 廃化物を少し含む。(SK26)
 2. 10YR5/3 黄褐色シルト 粢 (径 5mm) を少し含む。(SK26)
 3. 10YR4/1 褐灰色シルト 廃化物を多く含む。(SD27)
- S7-S7': 柱穴 SP24 + 土坑 SK25 + 溝跡 SD27**
1. 10YR3/2 黑褐色シルト 廃化物を少し含む。以下 3 層まで SP24。酸化鉄を少し含む。
 2. 10YR5/3 黄褐色シルト 粢 (径 5mm) を多く含む。
 3. 10YR4/2 黄褐色砂 粢 (径 5mm) を多く含む。
 4. 10YR4/1 褐灰色シルト 廃化物を多く含む。(SD27)
 5. 10YR3/2 黑褐色シルト 廃化物を少し含む。以下 3 層まで SK25。
 6. 10YR2/1 黑色シルト 廃化物を多く含む。
 7. 10YR4/2 黄褐色シルト 10YR4/1 褐灰色シルトを少し含む。

S8-S8': 不明構跡 SD13 + 柱穴 SP14

1. 10YR4/2 反黄褐色シルト 酸化鉄を多く含む。以下 4 層まで SD6。隕 (径 2 ~ 5cm) を多く含む。
2. 10YR5/2 反黄褐色細砂 酸化鉄を多く含む。
3. 10YR4/3 黄褐色細砂 酸化鉄を多く含む。
4. 10YR6/6 明黄褐色シルト 酸化鉄を多く含む。(地山への漸移層) 隕 (径 2cm) を多く含む。(SD13)
5. 10YR5/2 黄褐色シルト 10YR3/1 黑褐色シルト 廃化物を少し含む。以下 8 層まで SP14。
6. 10YR3/2 黑褐色シルト 10YR3/1 黑褐色粘土を少し含む。酸化鉄を少し含む。
7. 10YR5/2 反黄褐色シルト 酸化鉄を少し含む。
8. 10YR5/2 反黄褐色シルト 隕 (径 1cm) を多く含む。(SD30)

S9-S9': 柱穴 SP14 + 溝跡 SD13

L=238.30m

9. 10YR5/2 黄褐色シルト 隕 (径 1cm) を多く含む。

L=238.30m

10. 10YR5/2 黄褐色シルト 隕 (径 1cm) を多く含む。

S10-S10': 柱穴 SD6 + 溝跡 SD13

L=238.30m

11. 10YR5/2 黄褐色シルト 隕 (径 1cm) を多く含む。

L=238.30m

12. 10YR5/2 黄褐色シルト 隕 (径 1cm) を多く含む。

S11-S11': 柱穴 SD6 + 柱穴 SD13

L=238.30m

13. 10YR5/2 黄褐色シルト 隕 (径 1cm) を多く含む。

S12-S12': 土坑 SK1 + 5 + 溝跡 SD4

L=238.30m

14. 10YR5/2 黄褐色シルト 隕 (径 1cm) を多く含む。

S13-S13': 土坑 SK1 + 5 + 溝跡 SD4

L=238.30m

15. 10YR5/2 黄褐色シルト 隕 (径 1cm) を多く含む。

S14-S14': 土坑 SK21 + 溝跡 SD1

L=238.30m

16. 10YR3/1 黑褐色シルト 隕 (径 1cm) を多く含む。

S15-S15': 土坑 SK20 + SK21

L=238.30m

17. 10YR3/1 黑褐色シルト 隕 (径 1cm) を多く含む。

S16-S16': 土坑 SK20 + 溝跡 SD1

L=238.30m

18. 10YR2/1 黑色シルト 隕 (径 5mm) を多く含む。

S17-S17': 土坑 SK20 + 溝跡 SD1

L=238.30m

19. 10YR2/1 黑色シルト 隕 (径 5mm) を多く含む。

S18-S18': 土坑 SK20 + 溝跡 SD1

L=238.30m

20. 10YR6/4 黄褐色シルト 被熱面。底面に燒き塊が付着。

S19-S19': 土坑 SK20 + 溝跡 SD1

L=238.30m

21. 10YR4/1 褐灰色シルト 10YR4/1 褐灰色シルトを少し含む。

S20-S20': 土坑 SK20 + 溝跡 SD1

L=238.30m

22. 10YR6/4 黄褐色シルト 10YR6/4 黄褐色シルトを少し含む。

S21-S21': 土坑 SK20 + 溝跡 SD1

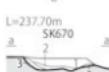
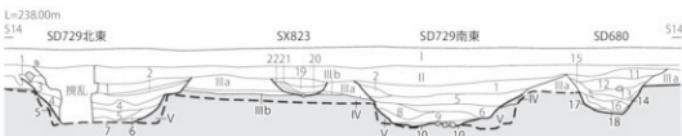
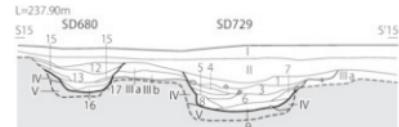
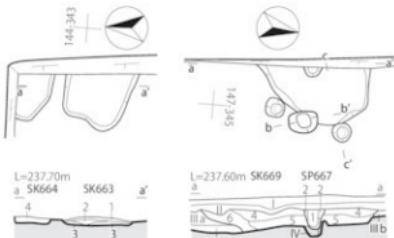
L=238.30m

23. 10YR6/4 黄褐色シルト 10YR6/4 黄褐色シルトを少し含む。

第22図 遺構配置図5・土坑 SK1・5・20・21・25・26・溝跡 SD4・6・13・27・32・柱穴 SP14・24

a-a'・土坑SK663・SK664

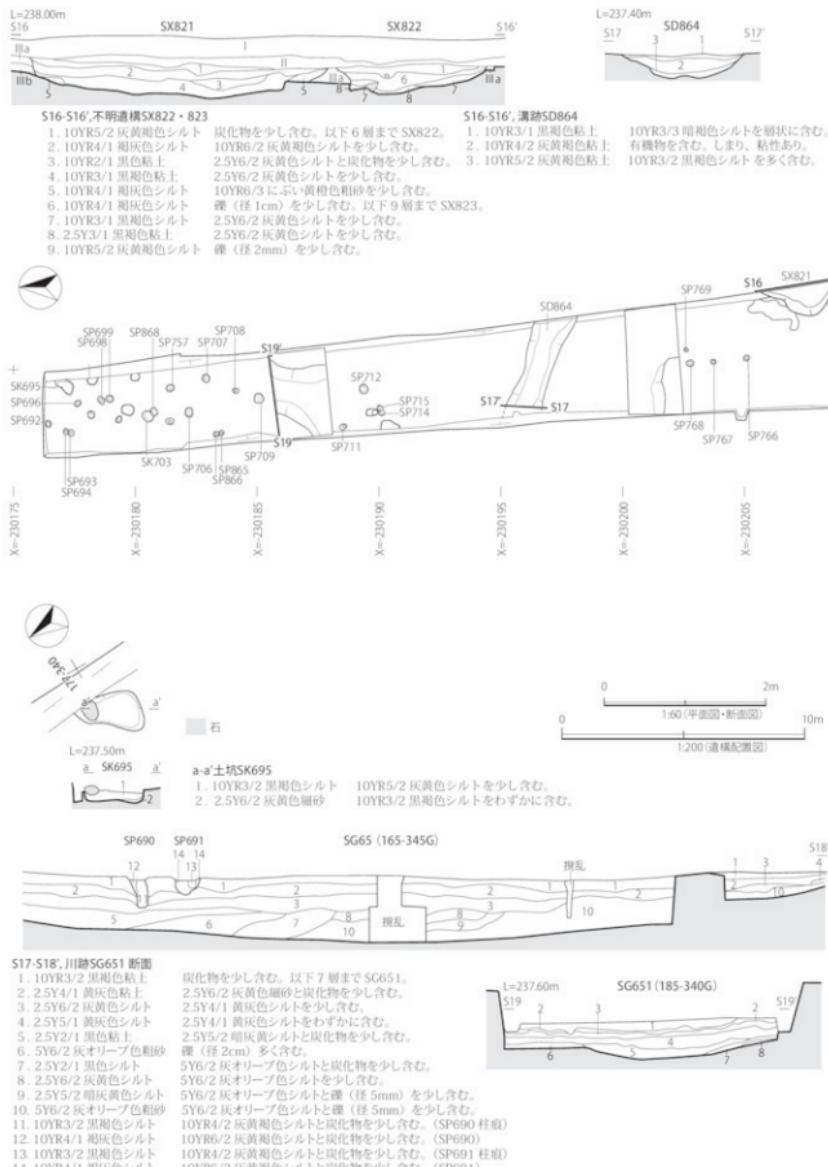
1. 10YR3/2 黒褐色シルト 10YR2/1 黒色粘土を含む。
 2. 10YR5/2 灰褐色シルト 10YR5/1 剥離色粘土を少し含む。
 3. 10YR6/2 灰褐色シルト 10YR2/1 黑色粘土を少し含む。
 4. 10YR3/2 黒褐色シルト 10YR2/1 黑色粘土を多く含む。
- a-a'・b-b'・c-c' 柱穴SP666・667・土坑SK669
1. 10YR4/1 噴出色シルト 10YR6/3 黄褐色シルトを少し含む。
 2. 10YR4/2 灰褐色シルト 10TR6/3 黄褐色シルトを少し含む。
 3. 10YR5/3 黄褐色シルト 10YR6/3 にぶい黄褐色シルトを少し含む。
 4. 10YR5/3 黄褐色シルト 10YR4/2 灰褐色シルトを少し含む。
 5. 10YR4/2 灰褐色シルト 10YR5/1 剥離色シルトを少し含む。
 6. 10YR5/2 灰褐色シルト 10YR6/3 にぶい黄褐色シルトを少し含む。



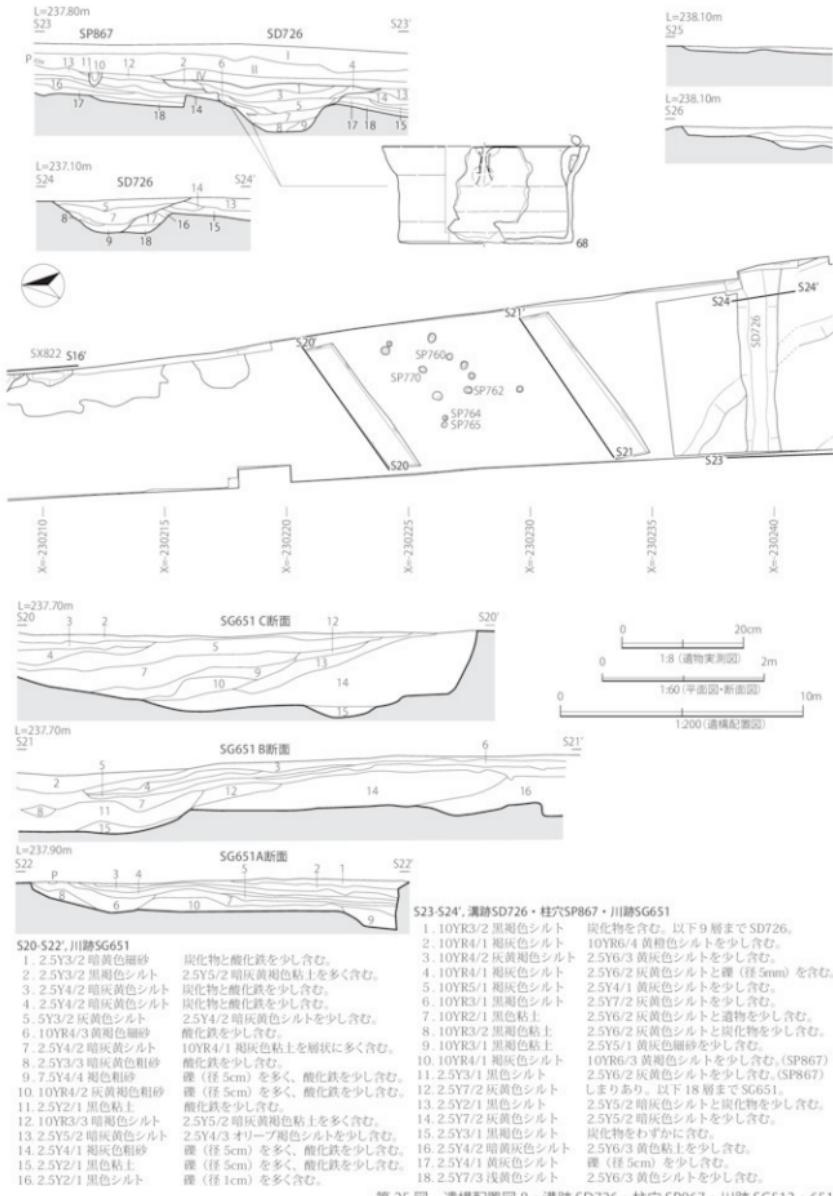
- S14-S15'、溝跡SD729・不明遺構SX823**
1. 10YR4/1 灰褐色シルト 塗化物を少し含む。以下 10 層まで SD729。
 2. 2.5Y5/2 噴灰黄色シルト 2.5Y6/2 灰褐色シルトを崩状に少し含む。
 3. 2.5Y3/2 黒褐色シルト 2.5Y6/2 灰褐色シルトと炭化鉄を多く含む。
 4. 2.5Y5/1 黄褐色シルト 2.5Y6/2 灰褐色シルトを少し含む。
 5. 2.5Y2/1 黒色シルト 2.5Y6/2 灰褐色シルトを少し含む。
 6. 2.5Y3/1 黑褐色シルト 2.5Y6/2 黄褐色シルトと礫（径 5mm）を含む。
 7. 2.5Y4/2 灰褐色シルト 2.5Y5/2 噴灰黄色シルトを少し含む。
 8. 2.5Y6/2 灰褐色シルト 10YR4/1 灰褐色シルトを少し含む。
 9. 2.5Y2/1 黑色シルト 2.5Y6/2 灰褐色シルトと炭化物を少し含む。
 10. 2.5Y4/1 黑褐色シルト 2.5Y6/2 灰褐色シルトと礫（径 5mm）を少し含む。
 11. 10YR5/2 灰褐色シルト 10YR5/2 灰褐色シルトと炭化物を少し含む。
 12. 10YR2/1 黑色シルト 10YR6/2 灰褐色シルトと炭化物を少し含む。
 13. 10YR4/1 噴灰黄色シルト 10YR6/2 灰褐色シルトと炭化物を少し含む。
 14. 2.5Y5/1 黄褐色シルト 2.5Y5/3 黄褐色シルトと炭化物を少し含む。
 15. 2.5Y4/1 黄褐色シルト 2.5Y6/2 灰褐色シルトを少し含む。
 16. 2.5Y3/1 黑褐色シルト 2.5Y7/3 浅黄色シルトと礫（径 1cm）を少し含む。
 17. 2.5Y5/3 黑褐色シルト 10YR4/1 剥離色粘土と礫（径 1cm）を少し含む。
 18. 2.5Y4/2 噴灰黄色シルト 10YR4/1 剥離色シルトを少し含む。
 19. 2.5Y5/2 噴灰黄色シルト 2.5Y6/2 灰褐色シルトを含む。以下 14 層まで SX823。
 20. 2.5Y4/1 黄褐色シルト 2.5Y6/2 灰褐色シルトを剥離して少し含む。
 21. 2.5Y6/2 黄褐色シルト 2.5Y4/1 剥離色シルトをわずかに含む。
 22. 2.5Y6/4 にぶい黃褐色シルト 2.5Y6/4 噴灰黄色シルトを含む。

第 23 図 遺構配置図 6・土坑 SK663・664・669・670・溝跡 SD680・729・柱穴 SP666・667・671・不明遺構 SX823

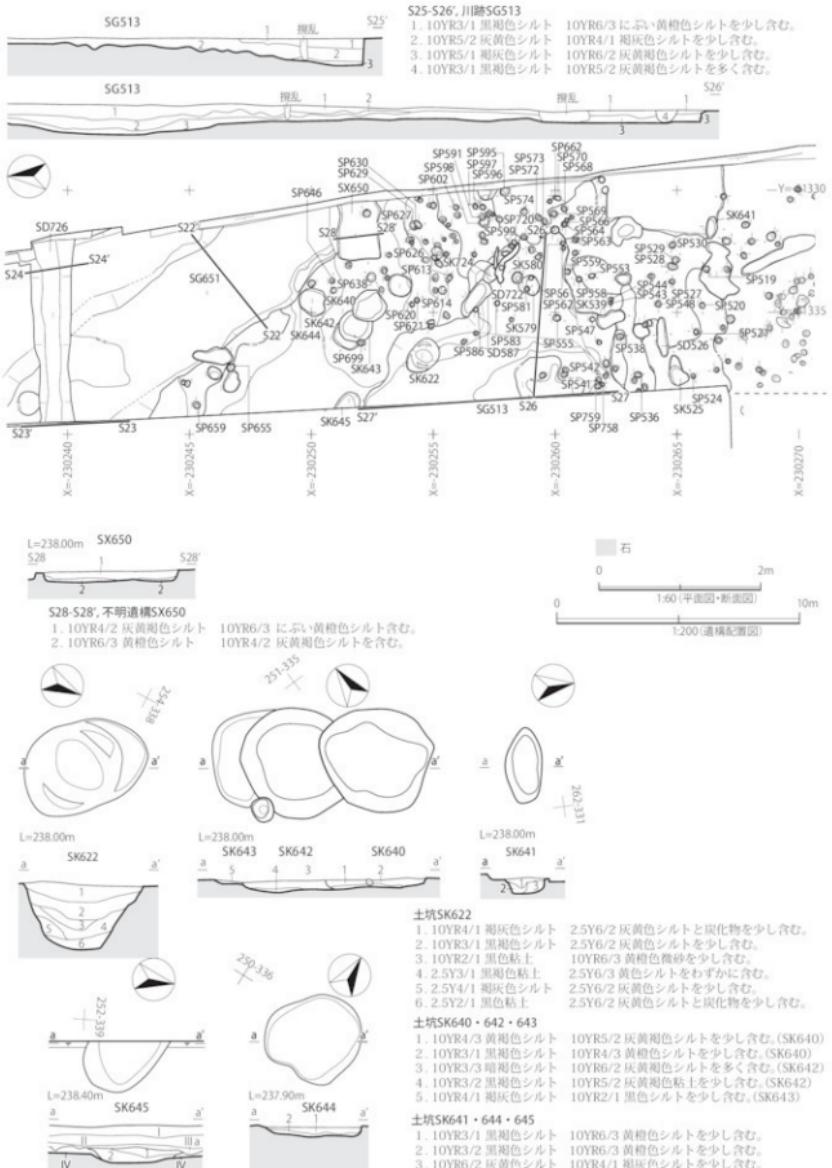




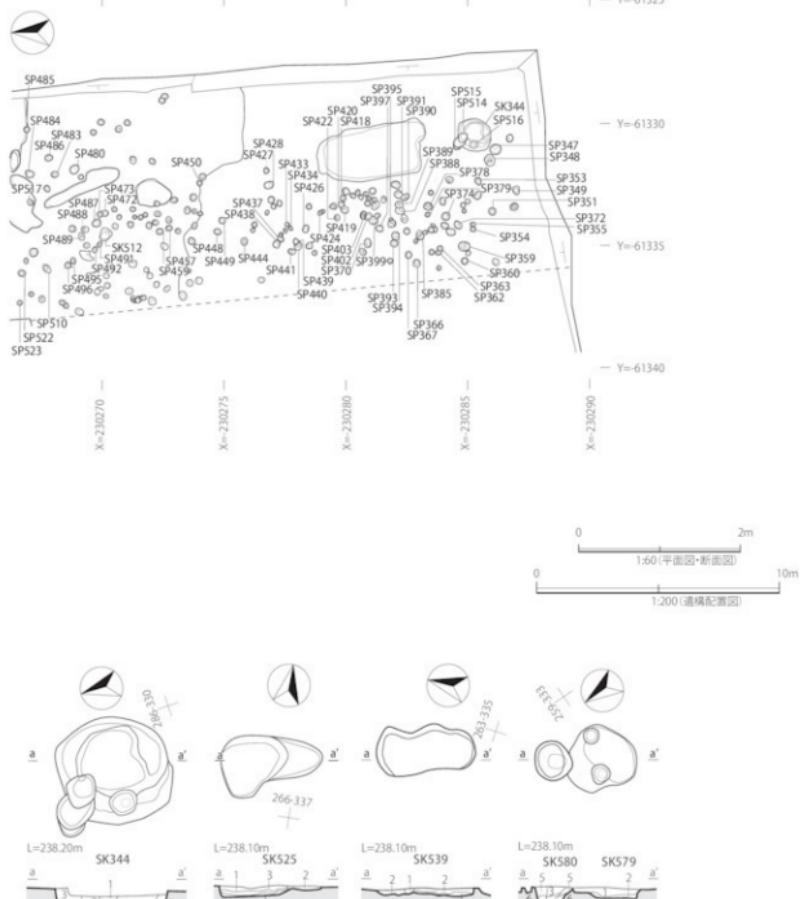
第 24 図 遺構配置図 7・土坑 SK695・溝跡 SD864・柱穴 SP690・691・不明遺構 SX821・822・川跡 SG651



第25図 遺構配図図8・溝跡SD726・柱穴SP867・川跡SG651・651



第 26 図 遺構配図図 9・土坑 SK622・640～645・川跡 SG513・不明遺構 SX650



土坑SK344

1. 10YR6/3 黄褐色シルト 2.5Y6/2 灰黄色シルトを少し含む。
2. 10YR2/1 黒色シルト 2.5Y6/3 黄褐色シルトを多く含む。
3. 2.5Y4/2 明灰黄色シルト 2.5Y4/1 黄褐色シルトを少し含む。
4. 2.5Y5/3 黄褐色シルト 2.5Y4/1 黄褐色シルトを少し含む。
5. 2.5Y6/3 黄褐色シルト 2.5Y6/2 灰暗黄色シルトを少し含む。
6. 2.5Y5/2 明灰黄色シルト 2.5Y6/3 黄褐色シルトを少し含む。

土坑SK525

1. 10YR4/1 黑灰色シルト 10YR6/2 灰黄褐色シルトを少し含む。
2. 10YR5/2 灰黄褐色シルト 10YR6/2 灰黄褐色シルトを少し含む。
3. 10YR6/2 灰黄褐色シルト 10YR4/1 黑褐色粘土を少し含む。

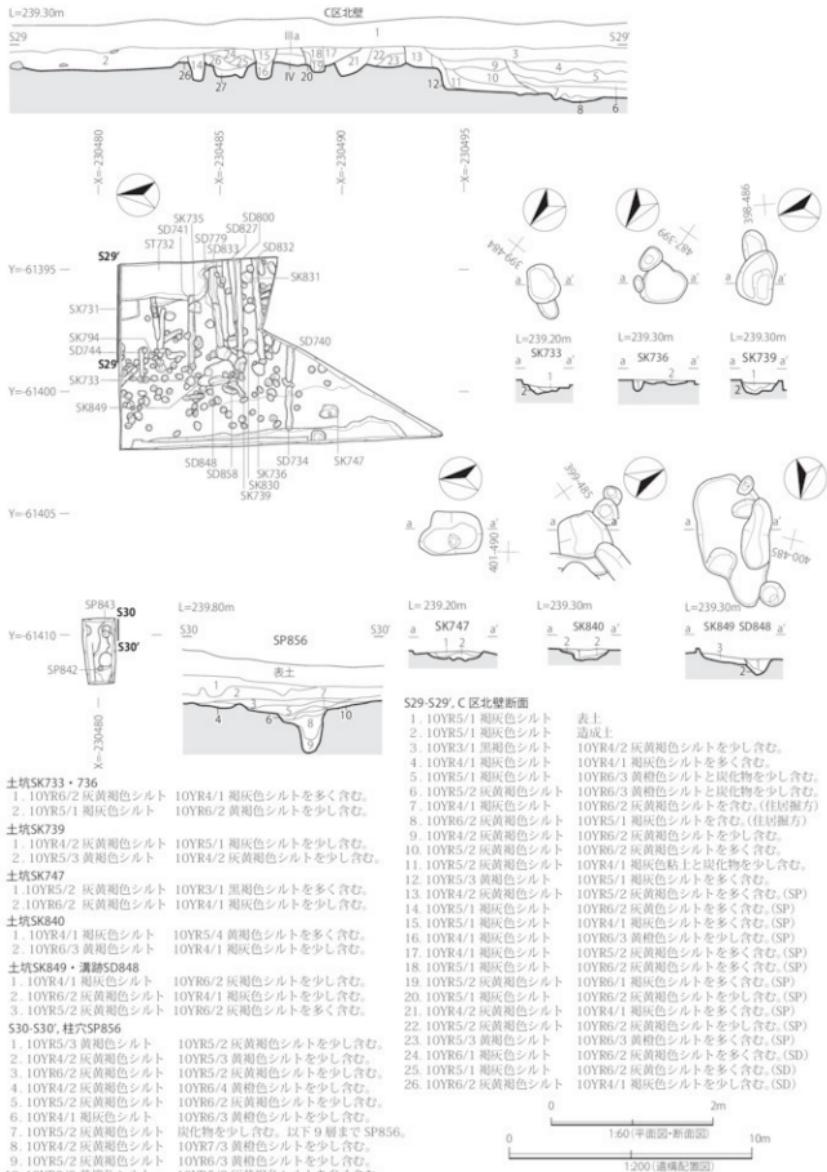
土坑SK539

1. 10YR6/3 黄褐色シルト 2.5Y6/2 灰暗黄色シルトを少し含む。
2. 10YR4/1 黑褐色シルト 2.5Y6/3 黄褐色シルトを少し含む。
3. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 2.5Y6/2 灰暗黄色シルトを少し含む。
4. 10YR5/2 灰黄褐色シルト 2.5Y6/3 黄褐色シルトを少し含む。
5. 2.5Y6/3 黄褐色シルト 2.5Y6/2 灰暗黄色シルトを少し含む。

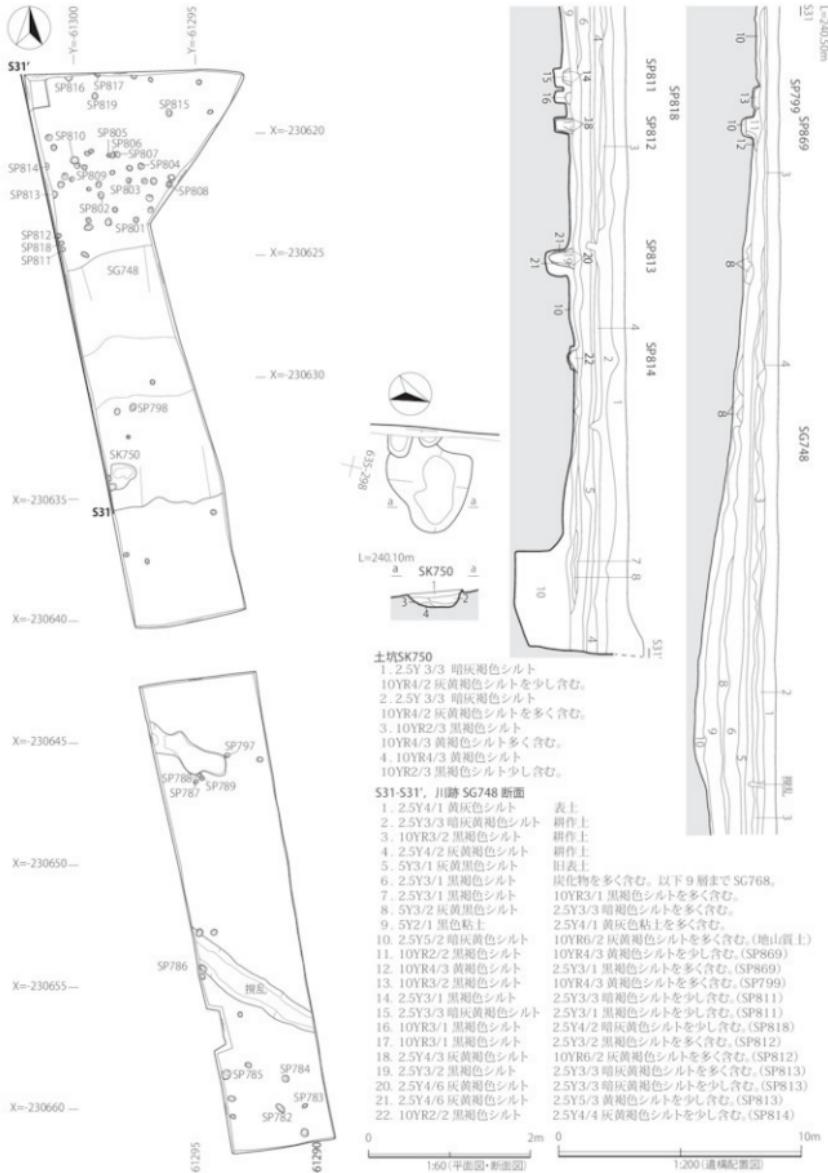
土坑SK579・柱穴SP580

1. 10YR3/1 黑褐色シルト 10YR7/2 灰黄色シルトを少し含む。(SK579)
2. 10YR4/1 黑褐色シルト 10YR7/2 灰黄色シルトを少し含む。(SK579)
3. 10YR2/1 黑色シルト 10YR7/2 灰黄色シルトを少し含む。(SK579)
4. 10YR3/1 黑褐色シルト 10YR7/2 灰黄色シルトを少し含む。(SP580)
5. 10YR5/2 灰黄褐色シルト 10TR3/1 黑褐色シルトを少し含む。(SP580)
6. 10YR6/2 灰黄褐色シルト 10YR3/1 黑褐色シルトを少し含む。(SP580)

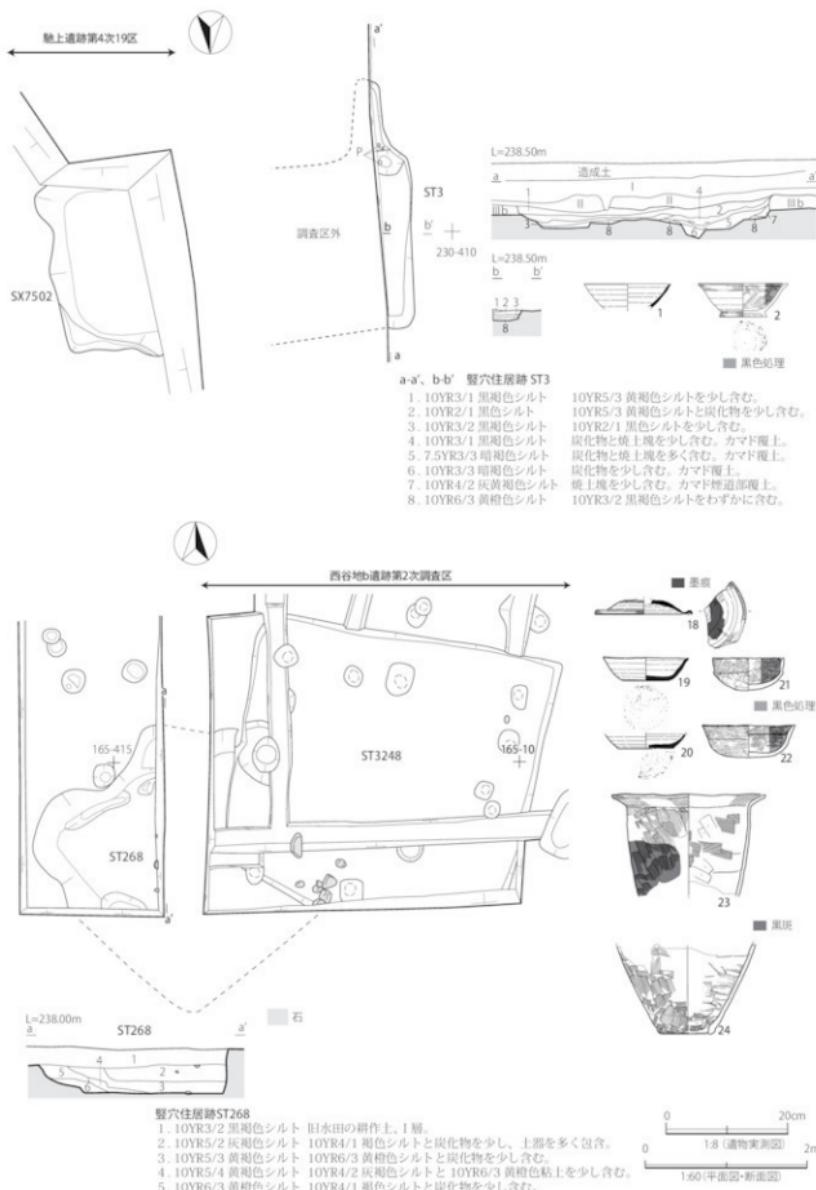
第27図 遺構配置図 10・土坑 SK344・525・539・579・580



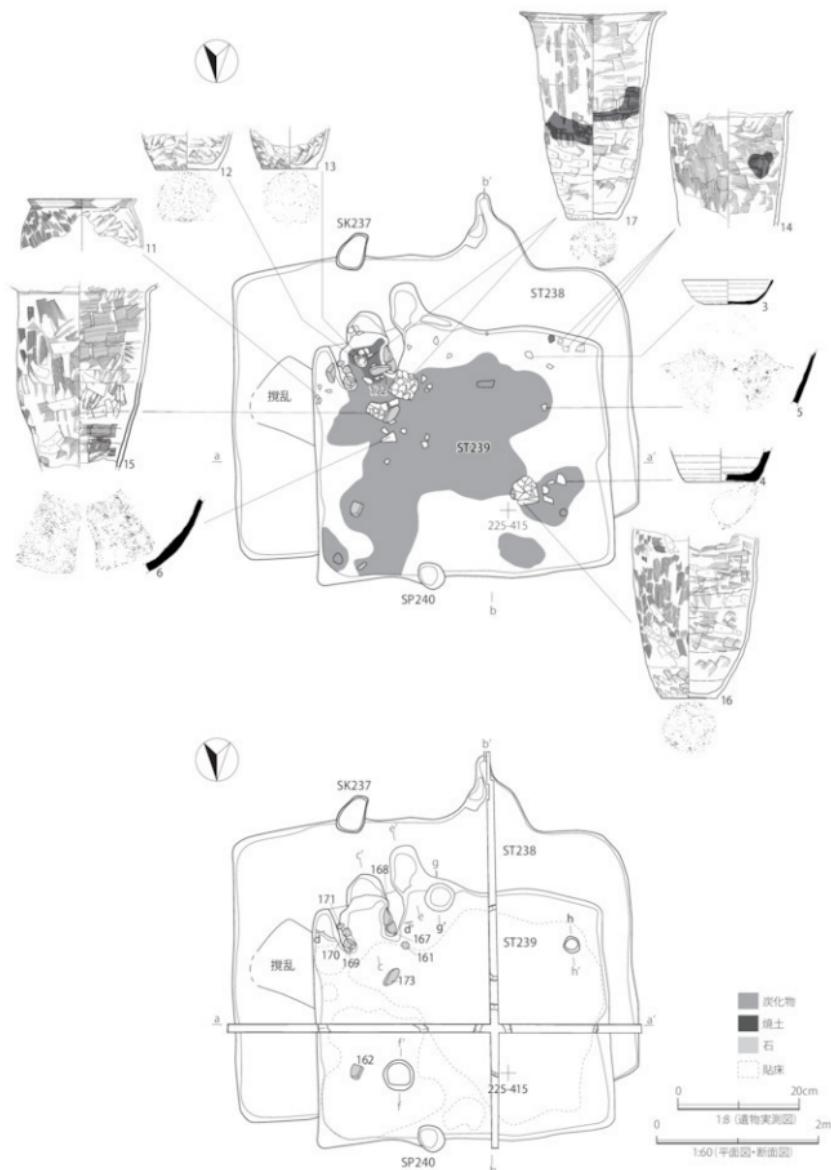
第28図 遺構配置図11・土坑SK733・736・739・740・840・849・溝跡SD848



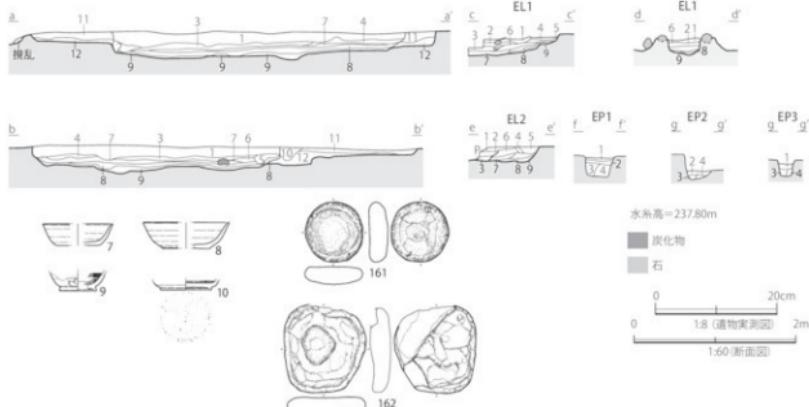
第29図 遺構配置図12・土坑 SG750・川跡 SG748



第 30 図 竪穴住居跡 ST3 + 268



第31図 竪穴住居跡 ST238・239 (1)



a-a', b-b' 穹穴住居跡 ST238 • 239

1. 10YR3/2 黒褐色シルト
 2. 10YR4/3 黄褐色シルト
 3. 10YR2/1 黑色シルト
 4. 10YR4/2 黄褐色シルト
 5. 10YR3/1 黑褐色シルト
 6. 10YR6/3 黄褐色シルト
 7. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
 8. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
 9. 2.5Y3/3 暗灰黄褐色シルト
 10. 10YR5/2 黄褐色シルト
 11. 10YR5/3 黄褐色シルト
 12. 10YR4/3 黄褐色シルト
- 10YR5/3 黄褐色シルトと炭化物を少し含む。
 - 10YR3/2 黑褐色シルトと炭化物を少し含む。
 - 炭化物と燒灰 (径 5mm) を多く含む。(ST239 燃失時の炭化物堆積層)
 - 10YR6/3 黄褐色シルトと焼灰、炭化物を少し含む。
 - 10YR6/3 黄褐色シルトと炭化物を少し含む。
 - 10YR6/4 黄褐色シルトと遺物を多く含む。(ST239 番面直上層)
 - 10YR6/4 黄褐色シルトと 2.5Y5/2 暗灰黃(?)シルトを少し含む。(ST239 黄褐色)
 - 10YR3/2 黑褐色シルトと炭化物を少し含む。(ST238 F1)
 - 10YR3/2 黑褐色シルトと礫 (径 10mm) を少し含む。(ST238 F1)
 - 2.5Y6/4 黄褐色シルトと礫 (径 5mm) を少し含む。(ST238 F2)

c-c', d-d' カマド EL1

1. 10YR4/2 黄褐色シルト
 2. 10YR2/2 黑褐色シルト
 3. 10YR5/4 黄褐色シルト
 4. 7.5YR3/1 黑褐色シルト
 5. 7.5YR5/3 黄褐色シルト
 6. 7.5YR3/1 黑褐色シルト
 7. 10YR5/2 黄褐色シルト
 8. 10YR4/2 黄褐色シルト
 9. 10YR5/4 黄褐色シルト
- 10YR6/2 黄褐色シルトと炭化物を少し含む。(ST239F1)
 - 炭化物と燒灰 (径 5mm) を多く含む。(炭化物堆積層)
 - 炭化物と帶状に少し含む。
 - 炭化物が多く、燒灰塊を少し含む。(燒出部分)
 - 炭化物微粒子と燒灰を少し含む。
 - 炭化物と燒灰塊を少し含む。
 - 炭化物と燒灰塊を少し含む。
 - 燒灰と地山塊を少し含む。
 - 燒灰と地山塊を少し含む。(カマド煙道部)

e-e' カマド EL2

1. 10YR4/2 黄褐色シルト
 2. 10YR2/1 黑色シルト
 3. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
 4. 10YR5/3 黄褐色シルト
 5. 10YR2/1 黑色シルト
 6. 10YR4/2 黄褐色シルト
 7. 10YR5/2 黄褐色シルト
 8. 10YR3/2 黑褐色シルト
 9. 10YR5/2 黄褐色シルト
- 10YR6/2 黄褐色シルトを多く含む。(ST239F1)
 - 10YR4/3 黄褐色シルトと炭化物を多く含む。(炭化物堆積層)
 - 10YR6/4 黄褐色シルトと炭化物を少し含む。(ST239 番面直上層)
 - 10YR4/2 黄褐色シルトを少し含む。(EL2 煙道天井部崩落土)
 - 炭化物を少し含む。
 - 10YR5/3 黄褐色シルトを少し含む。
 - 10YR5/2 黄褐色シルトと炭化物を少し含む。(EL2 覆土)
 - 10YR4/1 黑褐色シルトを多く含む。(EL2 覆土)
 - 10YR3/2 黑褐色シルトを少し含む。(EL2 覆土底面)

f-f' 柱穴 EP1

1. 10YR3/2 黑褐色シルト
 2. 10YR5/2 黄褐色シルト
 3. 7.5YR3/3 暗褐色シルト
 4. 10YR3/3 暗褐色シルト
- 炭化物を少し、上端部をわずかに含む。しまり。粘性ややあり。
 - 10YR3/2 黑褐色シルトをわずかに含む。しまりあり。
 - 炭化物と燒灰塊を少し含む。しまりあり。粘性ややあり。(柱底)
 - 炭化物と燒灰塊を多く含む。しまりあり。粘性ややあり。(柱穴掘方)

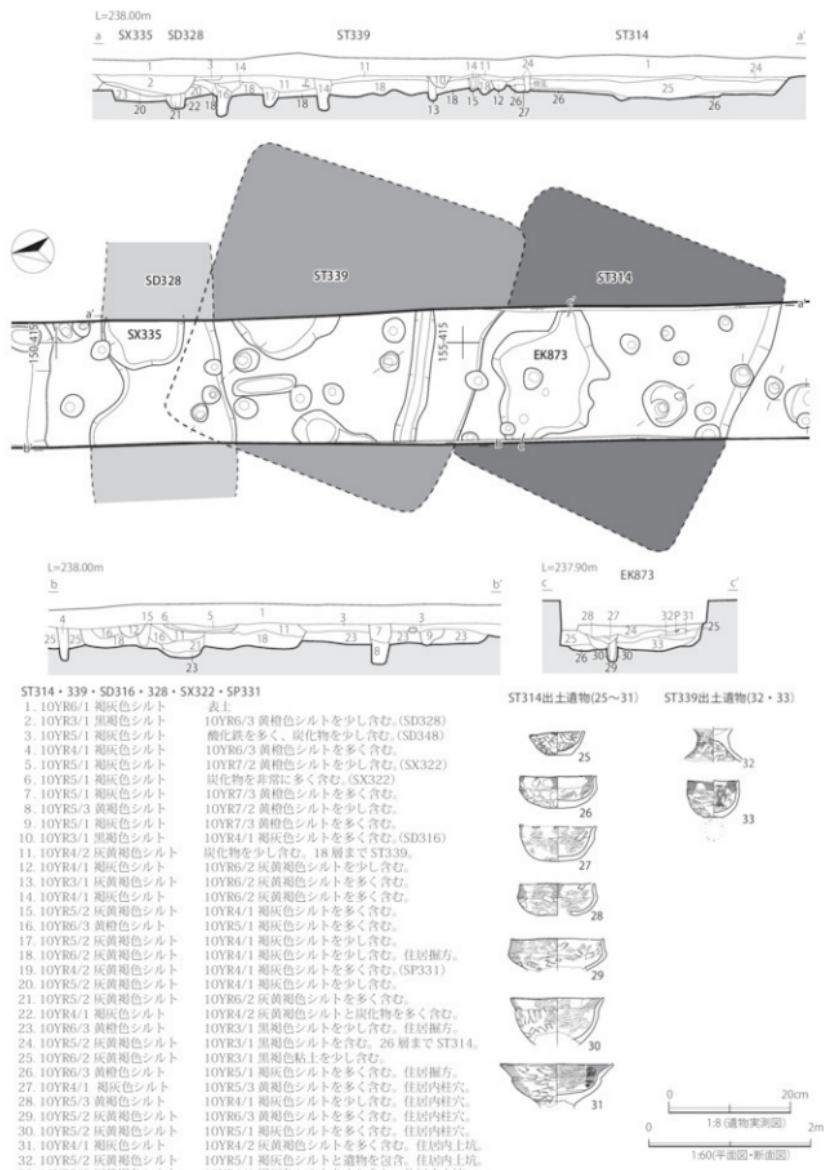
g-g' 柱穴 EP2

1. 10YR3/1 黑褐色シルト
 2. 10YR5/2 黄褐色シルト
 3. 10YR3/3 暗褐色シルト
- 炭化物を少し含む。しまり。粘性ややあり。(柱抜取痕)
 - 10YR3/2 黑褐色シルトを少し含む。しまりあり。(柱底)
 - 10YR5/3 にふる黄褐色シルトを少し含む。しまりあり。(柱穴掘方)

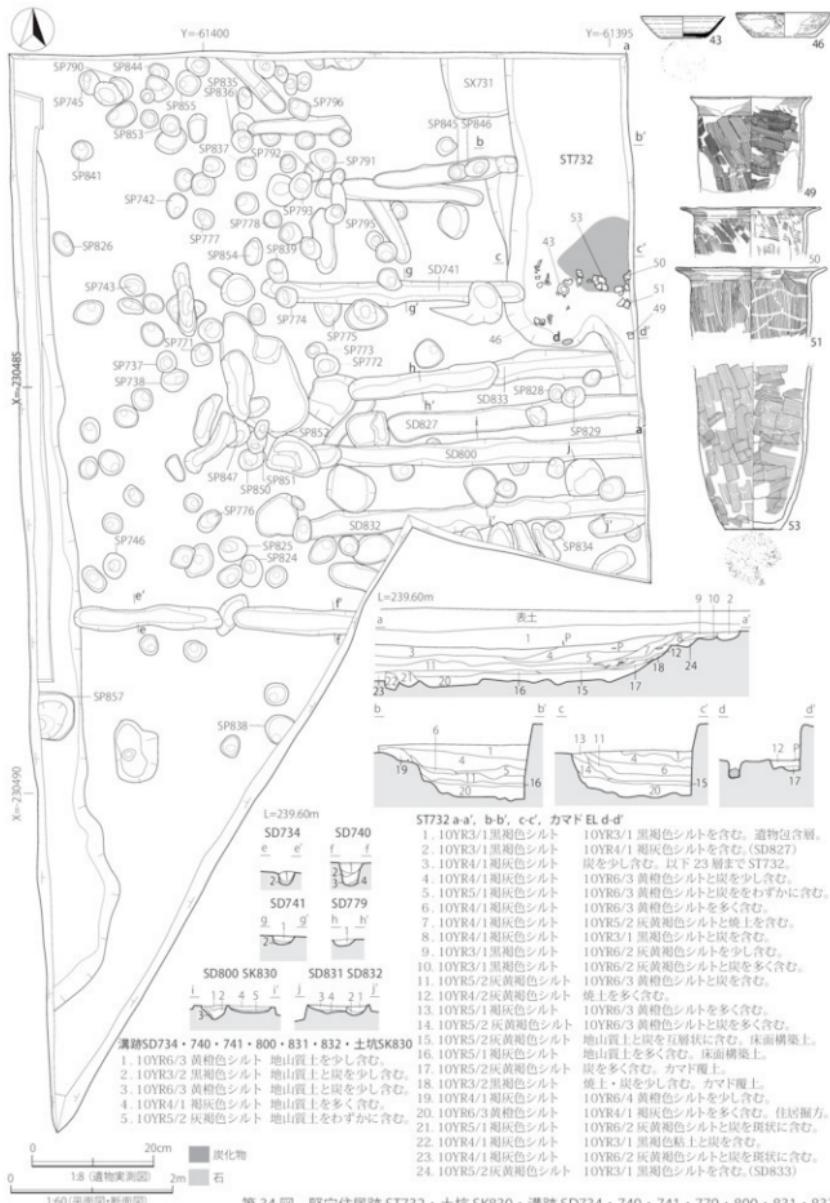
h-h' 柱穴 EP3

1. 10YR3/1 黑褐色シルト
 2. 10YR3/2 黑褐色シルト
 3. 10YR3/3 暗褐色シルト
- 炭化物を少し含む。しまり。粘性ややあり。(柱抜取痕)
 - 10YR3/2 黑褐色シルトを少し含む。しまりあり。(柱底)
 - 10YR5/3 にふる黄褐色シルトを少し含む。しまりあり。(柱穴掘方)

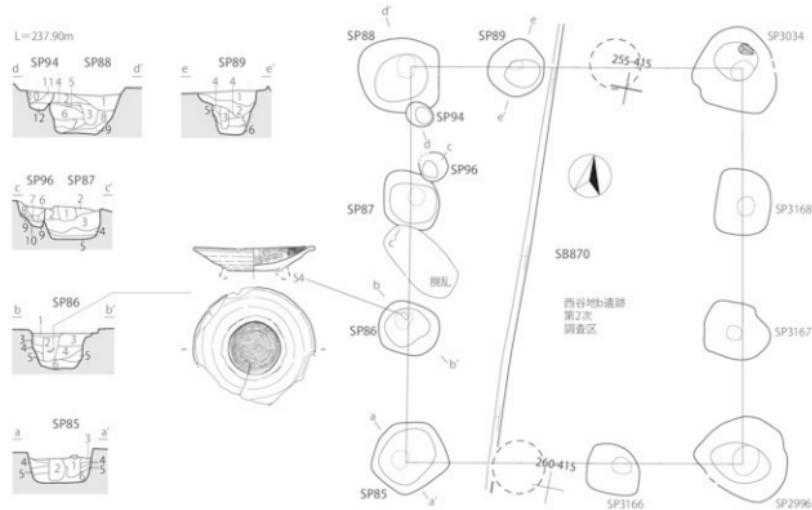
第 32 図 穹穴住居跡 ST238 • 239 (2)



第33図 積穴住居跡 ST314・339



第34図 積穴住居跡 ST732・土坑 SK830・溝跡 SD734・740・741・799・800・831・832

**a-a'**, 柱穴 SP85

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
2. 10YR3/2 黒褐色色シルト
3. 10YR3/3 喷灰黄色シルト
4. 10YR4/2 底灰褐色シルト
5. 2.5Y4/3 喷オーリーブ褐色シルト
6. 2.5Y3/1 黑褐色色シルト

b-b', 柱穴 SP86

1. 2.5Y4/6 オーリーブ褐色シルト
2. 2.5Y4/2 オーリーブ褐色シルト
3. 2.5Y4/4 オーリーブ褐色シルト
4. 10YR5/3 喷灰黄色シルト
5. 2.5Y4/3 黄褐色色シルト
6. 10YR4/2 オーリーブ褐色シルト

c-c', 柱穴 SP87 - SP96

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
2. 10YR5/0 黄褐色色シルト
3. 2.5Y4/3 オーリーブ褐色シルト
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
5. 10YR3/2 黄褐色色シルト
6. 10YR3/2 黄褐色色シルト
7. 10YR3/2 黄褐色色シルト
8. 2.5Y4/3 オーリーブ褐色シルト
9. 2.5Y4/3 オーリーブ褐色シルト
10. 10YR3/4 喷灰黄色シルト

d-d', 柱穴 SP88 - SP94

1. 2.5Y4/2 喷灰黄色シルト
2. 2.5Y5/4 黄褐色色シルト
3. 2.5Y4/4 オーリーブ褐色シルト
4. 2.5Y4/3 オーリーブ褐色シルト
5. 2.5Y4/6 オーリーブ褐色シルト
6. 2.5Y5/4 黄褐色色シルト
7. 10YR4/2 喷灰黄色シルト
8. 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト
9. 2.5Y4/6 オーリーブ褐色シルト
10. 2.5Y4/2 喷灰黄色シルト
11. 2.5Y4/3 オーリーブ褐色シルト
12. 2.5Y4/4 オーリーブ褐色シルト

e-e', 柱穴 SP89

1. 2.5Y4/3 オーリーブ褐色シルト
2. 2.5Y4/2 底灰褐色シルト
3. 2.5Y5/3 黑褐色色シルト
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト
5. 2.5Y5/3 黄褐色色シルト
6. 2.5Y4/2 喷灰黄色シルト
7. 10YR4/4 オーリーブ褐色色粗砂

7.5YR3/4 喷褐色シルトを少し含む。(根乱)

10YR2/2 黑褐色粘土を少し含む。(柱粗)

7.5YR3/4 喷褐色シルトを少し含む。

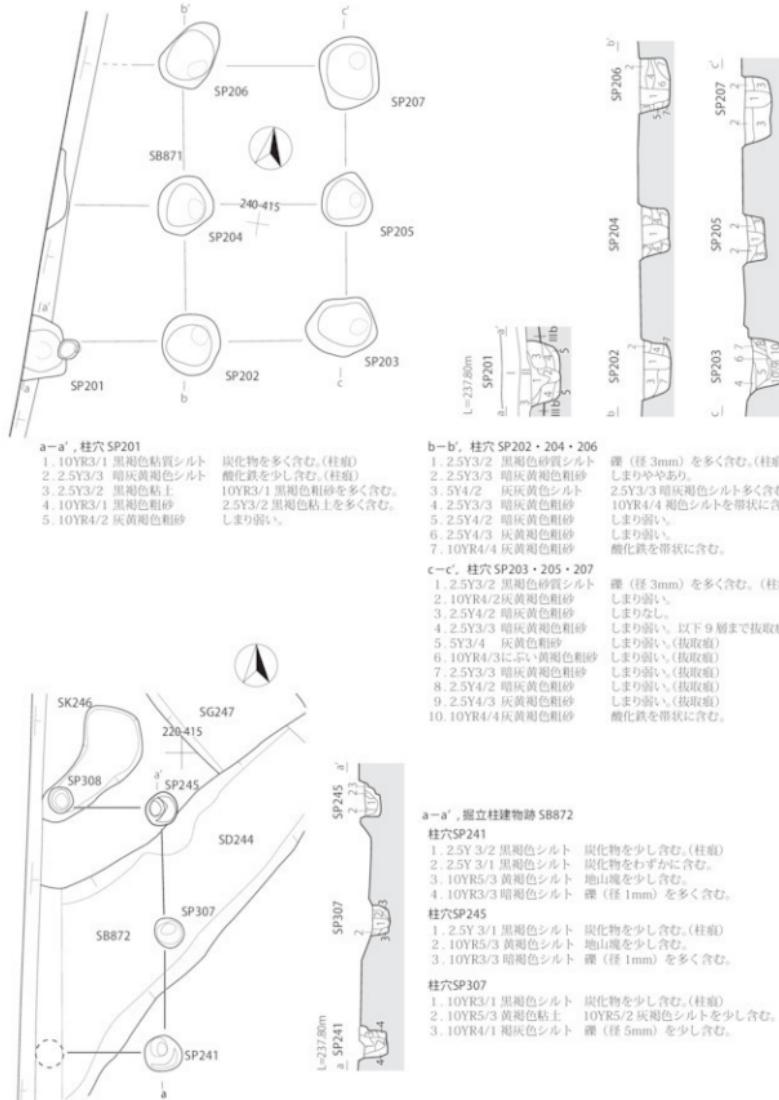
7.5YR3/4 喷褐色シルトを少し含む。しまり、粘性あり。

しまり、粘性あり。

しまり、粘性ややあり。

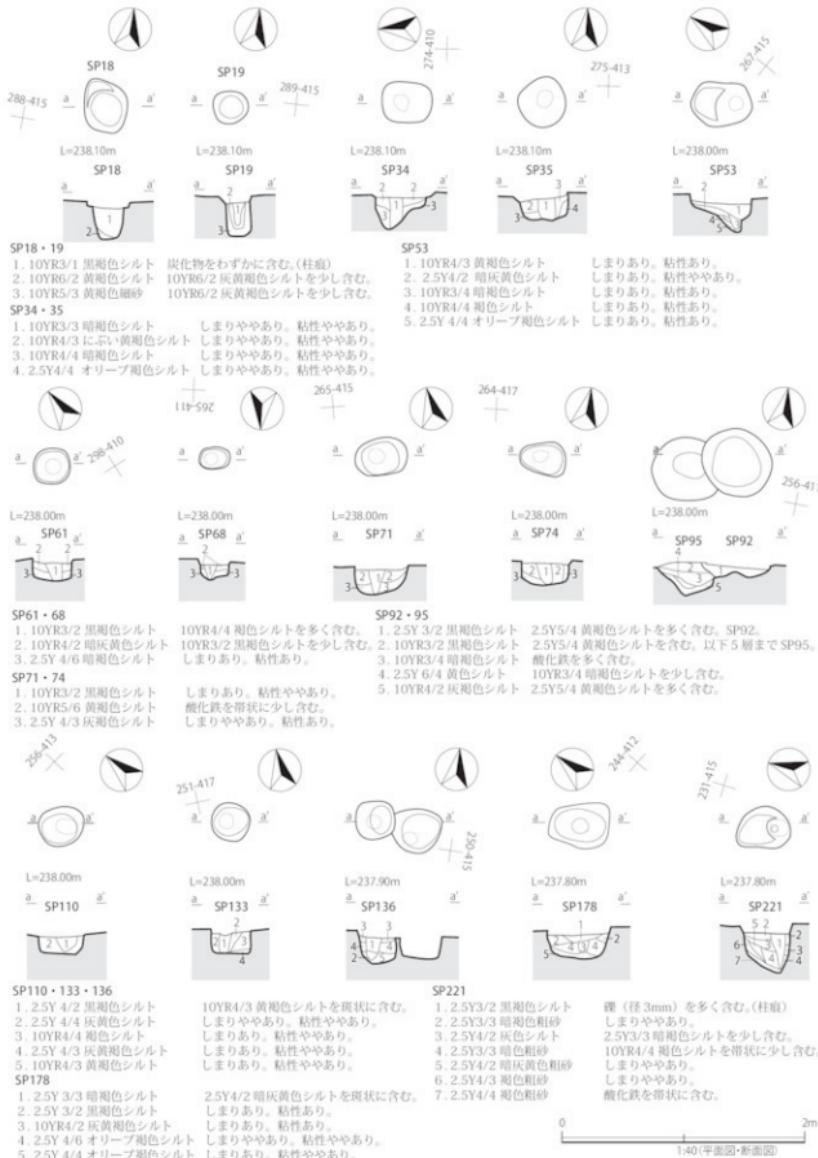


第35図 振立柱建物跡 SB870

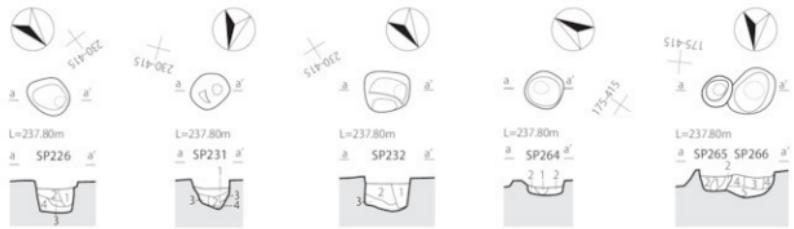


0 2m
1:60(平面図・断面図)

第36図 掘立柱建物跡 SB871・872



第37図 柱穴(1) SP18~221



SP226

1. 10YR3/2 黒褐色シルト
 2. 10YR4/2 灰褐色シルト
 3. 10YR3/3 明褐色シルト
 4. 10YR5/3 黄褐色色シルト
- 炭化物を少し含む。(柱直)
- 10YR6/4 黄褐色シルトを少し含む。
礫(径 5mm)を少し含む。
- 礫(径 1cm)を多く含む。

SP231

1. 25Y3/2 黒褐色シルト
 2. 10YR3/1 黒褐色シルト
 3. 10YR4/2 灰褐色シルト
- 10YR4/1 褐灰色シルトを含む。(柱直)
- 10YR4/1 褐灰色シルトを少し含む。
- 10YR4/1 褐灰色シルトを多く含む。

SP232・264

1. 10YR3/1 黑褐色シルト
 2. 10YR4/2 灰褐色シルト
 3. 10YR5/3 黄褐色シルト
- 炭化物を少し含む。(柱直)
- 10YR6/4 黄褐色シルトを少し含む。
礫(径 5mm)を多く含む。
- 10YR4/1 褐灰色シルト
- 10YR4/2 灰褐色シルト
- 10YR5/2 黄褐色色シルト

SP265・266

1. 10YR4/1 褐灰色シルト
 2. 10YR4/1 褐灰色シルト
 3. 10YR4/1 褐灰色シルト
 4. 10YR4/2 灰褐色シルト
 5. 10YR5/2 黄褐色色シルト
- 10YR6/2 灰褐色シルトを少し含む。(SP265)
- 10YR6/2 灰褐色シルトを多く含む。(SP265)
- 10YR6/2 黄褐色シルトを多く含む。(SP266)
- 10YR5/3 黄褐色シルトを多く含む。(SP266)
- 10YR4/1 褐灰色シルトを少し含む。(SP266)

SP267・272・273

1. 10YR4/2 灰褐色シルト
 2. 10YR4/3 黄褐色シルト
 3. 10YR5/3 黄褐色シルト
 4. 10YR5/2 黄褐色色シルト
- 10YR3/1 黑色粘土を少し含む。(柱直)
- 10YR4/1 褐灰色シルトを多く含む。
- 10YR5/2 黄褐色色シルトを多く含む。
- 炭化物をわずかに含む。
- L=237.80m
SP267
a 2 1 2 a'
- L=237.80m
SP272
a 2 1 2 a'
- L=237.70m
SP273
a 2 1 2 a'
- L=237.70m
SP274 SP275
a 2 1 2 a'
- L=237.70m
SP277 SP276
a 3 a'

SP274・275・276・277

1. 10YR5/1 褐灰色シルト
 2. 10YR5/1 褐灰色シルト
 3. 10YR4/1 褐灰色シルト
 4. 10YR5/3 黄褐色シルト
 5. 10YR5/2 黄褐色色シルト
- 10YR4/1 褐灰色シルトを少し含む。
- 10YR4/3 黄褐色シルトを多く含む。
- 10YR5/1 褐灰色シルトを多く含む。
- 10YR4/1 褐灰色シルトを少し含む。
- 10YR5/4 黄褐色色シルトを多く含む。

SP278・279

1. 10YR4/1 褐灰色シルト
 2. 10YR4/1 褐灰色シルト
 3. 10YR5/1 褐灰色シルト
 4. 10YR4/1 褐灰色シルト
 5. 10YR4/1 褐灰色シルト
 6. 10YR5/3 黄褐色シルト
- 酸化物を少し含む。(SP279)
- 10YR5/2 灰褐色色シルトを少し含む。(SP279)
- 10YR6/1 褐灰色シルトを少し含む。(SP279)
- 10YR5/2 灰褐色色シルトを少し含む。(SP278)
- 10YR5/2 灰褐色色シルトを多く含む。(SP278)
- 10YR2/1 黑褐色シルトを多く含む。(SP278)
- L=237.70m
SP278 SP279
a 1 2 3 a'
- L=237.70m
SP280
a 2 1 2 a'
- L=237.70m
SP283
a 2 1 2 4 a'
- L=237.70m
SP285
a 2 1 2 a'
- L=237.70m
SP292
a 1 2 3 4 a'

SP283・285・292

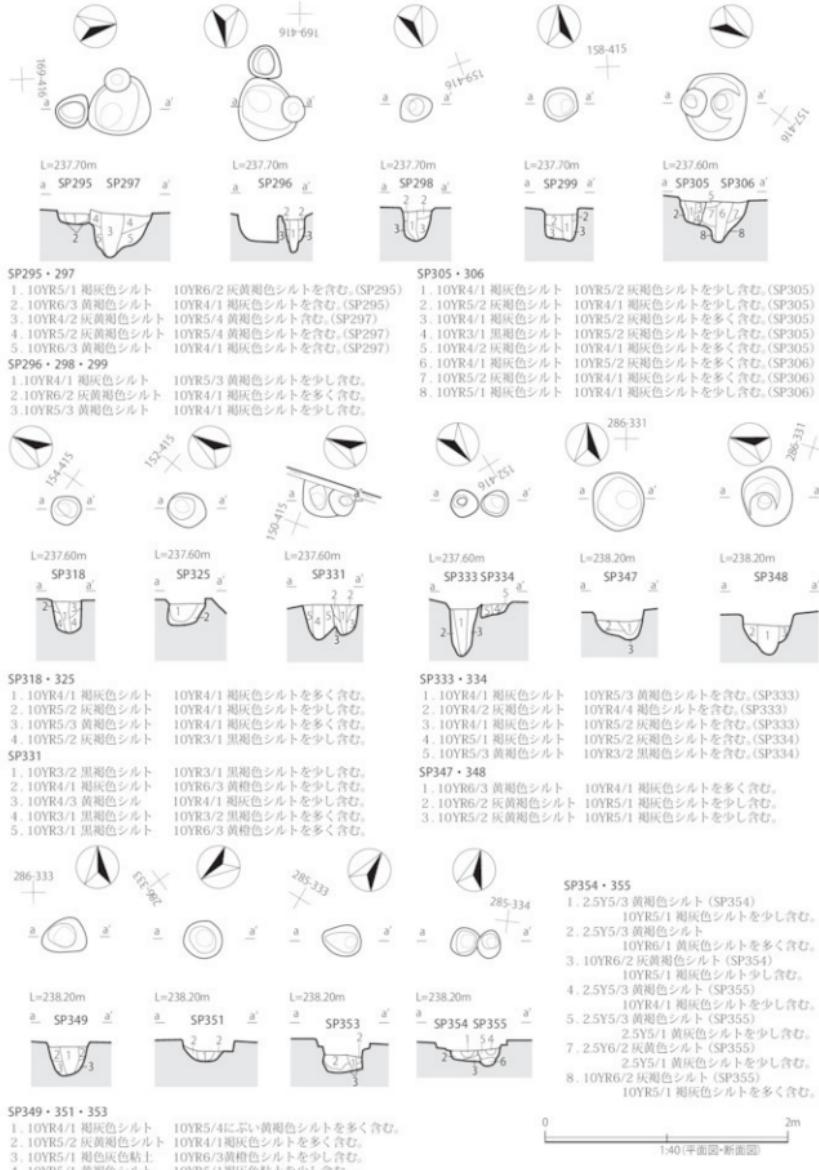
1. 10YR4/1 褐灰色シルト
 2. 10YR5/1 褐灰色シルト
 3. 10YR4/2 灰褐色色シルト
 4. 10YR6/3 黄褐色シルト
- 10YR4/4 褐色シルトを少し含む。
- 10YR5/3 黄褐色シルトを多く含む。
- 10YR6/3 黄褐色シルトを少し含む。
- 10YR4/1 褐灰色シルトを少し含む。
1. 10YR4/1 褐灰色シルト
2. 10YR5/2 灰褐色色シルトを少し含む。
3. 10YR5/3 黄褐色色シルトを多く含む。
4. 10YR6/3 黄褐色色シルトを少し含む。

SP280

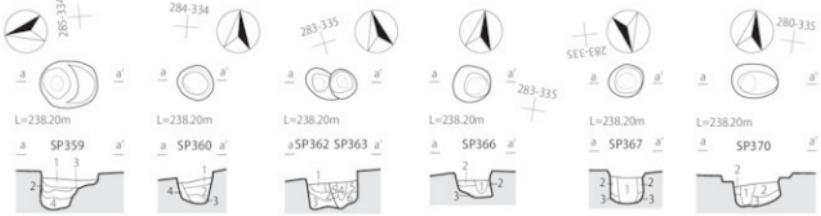
1. 10YR3/2 黑褐色シルト
 2. 10YR5/2 灰褐色色シルト
 3. 10YR5/3 黄褐色色シルト
- 10YR4/4 褐色シルトを少し含む。
- 10YR5/1 褐灰色シルトを少し含む。
- 10YR5/2 灰褐色色シルトを少し含む。

0 2m
1.40(平面図・断面図)

第38図 柱穴(2) SP226～292



第39図 柱穴(3) SP295~355



SP359・360

1. 10YR4/1 剛灰色シルト
2. 10YR5/1 剛灰色シルト
3. 10YR6/2 黄褐色シルト
4. 10YR6/2 黄褐色シルト

10YR6/4 黄褐色シルトを少し含む。

10YR6/4 黄褐色シルトを多く含む。

10YR6/4 黄褐色シルトを少し含む。

10YR5/1 剛灰色シルトを少し含む。

- SP362・363
1. 10YR5/1 剛灰色シルト
2. 10YR5/1 剛灰色シルト
3. 10YR5/1 剛灰色シルト
4. 10YR5/3 黄褐色シルト
5. 10YR6/2 黄褐色シルト
6. 10YR6/2 噴灰黃褐色シルト

10YR5/2 黄褐色シルトを多く含む。(SP362)

10YR6/3 黄褐色シルトを少し含む。(SP362)

10YR5/1 剌灰褐色シルトを少し含む。(SP362)

10YR5/1 剌灰褐色シルトを少し含む。(SP363)

10YR5/2 黄褐色シルトを少し含む。(SP363)

10YR5/1 剌灰褐色シルトを少し含む。(SP363)

- SP366
1. 10YR4/1 剌灰褐色シルト
2. 10YR5/2 黄褐色シルト
3. 10YR5/1 剌灰褐色シルト

10YR6/2 黄褐色シルトを少し含む。

10YR5/1 剌灰褐色シルトを少し含む。

10YR6/2 黄褐色シルトを少し含む。

- SP367
1. 10YR4/1 剌灰褐色シルト
2. 10YR5/1 剌灰褐色シルト
3. 10YR5/1 剌灰褐色シルト

10YR6/3 黄褐色シルトを少し含む。

10YR4/1 剌灰褐色シルトを少し含む。

10YR5/1 剌灰褐色シルトを少し含む。

- SP370
1. 10YR4/1 剌灰褐色シルト
2. 10YR5/1 剌灰褐色シルト
3. 10YR5/1 剌灰褐色シルト

10YR6/2 黄褐色シルトを少し含む。

10YR5/1 剌灰褐色シルトを少し含む。

10YR6/2 黄褐色シルトを少し含む。

- SP372・374
1. 10YR5/1 剌灰褐色粘土
2. 10YR5/1 剌灰褐色粘土
3. 2.5Y6/2 黄褐色シルト

10YR6/3 黄褐色シルトを多く含む。

10YR5/1 剌灰褐色粘土を少し含む。

- SP378・379・380・381
1. 10YR4/1 剌灰褐色シルト
2. 10YR5/2 黄褐色シルト
3. 10YR6/2 黄褐色シルト
4. 10YR5/1 剌灰褐色シルト
5. 10YR5/2 黄褐色シルト

10YR5/4 黄褐色シルトを少し含む。

10YR4/1 剌灰褐色シルトを少し含む。

10YR5/2 黄褐色シルトを少し含む。

10YR5/1 剌灰褐色シルトを少し含む。

10YR5/1 剌灰褐色粘土を少し含む。

- SP385
1. 10YR4/1 剌灰褐色シルト
2. 10YR5/1 剌灰褐色シルト
3. 10YR5/2 黄褐色シルト
4. 10YR3/1 黑褐色粘土

10YR6/2 黄褐色シルトを少し含む。

10YR5/2 黄褐色シルトをわずかに含む。

10YR4/1 剌灰褐色粘土を少し含む。

10YR4/1 剌灰褐色シルトを少し含む。

- SP388・389
1. 10YR4/1 剌灰褐色シルト
2. 2.5Y6/2 黄褐色シルト
3. 10YR5/1 剌灰褐色粘土
4. 2.5Y6/2 黄褐色シルト
5. 10YR3/1 黑褐色粘土

2.5Y6/3 黄色シルトを少し含む。(SP388)

10YR4/1 剌灰褐色粘土を少し含む。(SP388)

2.5Y6/3 黄色シルトを少し含む。(SP389)

2.5Y5/2 噴灰黃褐色シルトを少し含む。(SP389)

10YR4/1 剌灰褐色粘土を少し含む。(SP389)

- SP391・392
1. 10YR4/1 剌灰褐色シルト
2. 10YR5/1 剌灰褐色シルト
3. 10YR5/2 黄褐色シルト
4. 2.5Y6/2 黄褐色シルト
5. 10YR3/1 黑褐色粘土
6. 2.5Y6/2 黄褐色シルト

10YR6/4 黄褐色シルトを少し含む。

10YR3/2 黑褐色粘土を少し含む。

10YR3/2 黑褐色粘土を少し含む。

2.5Y5/2 噴灰黃褐色シルトを少し含む。

10YR4/1 剌灰褐色粘土を少し含む。

2.5Y5/1 黄褐色シルトを少し含む。

- SP395・397
1. 10YR4/1 剌灰褐色シルト
2. 10YR5/3 黄褐色シルト
3. 10YR6/2 黄褐色シルト
4. 2.5Y6/3 黄褐色シルト

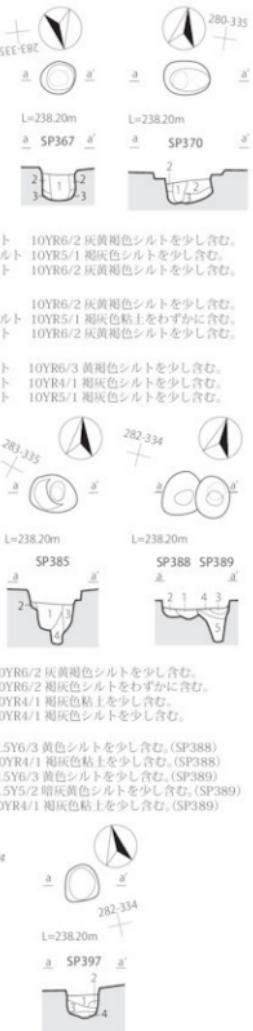
10YR6/2 黄褐色シルト少し含む。

10YR3/2 黑褐色粘土を少し含む。

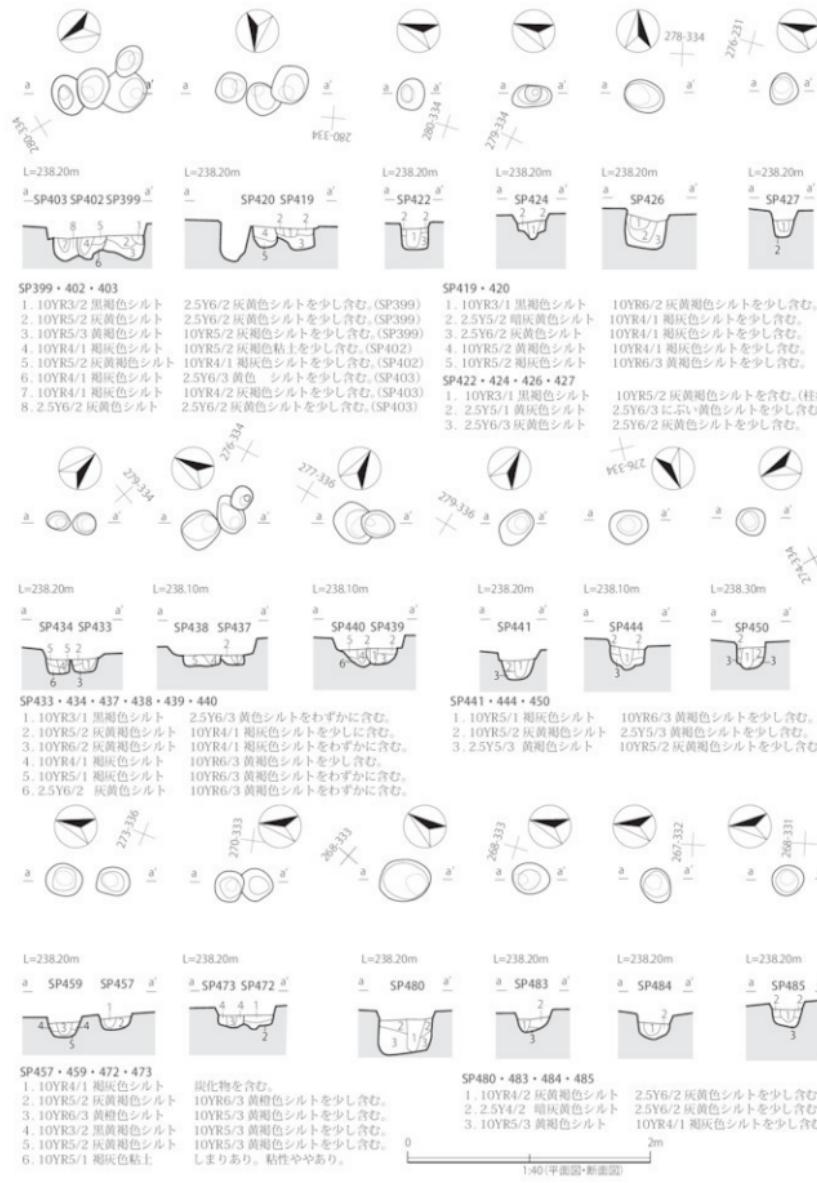
10YR5/3 黄褐色シルトを少し含む。

10YR4/2 噴灰黃褐色シルトを少し含む。

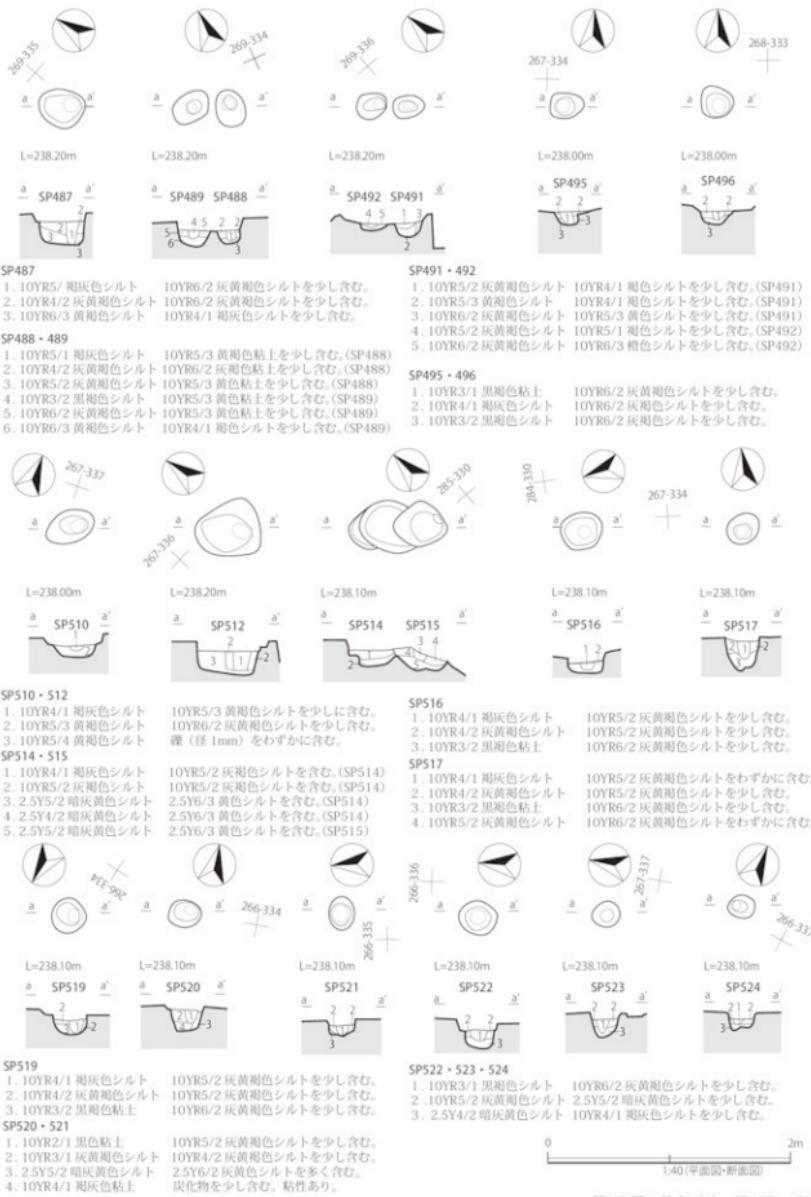
- SP399
- 0 2m
1:40 (平面図・断面図)



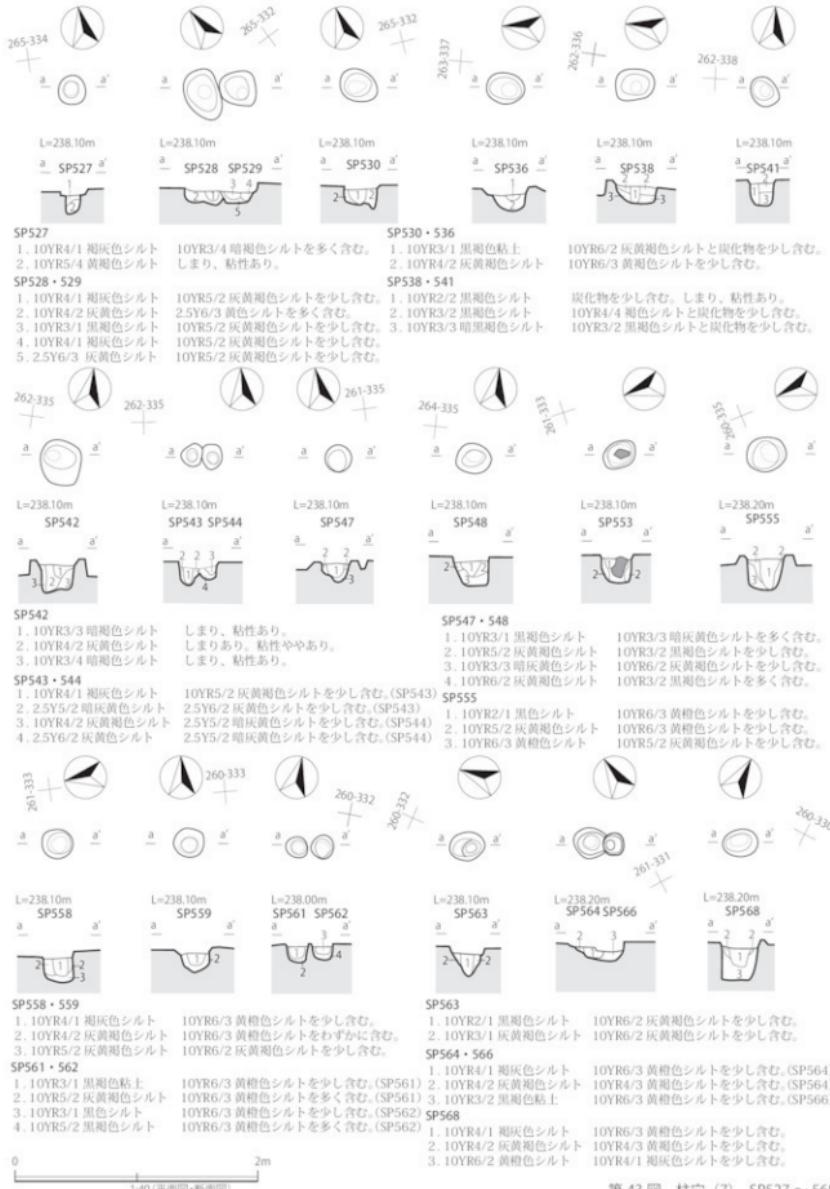
第40図 柱穴(4) SP359～397



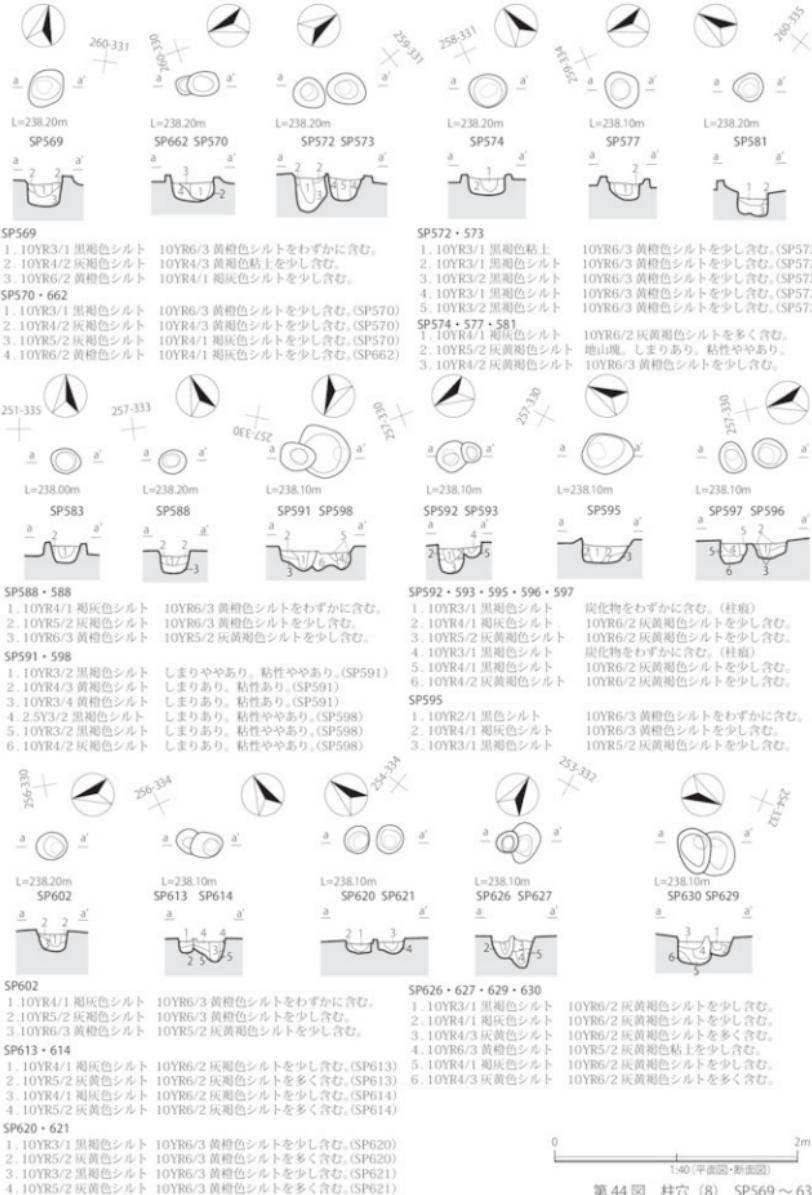
第41図 柱穴(5) SP339~485



第42図 柱穴(6) SP487~524



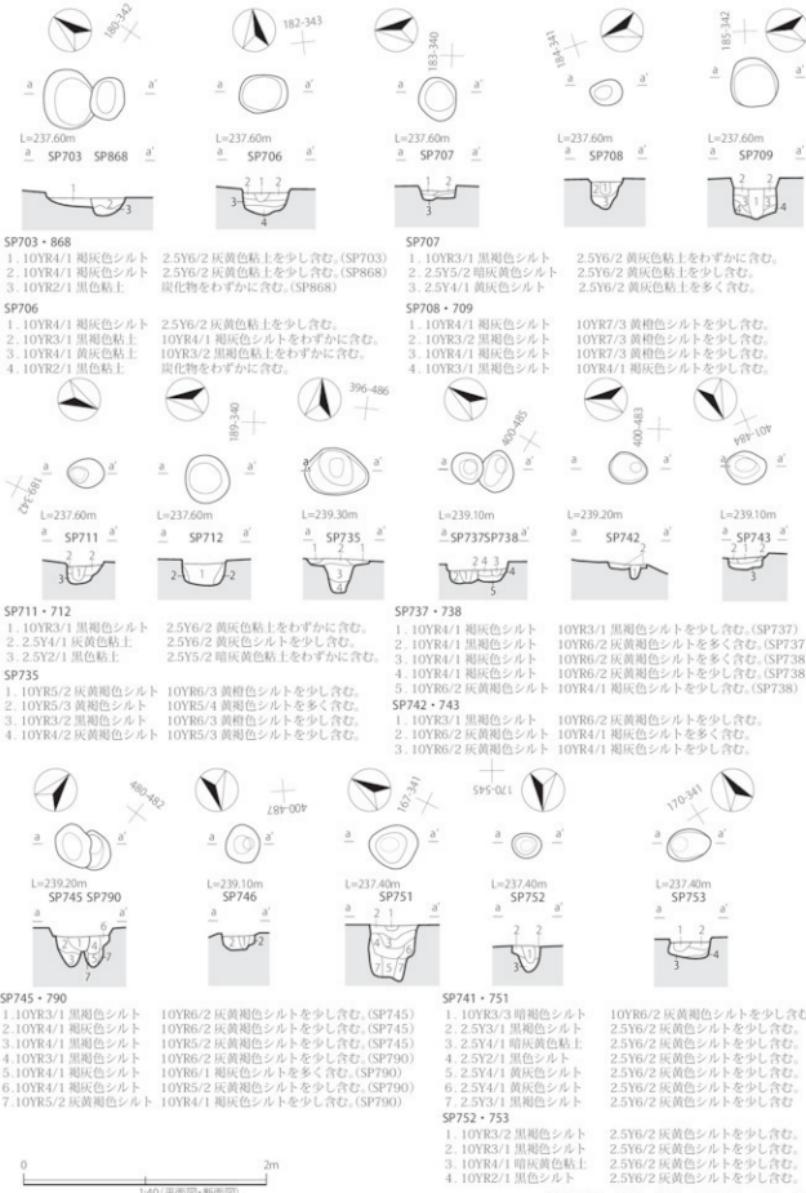
第 43 図 柱穴 (7) SP527 ~ 568



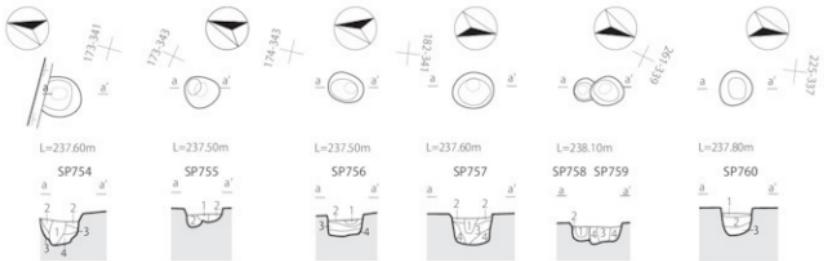
第44図 柱穴(8) SP569~630



第 45 図 柱穴 (9) SP638 ~ 699



第 46 図 柱穴 (10) SP703 ~ 753 · 868

**SP754 - 754-55**

1. 10YR3/2 黒褐色シルト
2. 2.5Y5/1 黒褐色シルト
3. 2.5Y2/1 黒褐色シルト
4. 2.5Y4/1 黄灰色シルト

SP757

1. 10YR4/1 黒褐色シルト
2. 2.5Y3/1 黑褐色シルト
3. 2.5Y4/1 黄灰色粘土
4. 2.5Y5/2 喷灰黄色シルト

2.5Y6/2 灰黄色シルトを少し含む。
2.5Y6/2 黑褐色シルトを少し含む。
2.5Y6/2 黑褐色シルトを少し含む。
2.5Y6/2 黑褐色シルトを少し含む。

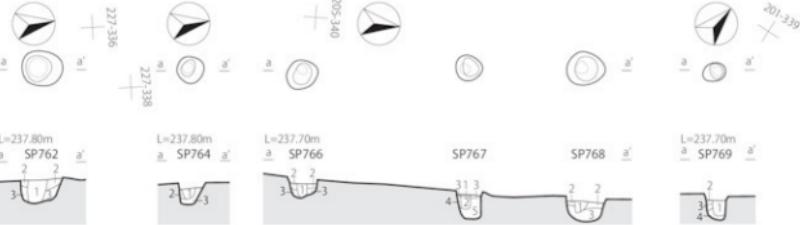
炭化物を少し含む。
2.5Y6/2 黑褐色シルトを少し含む。
2.5Y6/2 黑褐色シルトを少し含む。
2.5Y5/2 喷灰黄色シルトを少し含む。

1. 10YR3/4 黄褐色シルト
2. 10YR4/3 黄褐色シルト
3. 10YR3/2 黑褐色シルト
4. 10TR4/2 黑褐色シルト

1. 10YR4/1 黑褐色シルト
2. 10YR4/1 黑褐色シルト
3. 10YR4/2 黑褐色シルト

しまりあり。粘性あり。(SP758)
しまりあり。粘性あり。(SP757)
しまりあり。粘性あり。(SP759)
しまりあり。粘性あり。(SP759)

10YR4/1 黑褐色シルトを多く含む。
10YR4/3 黄褐色シルトを少し含む。
10YR3/1 黑褐色粘土を少し含む。

**SP762 - 764**

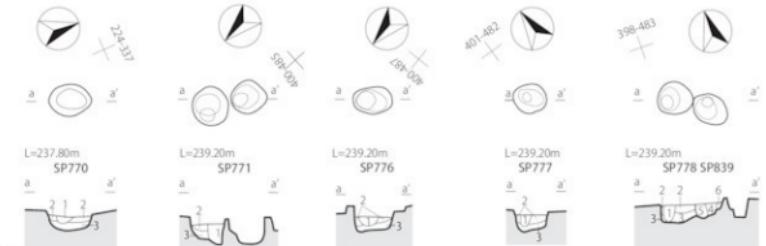
1. 10YR3/ 黑褐色シルト
2. 10YR4/2 喷灰褐色シルト
3. 10YR4/1 黑褐色シルト

10YR4/3 黄褐色シルトを多く含む。
10YR4/1 黑褐色シルトを多く含む。
10YR4/4 黑褐色シルトを多く含む。

SP766 + 767 + 768 + 769

1. 10YR3/1 黑褐色シルト
2. 10YR5/2 黑褐色シルト
3. 10YR4/1 黑褐色粘土
4. 2.5Y4/2 明灰黄色シルト
5. 2.5Y5/3 黄褐色シルト

10YR7/3 黄褐色シルトを少し含む。
10YR7/3 黄褐色シルトを少し含む。
10YR7/3 黄褐色シルトを少し含む。
2.5Y6/3 黄褐色シルトを少し含む。
2.5Y6/3 黄褐色シルトを少し含む。

**SP770 + 771**

1. 10YR3/1 黑褐色シルト
2. 10YR5/2 喷灰褐色シルト
3. 10YR3/1 黑褐色粘土

10YR7/3 黄褐色粘土を少し含む。
10YR7/3 黄褐色粘土を少し含む。
10YR7/3 黄褐色粘土を少し含む。

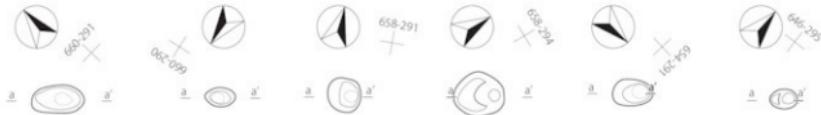
SP778 + SP839

1. 10YR4/2 黑褐色シルト
2. 10YR5/1 黑褐色シルト
3. 10YR4/1 黑褐色シルト
4. 10YR4/1 黑褐色シルト
5. 10YR6/3 黄褐色シルト
6. 10YR5/3 黄褐色シルト

10YR6/4 黄褐色シルトを少し含む。(SP778)
10YR5/2 喷灰褐色シルトを少し含む。(SP778)
10YR6/4 黄褐色シルトを少し含む。(SP778)
10YR6/3 黄褐色シルトを少し含む。(SP839)
10YR5/2 喷灰褐色シルトを多く含む。(SP839)
10YR5/1 黑褐色シルトを多く含む。(SP839)

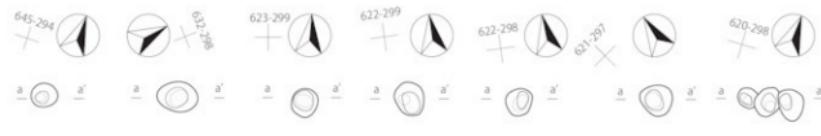


第47図 柱穴(11) SP754～778・839

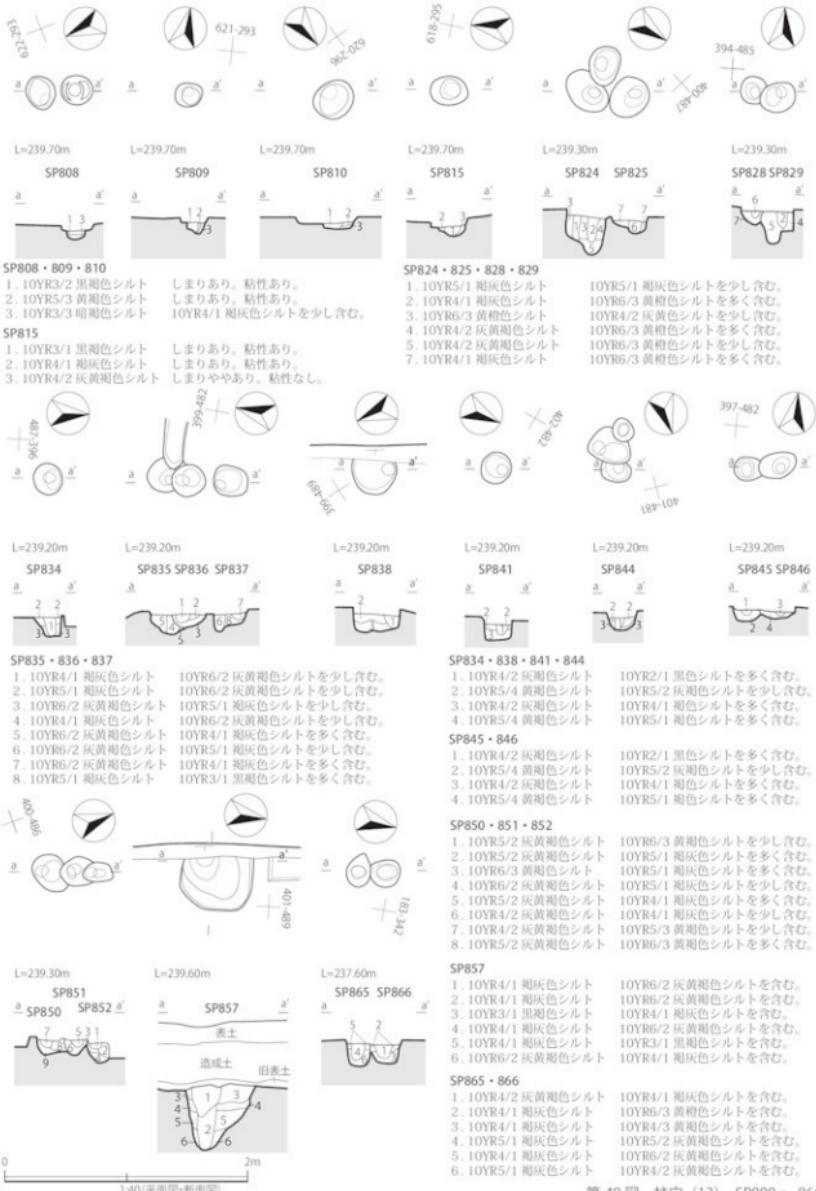


SP782・783・784・785・786・787

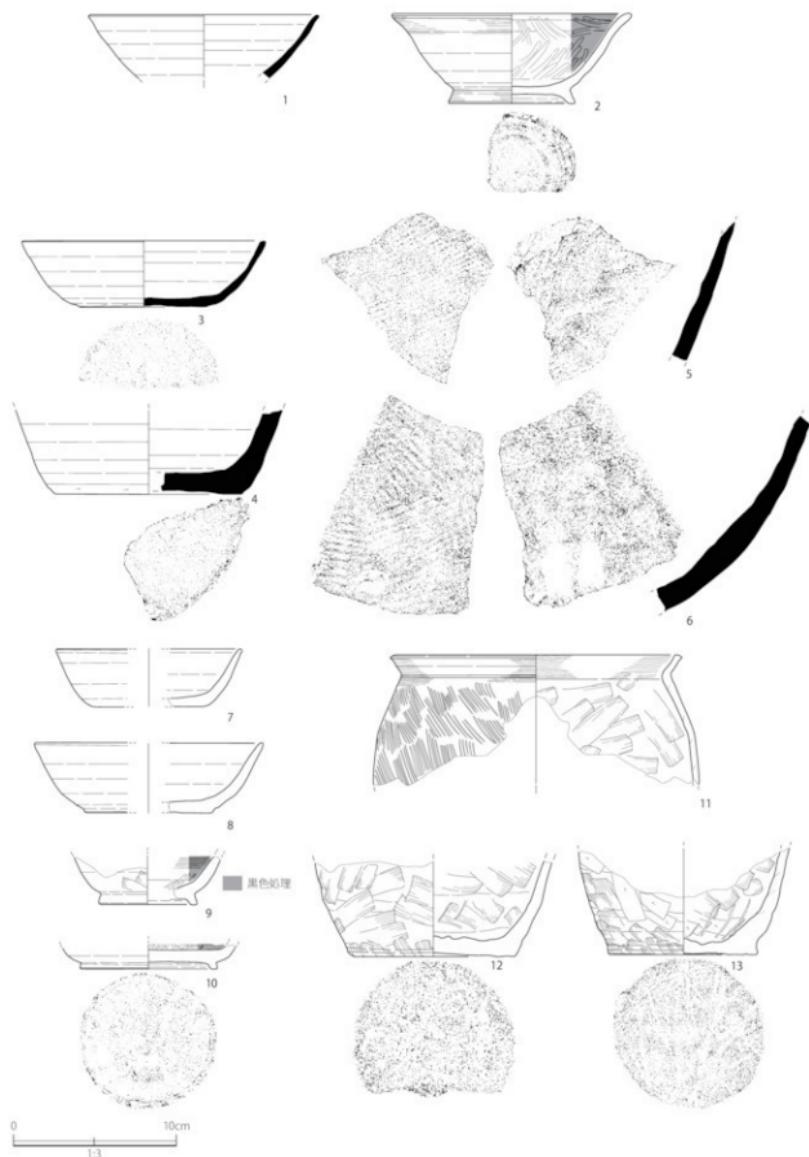
1. 10YR3/1 黒褐色シルト
 2. 10YR5/3 黄褐色シルト
 3. 10YR3/2 黒褐色シルト
 4. 2.5Y6/2 黄灰色シルト
- 10YR6/2 黄褐色シルトを少し含む。
1. 10YR3/1 黑褐色シルト
 2. 2.5Y6/2 黄褐色シルトを少し含む。
 3. 2.5Y6/2 黄褐色シルト
 4. 2.5Y6/2 黄灰色シルト
- 10YR3/1 黑褐色シルトを少し含む。



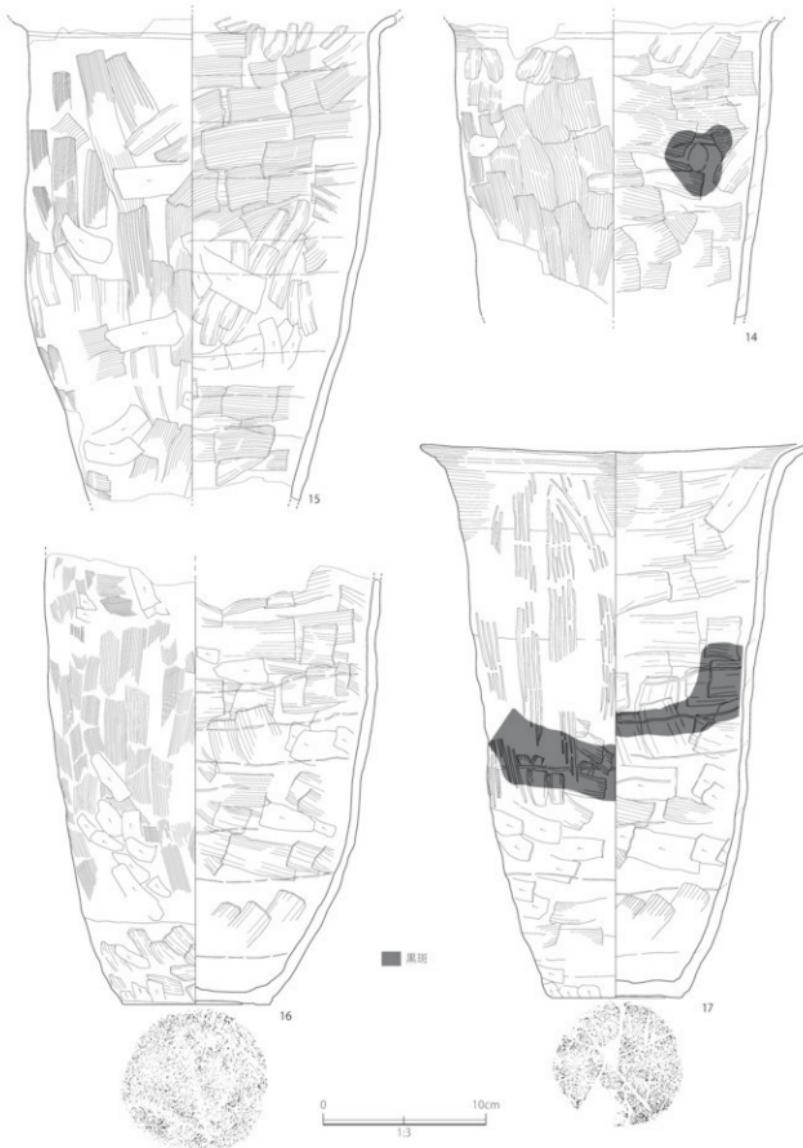
第48図 柱穴(12) SP782～807



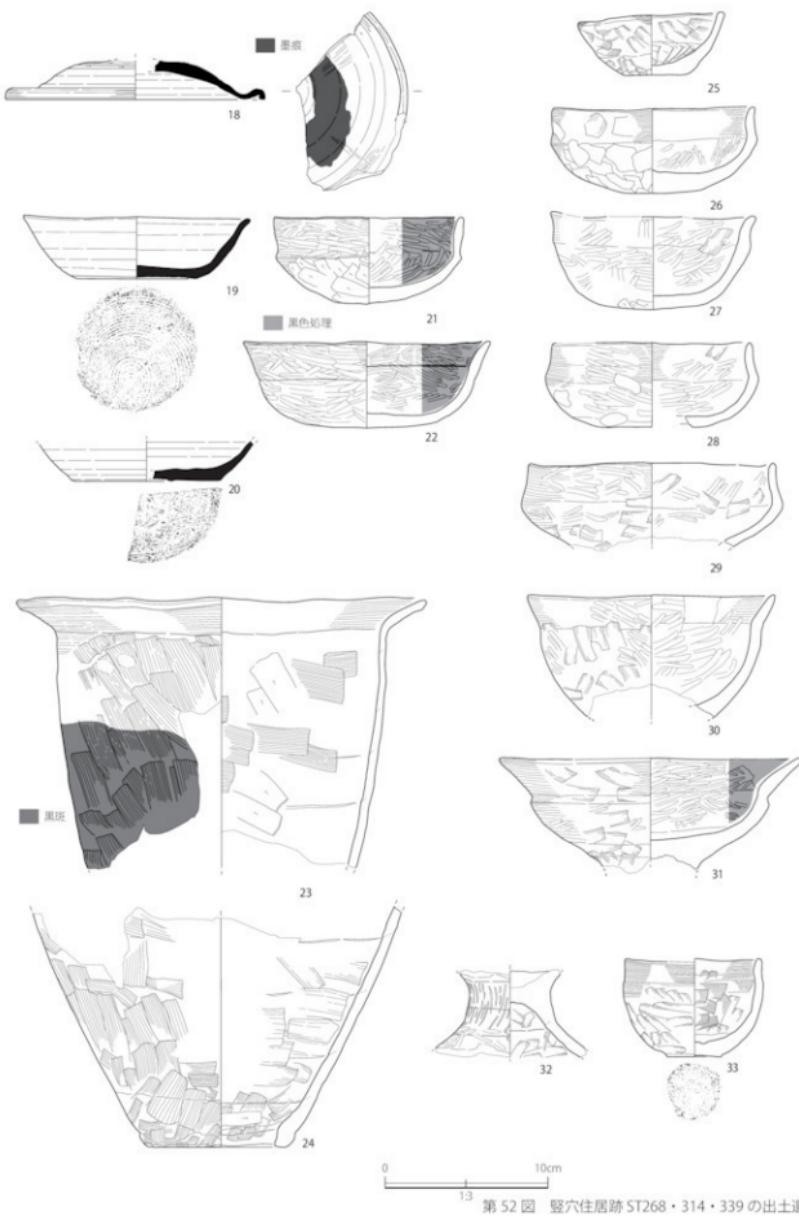
第 49 図 柱穴 (13) SP808 ~ 866



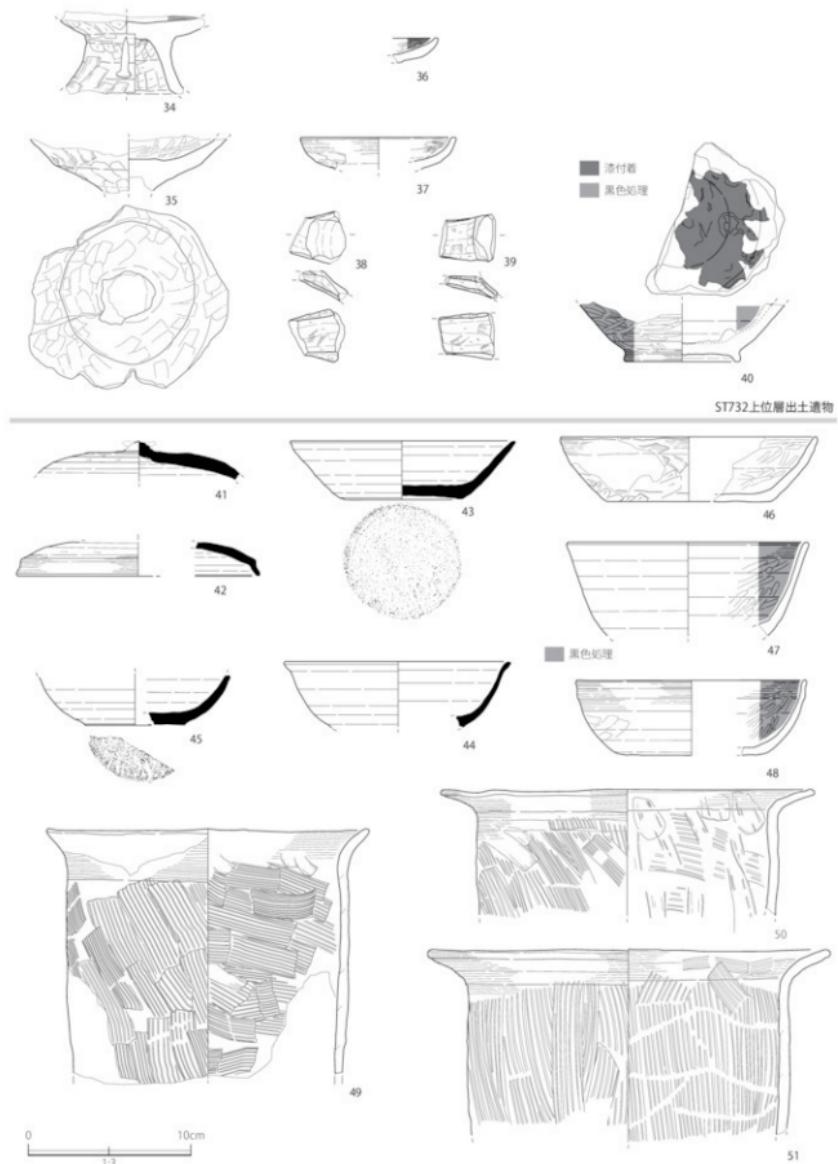
第50図 積穴住居跡 ST3・239の出土遺物



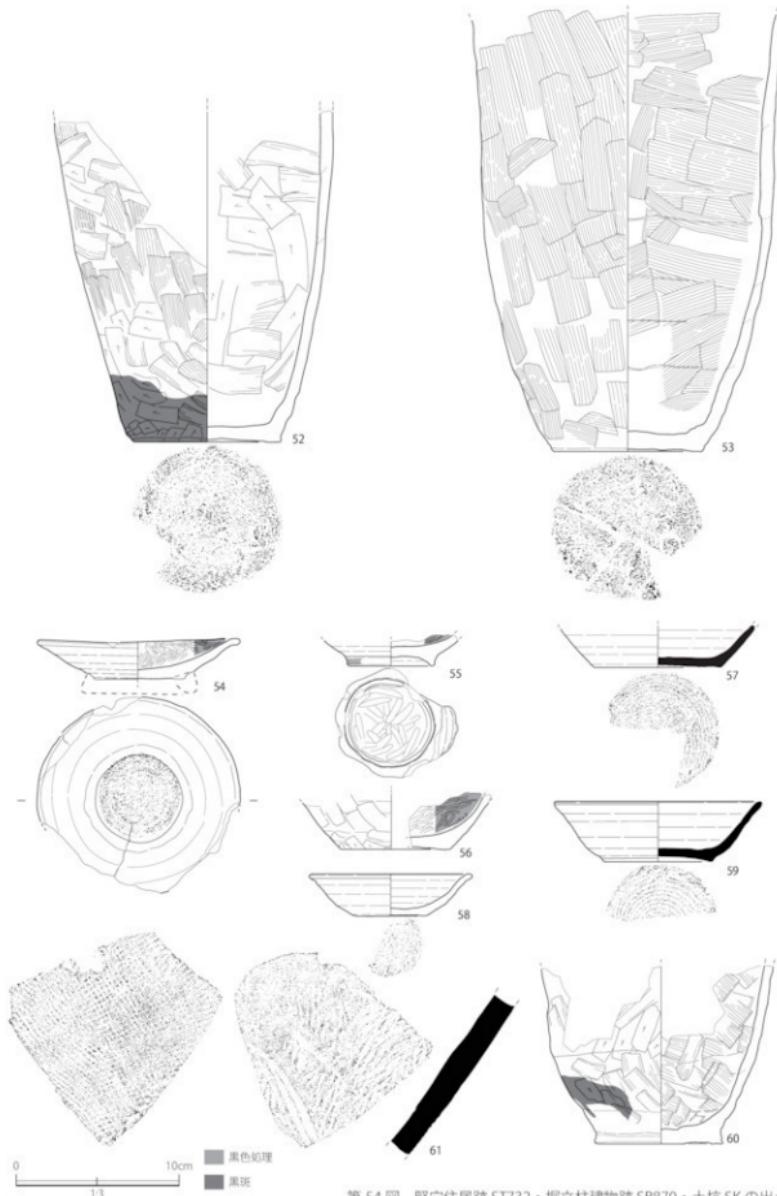
第51図 穂穴住居跡 ST239 の出土遺物



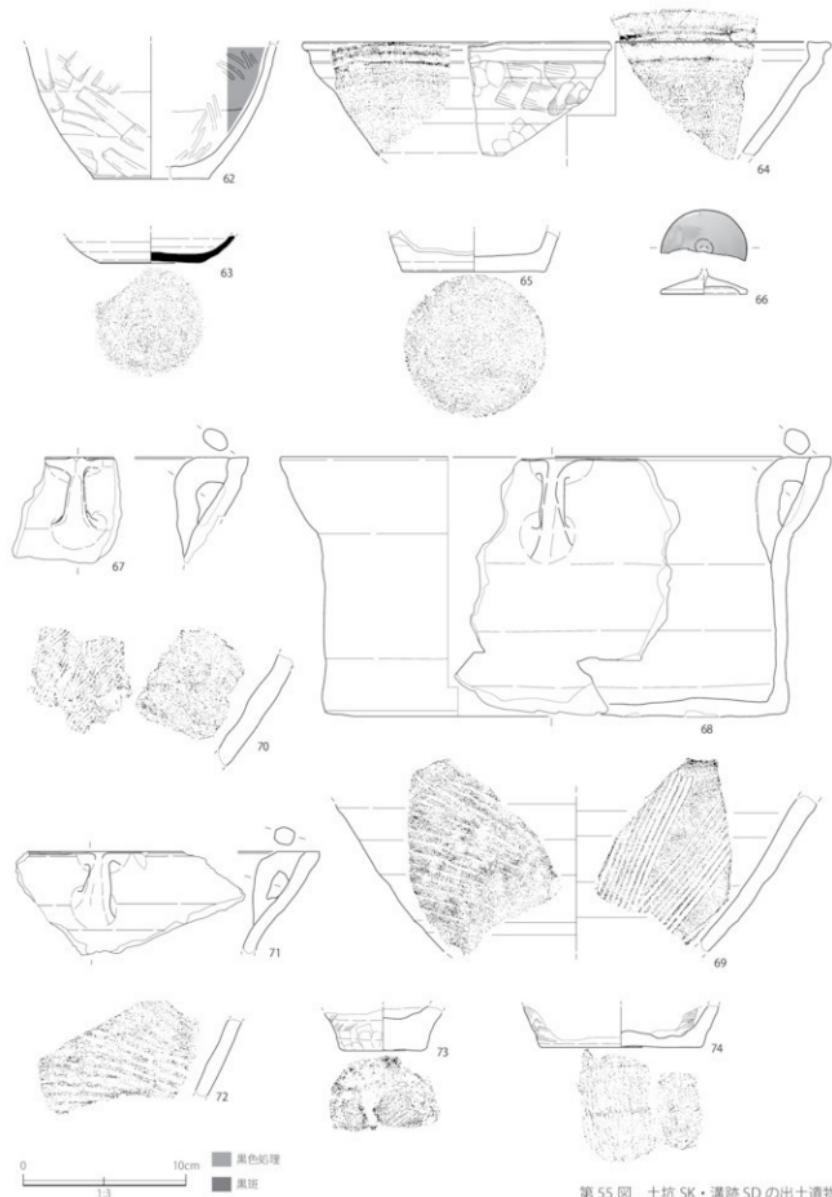
第52図 穂穴住居跡 ST268・314・339の出土遺物



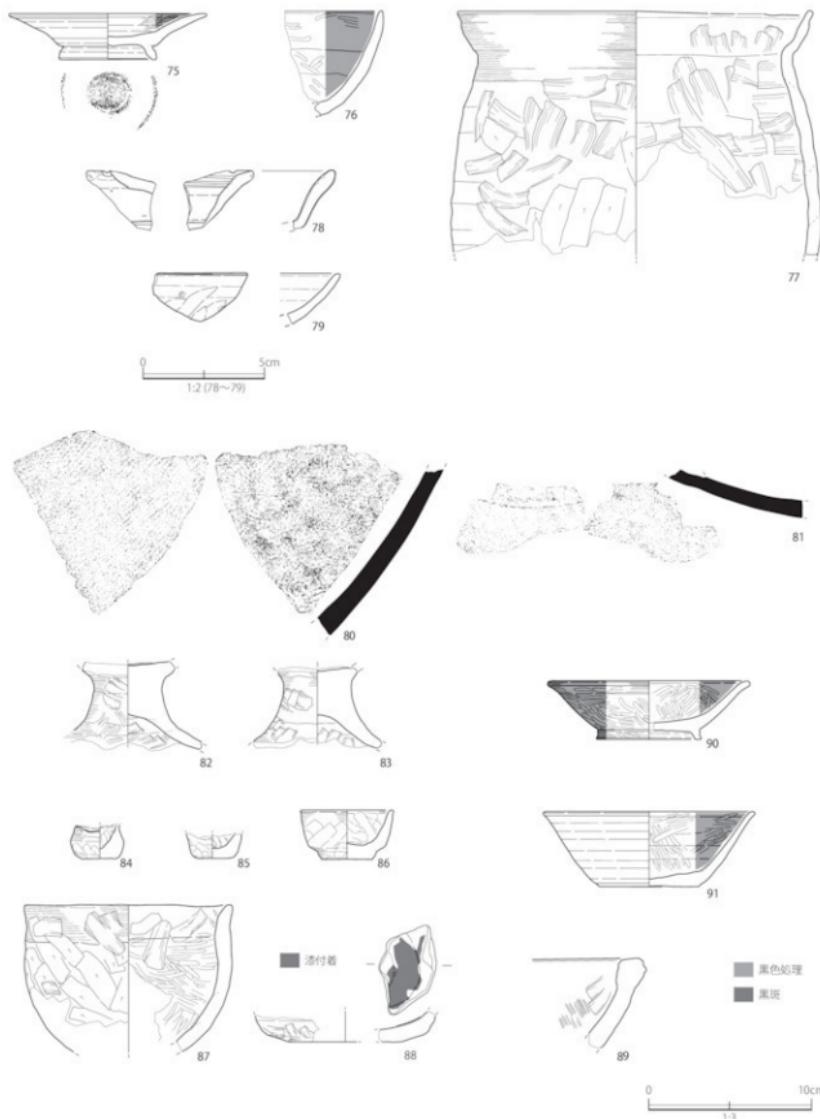
第53図 穂穴住居跡 ST732 の出土遺物



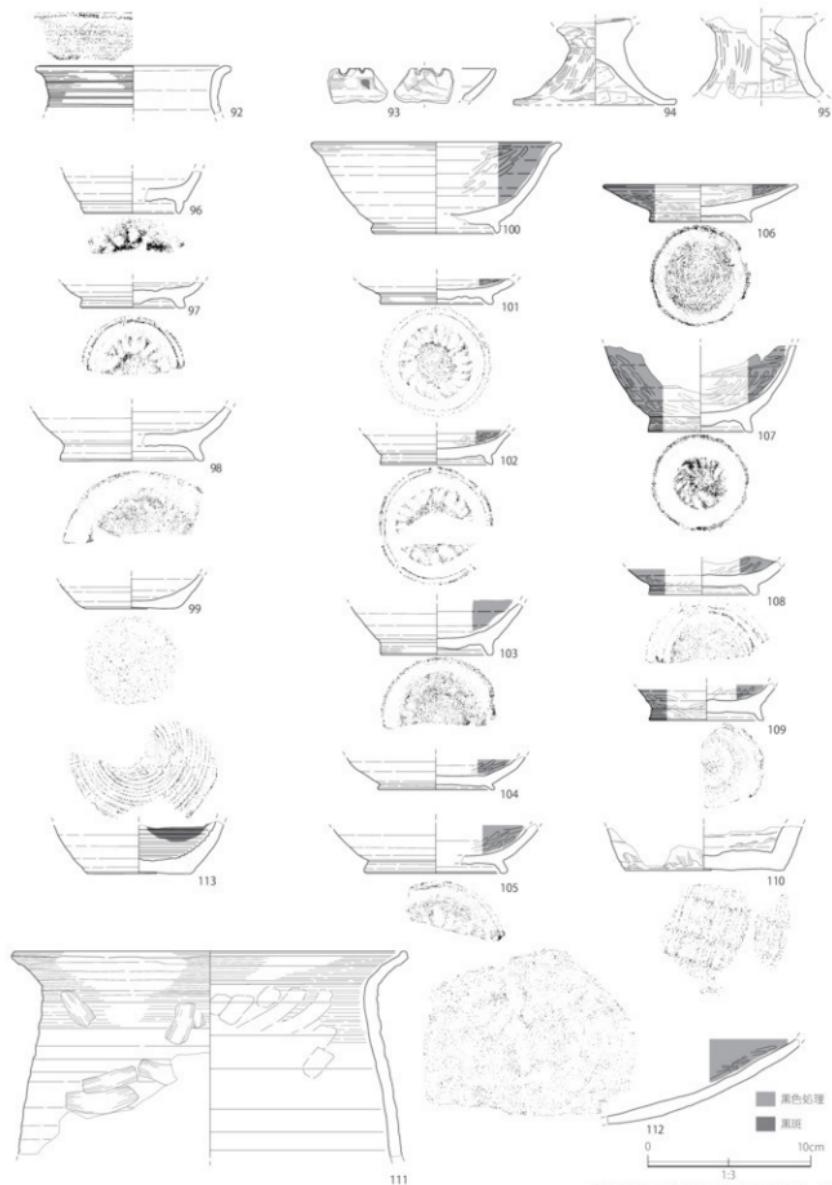
第54図 竪穴住居跡ST732・掘立柱建物跡SB870・土坑SKの出土遺物



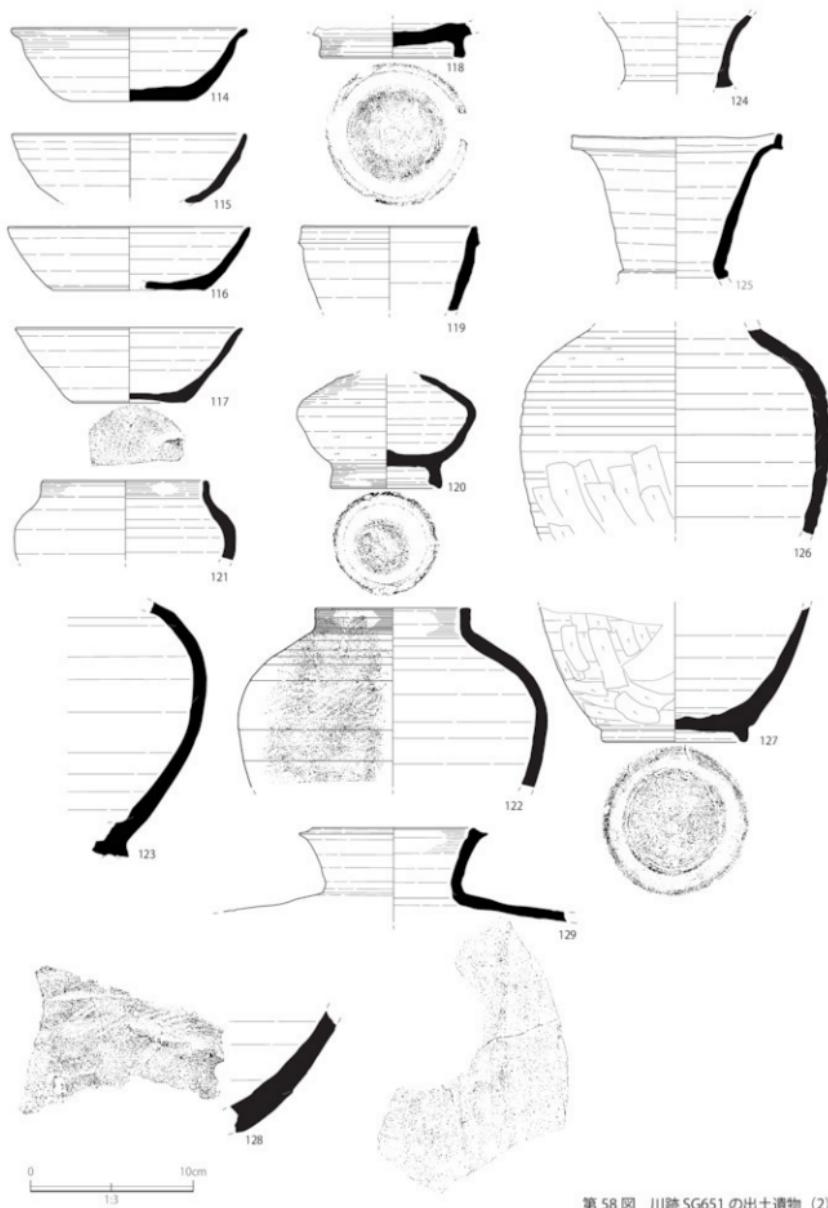
第55図 土坑SK・溝跡SDの出土遺物



第56図 溝跡SD・川跡SG250・513の出土遺物



第57図 川跡SG651の出土遺物(1)



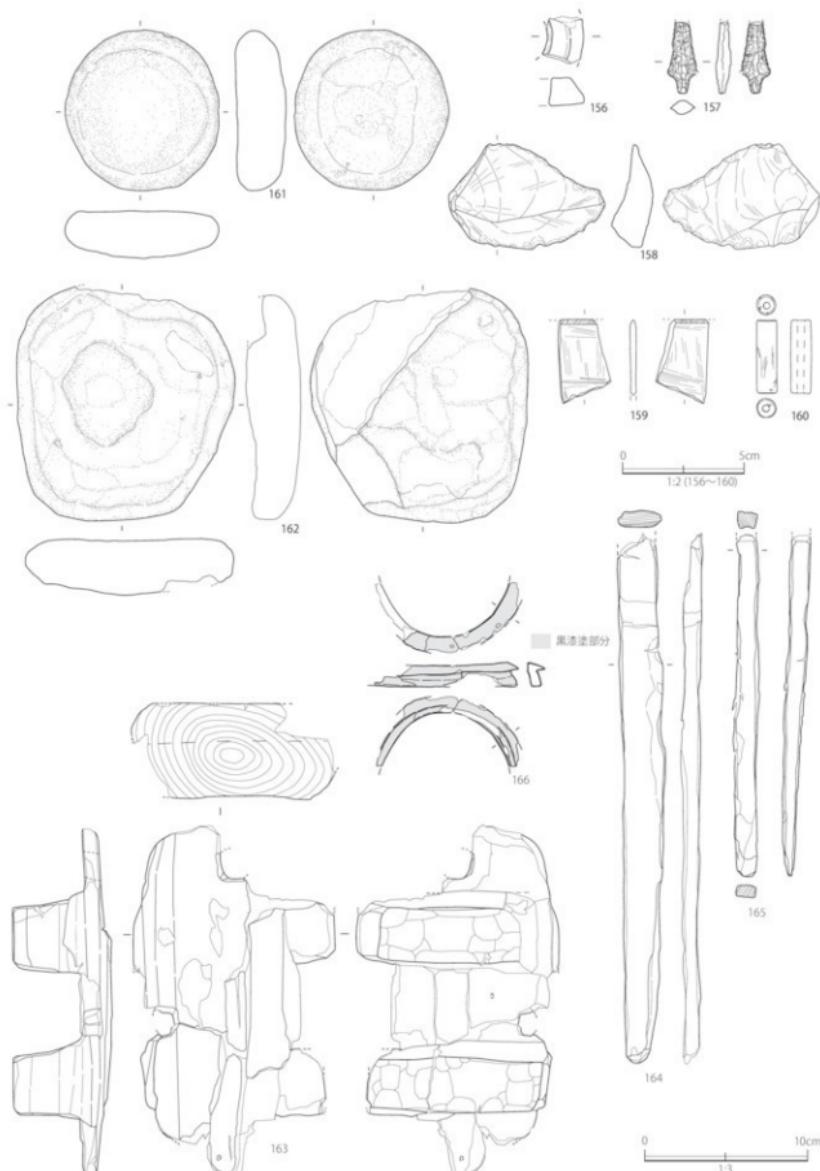
第58図 川跡SG651の出土遺物（2）



第59図 川跡SG651の出土遺物（3）



第 60 図 遺構外出土遺物・製鉄関連遺物



第61図 土製品・石器・石製品・木製品

表 11 遺物観察表

図版 番号	遺物 名	出土地点	種別	器種	計測値 (mm)		調整 内面	底部	胎土	備考	
					口径	底径					
1	ST3EL	須恵器	环	(140)	(40)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切→ナデ	織紗混		
2	ST3EL	土師器 (内里)	有台环	(146)	(76)	55	ロクロ	ロクロ、ミガキ	回転ヘラ切	織紗	
3	ST239-Y	須恵器	环	(150)	78	(54)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	織紗	
4	ST239-Y	須恵器	壺?		(114)	(52)	ロクロ	回転ヘラ切→ナデ	和砂混		
5	ST239EL	須恵器	甕		(85)	タタキ	アマ根		和砂混	表面被熱、剥離	
6	ST239-Y	須恵器	甕		(134)	タタキ	アマ		織紗混		
50	7	ST239-Y	土師器	环	(112)	(66)	(36)	ロクロ	回転ヘラ切	織紗混	表面被熱
8	ST239-Y	土師器	环	(138)	(76)	(43)	ロクロ	回転ヘラ切	織紗混	表面被熱	
9	ST239-Y	土師器 (内里)	有台环		(56)	(30)	ヘラナデ	ミガキ	切削後→ナデ	織紗	表面被熱
10	ST239-Y	土師器 (内里)	有台环		84	(15)	ロクロ	ミガキ	回転ヘラ切	織紗	表面被熱
11	ST239-Y	土師器	甕	(194)		(80)	ナデ、ハケメ	ヘラナデ	織紗混	井口クロ成形	
12	ST239EL-Y	土師器	長胴甕	98	(58)	ナデ、ケズリ	ヘラナデ	切削後→ナデ	和砂混	マド燃焼内出土	
13	ST239EL-Y	土師器	長胴甕	(90)	(65)	ナデ、ケズリ	ヘラナデ、ケズリ木葉痕		和砂混	マド燃焼内出土	
14	ST239EL	土師器	長胴甕		(183)	ハマメ、ケズリ	ハマメ、術頭痕		和砂混		
15	ST239EL	土師器	長胴甕		(298)	ハマメ、ケズリ	ハマメ、ケズリ		織紗		
16	ST239EL	土師器	長胴甕	90	(277)	ハマメ、ケズリ	ハマメ、ケズリ	木葉痕	織紗混	RP2、土窯内土壌年代分析	
17	ST239EL	土師器	長胴甕	(240)	80	340	ナデ、カミキ	ナデ、ケズリ	織紗混	マド燃焼内出土	
18	ST268-F	須恵器	釜 (碳)	(80)	(24)	ロクロ	ケズリロクロ	墨痕	和砂混	転用窯、内面に墨痕	
19	ST268-F	須恵器	环	140	38	75	ロクロ	ロクロ	回転系切	織紗	表面被熱
20	ST268-F	須恵器	环		(90)	(25)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切→ナデ	織紗	
21	ST268-F	土師器 (内里)	环	114	53	ケズリ、ミガキ	ナデ、ミガキ	ケズリ	織紗混	丸底	
22	ST268-F	土師器 (内里)	环	(150)	53	ナデ、ミガキ	ミガキ	ケズリ、ミガキ	織紗	丸底	
23	ST268-F	土師器	長胴甕	(300)	(166)	ハマメ、ナデ	ハマメ、ケズリ		和砂混		
24	ST268-F	土師器	甕		80	(148)	ハマメ、ナデ		和砂混	單孔式	
25	ST314-F	土師器	环	88	38	39	ナデ	ナデ、ケズリ	織紗混	平底気味	
26	ST314-F	土師器	环	122	53	ナデ	ナデ、ミガキ	ミガキ	織紗混	丸底、外腹赤色?	
27	ST314-F	土師器	环	124	60	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	ケズリ	織紗混	丸底、外腹赤色?	
28	ST314-F	土師器	环	(120)	52	ナデ、ミガキ	ヘラナデ、ミガキ		織紗混	外腹赤色?	
29	ST314-F	土師器	环	(148)	51	ナデ、ミガキ	ヘラナデ	ミガキ	織紗混	外腹赤色?	
30	ST314-F	土師器	环	(150)	75	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ		織紗混		
31	ST314-F	土師器 (内里)	高环	(184)	(71)	ナデ、ミガキ	ミガキ		織紗	脚部欠損、环部に段有	
32	ST339-F	土師器	高环		(55)	ハマメ、ナデ	ヘラナデ		織紗	脚部透孔	
33	ST339-F	土師器	环	84	34	61	ナデ、ケズリ	ヘラナデ	輪台→ナデ	織紗混	底部に輪状の粘土貼付
34	ST732-上面 (内里)	土師器	高环		(51)	ハナデ	ミガキ、ケズリ		織紗混	底部に輪状の粘土貼付	
35	ST732-上面 (内里)	土師器	高环		(33)	ハナデ	ナデ、ミガキ		織紗混	脚部透孔 2 孔有	
36	ST732-上面 (内里)	土師器	高环	(140)	(15)	ハナデ	ミガキ		織紗混	受湯のみ	
37	ST732-上面 (内里)	土師器	高环	(96)	(20)	ハナデ	ナデ		織紗混	受湯のみ	
38	ST732-上面 (内里)	双耳环	長 (34) 横 (33)		ケズリ	ミガキ			織紗混	受湯のみ	
39	ST732-上面 (内里)	双耳环	長 (34) 横 (28)		ケズリ	ミガキ			織紗混		
40	ST732-上面 (内里)	須恵器	环 (70)		(36)	ロクロ、ミガキ	ロクロ、ミガキ	切削後→ナデ	織紗	内面に漆膜付着	
41	ST732-Y	須恵器	甕		(24)	ロクロ、ケズリ	ロクロ		織紗		
42	ST732-横耳須恵器	須恵器	环	(150)	(21)	ロクロ	ケズリ	ロクロ	和砂混		
43	ST732-Y	須恵器	环	134	73	38	ロクロ	ロクロ	回転系切	織紗	
44	ST732-Y	須恵器	环	(138)	(51)	ロクロ	ロクロ		和砂混		
45	ST732-EL	須恵器	环		(60)	(31)	ロクロ	ロクロ	回転系切	和砂混	
46	ST732-EL	土師器	环	(158)	(100)	40	ナデ、ケズリ	ナデ、ミガキ	切削後→ケズリ	和砂混	
47	ST732-Y	土師器 (内里)	环	(146)	(58)	ロクロ	ミガキ、ナデ		織紗		
48	ST732-Y	土師器 (内里)	环	(140)	(80)	(46)	ロクロ	ミガキ、ナデ	織紗		
49	ST732-Y	土師器	長胴甕	(198)	(156)	ナデ、ケズリ	ナデ、ハケメ		和砂混		
50	ST732-Y	土師器	長胴甕	(228)	(77)	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ		和砂混		
51	ST732-Y	土師器	長胴甕	248	(118)	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ		織紗混		
52	ST732-Y	土師器	長胴甕	90	(203)	ナデ、ケズリ	ケズリ	木葉痕→ナデ	織紗混		
53	ST732-Y	土師器	長胴甕	90	(274)	ナデ	ナデ		織紗混		
54	SP86-F	土師器 (内里)	有台皿	123	54	(25)	ロクロ		回転系切	織紗	
55	SK20-F	土師器 (内里)	有台环		32	(19)	ロクロ	ミガキ	放射状ミガキ	織紗	
56	SK20-F	土師器 (内里)	环		(72)	(34)	ロクロ、ケズリ	ミガキ	回転ヘラ切→ナデ	織紗	
57	SK141-F	須恵器	环		(78)	(26)	ロクロ	ロクロ	回転系切	織紗	
58	SK622-F	土師質土器	小皿	(98)	40	26	ロクロ	ロクロ、指痕吸	回転系切	和砂混	
59	SK640-F	須恵器	环	(126)	(66)	37	ロクロ	ロクロ	回転系切	和砂混	
60	SK641-F	土師器	甕	78	(109)	ナデ	ナデ、ハケメ	木葉痕	和砂混		
61	SK642-F	須恵器	甕		(98)	タタキ	アマ		織紗		
62	SK644-F	土師器 (内里)	跡?		(72)	(83)	ナデ	ミガキ、ナデ		和砂混	
63	SK733-F	須恵器	环		(64)	(17)	ロクロ	ロクロ	回転系切	織紗混	
64	SK1-F	陶器	縦跡	(326)		(70)	ロクロ・片口	洞口15 倍	織紗	岸発産	
65	SK1-F	陶器 (成島式)	跡?		87	(25)	ロクロ		回転系切	成島燒	
66	SK1-F	磁器	蓋	(52)	(13)	駆付 (草花)	ロクロ		織紗	石垣地 (大船相馬?)	
67	SD726-F2	土師質土器	内耳土鍋		(65)	ヘラナデ	ナデ	ナデ	和砂混	内耳把手付	
68	SD726-F3	土師質土器	内耳土鍋	(34)	(28)	16	ヘラナデ	ナデ	和砂混	内耳把手付、復元実測	
69	SD726-F	土師質土器	縦跡		(96)	ナデ、ハケメ	洞口18 条		和砂混	器面被熱?	
70	SD726-F	須恵器系陶器	甕		(68)	タタキ	円窓アテ		織紗混		
71	SD729-F3	土師質土器	内耳土鍋		(63)	ナデ	ナデ		和砂混	内耳	
72	SD729-F	土師器	甕		(46)	ナデ	タタキ		和砂混		
73	SD729-F	土師器	不明	(48)	(27)	ナデ、ハケメ	ナデ		和砂混		
74	SD484-F	土師器	甕	(98)	(25)	ナデ	ナデ	脚部直	織紗混		
75	SP178-F	土師器 (内里)	有台皿	(120)	(58)	(28)	ロクロ	ミガキ	回転ヘラ切→高台	織紗混	
76	SP325-Y	土師器 (内里)	环		(64)	ナデ、ケズリ	ミガキ、ナデ		織紗混		
56	77	SK82-F	土師器	甕	(216)	(300)	ロクロ、ケズリ	ロクロ、ナデ	和砂混		
78	SK821-F	青磁	焼花器		(24)	ロクロ	焼花器花文		織紗	約 7.5Y1/1, 15c 後半	
79	SK821-F	白磁	有台皿		(20)	ロクロ、蓮瓣文	ロクロ		織紗	15c 後半~16c	

表 12 遺物觀察表

図版 番号	遺物 名	出土地点	種別	器種	計測値 (mm)			調整 内面	胎土	備考
					口径	底径	器高	外面		
80	SG250	須恵器 甕			(102)	タタキ		アテ	細砂混	
81	SG250	須恵器 甕			(48)	タタキ		アテ	細砂混	
82	SG250	土師器 (内里) 高环			(50)	ナデ		ヘラナデ	細砂混	
83	SG250	土師器 (内里) 高环			(54)	ナデ	ミガキ	ナデ、ミガキ	細砂混	
84	SG250	土師器 手捏土器			(24)	21	(20)	ナデ	ナデ	ナデ 細砂混
85	SG250	土師器 手捏土器				23	(15)	ナデ	ナデ	ナデ 細密
86	SG250	土師器 手捏土器			(56)	30	30	ナデ	ナデ	ナデ 細砂混
87	SG250	土師器 手捏土器		环	126	(91)	ナデ、ケズリ	ナデ、ミガキ	ナデ	ナデ 細砂混
88	SG250	土師器 (内里) 环			(70)	(19)	ナデ	ミガキ	ケズリ	細密 内面に朱漆附着
89	SG250	土師器 手捏土器		跡	(55)	ナデ		ナデ、片口	ナデ	片口 細密
90	SG250	土師器 (内里) 环			(124)	(60)	36	ロクロ、ミガキ	ロクロ、ミガキ	回転系切 細密
91	SG250	土師器 (内里) 环			(130)	(62)	46	ロクロ	ロクロ、ミガキ	細砂混
92	SG651	土器 壺?			(60)		(30)	ナデ、条痕	ナデ	
93	SG651	土師器 甕					(20)	ナデ、刺突	ナデ	細密 小型丸底口縫部?
94	SG651	土師器 (内里) 高环			(98)	(52)	ナデ、ハケメ	ミガキ	ナデ	細砂混
95	SG651	土師器 手捏土器		高环	(50)	ナデ、ケズリ	ナデ		ナデ	細砂混
96	SG651	土師器 手捏土器		有台环	(58)	(26)	ロクロ	ロクロ	放射状ミガキ	細砂混
97	SG651	土師器 手捏土器		有台环	(64)	(15)	ロクロ	ロクロ	放射状ミガキ	細砂混
98	SG651	土師器 手捏土器		有台环	(88)	(33)	ロクロ	ロクロ	放射状ミガキ	細砂混
99	SG651	土師器 手捏土器		环	56	(21)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	細砂混
100	SG651	土師器 (内里) 有台环			(154)	(76)	(56)	ロクロ	ロクロ、ミガキ	細密
101	SG651	土師器 (内里) 有台环				68	(16)	ロクロ	ロクロ、ミガキ	放射状ミガキ 細密
102	SG651	土師器 (内里) 有台环			68	(21)	ロクロ	ロクロ、ミガキ	放射状ミガキ	細砂混
103	SG651	土師器 (内里) 有台环			(98)	(32)	ロクロ	ロクロ、ミガキ	放射状ミガキ	細砂混
104	SG651	土師器 (内里) 有台环							放射状ミガキ	細砂混
105	SG651	土師器 (内里) 有台环			70	(20)	ロクロ	ロクロ、ミガキ		細密
106	SG651	土師器 (内里) 有台环			(86)	(31)	ロクロ	ロクロ、ミガキ	回転系切→ミガキ	細砂混
107	SG651	土師器 (内里) 有台环			(120)	(62)	(23)	ロクロ、ミガキ	ロクロ、ミガキ	回転ヘラ切
108	SG651	土師器 (内里) 有台环			(62)	(53)	ロクロ、ミガキ	ロクロ、ミガキ	放射状ミガキ	細密
109	SG651	土師器 (内里) 有台环			(64)	(23)	ロクロ、ミガキ	ロクロ、ミガキ	回転系切	細密
110	SG651	土師器 甕?			(70)	(23)	ロクロ、ミガキ	ロクロ、ミガキ	ナデ	ナデ 粗砂混
111	SG651	土師器 甕?			(98)	(27)	ナデ	ナデ		ナデ 粗砂混
112	SG651	土師器 甕?			(240)		(127)	ロクロ	ロクロ	ロクロ 細砂混
113	SG651	土師器 手捏土器	跡?		(64)	(32)	ロクロ	条痕 10 条	切離後→ナデ	細砂混 内側に塗が付着
114	SG651	須恵器 甕			(138)	(68)	(46)	ロクロ	ロクロ	回転系切 細砂混
115	SG651	須恵器 甕			(134)	(56)		ロクロ	ロクロ	粗砂混
116	SG651	須恵器 甕			(148)	(92)	(39)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切 細砂混
117	SG651	須恵器 甕			(138)	(68)	(46)	ロクロ	ロクロ	回転系切 細砂混
118	SG651	須恵器 甕			(88)	(22)	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	細密
119	SG651	須恵器 甕?				(52)	ロクロ	ロクロ		細砂混
120	SG651	須恵器 甕			66	(70)	ロクロ、ケズリ	ロクロ	ヘラケズリ	細砂混
121	SG651	須恵器 甕			(100)	(49)	ロクロ	ロクロ		細砂混
122	SG651	須恵器 甕			(98)					粗砂混
123	SG651	須恵器 甕			(157)	ロクロ、タタキ	ロクロ			細砂混 外側に灰かぶりあり
124	SG651	須恵器 甕			(45)	ロクロ	ロクロ			粗砂混
125	SG651	須恵器 甕			126	(90)	ロクロ	ロクロ		細砂混
126	SG651	須恵器 甕								細砂混
127	SG651	須恵器 甕			88	ロクロ、ケズリ	ロクロ	切離後→ナデ		細砂混
128	SG651	須恵器 甕			(75)	ロクロ、タタキ	ロクロ			細砂混
129	SG651	須恵器 横瓶			(100)	(58)	ロクロ	ロクロ		細砂混

表 13 遺物観察表

団版番号	遺物番号	出土地点	種別	器種	計測値 (mm)			外面	調整内面	底部	胎土	備考
					口径	底径	器高					
	130	SG651	須恵器	甕			(102)	タタキ	アテ		細砂混	
	131	SG653	須恵器	甕				タタキ	アテ		細砂混	
	132	SG651	須恵器	甕				柳脂波状文	ロクロ		粗砂混	
	133	SG651	須恵器	甕				タタキ	アテ		粗砂混	
59	133	SG651	須恵器	甕			(70)	柳脂波状文(5条)	アテ		粗砂混	
	134	SG651	須恵器	甕							粗砂混	
	135	SG651	須恵器	甕	(450)			ロクロ、タタキ	ロクロ		粗砂混 西谷地 b2 次 SG1278 接合	
	136	B区規則	土師器	甕			(67)	ロクロ	ロクロ		粗砂混	
	137	C区規則	須恵器	甕			(50)	ロクロ	ロクロ		細砂混	
	138	B区表土	青磁	碗	186	114		線彫瀬文	ロクロ		緻密	
	139	C区規則	青磁	碗			(37)		網目		緻密	
	140	D区表土	陶器(志野)	皿			(23)	ロクロ、ケズリ	ロクロ	削出高台	緻密	
	141	D区表土	陶器	甕			(29)	ロクロ	ロクロ		緻密 大幅相馬塗?	
60	142	C区規則	陶器	甕	(100)	(41)		ロクロ	ロクロ		緻密	
	143	C区表土	陶器(成鳥系)	不明	(58)	(15)		指頭痕			ナデ	成鳥系陶器?
	144	C区表土	陶器(成鳥系)	鉢			(37)	ロクロ	ロクロ		緻密 成鳥系陶器	19C
	145	D区表土	陶器	鉢?			(35)	ロクロ・灰釉	ロクロ		緻密 灰釉	
	146	C区規則	陶器	碗			(37)	ロクロ	ロクロ		緻密 大幅相馬塗	19C
	147	B区表土	磁器	紅皿	(14)			蜻唐草文	型押成形		緻密 大幅相馬塗	19C
	148	B区表土	磁器	盤利	(49)			ロクロ	ロクロ		緻密 肥前系、透佐見窯?	
	149	A区表土	磁器	盤利	(106)			ロクロ	ロクロ		緻密 外面染付、肥前系	
	150	C区表土	磁器	碗	40	(40)		ロクロ、染付	ロクロ		緻密 底部内面染付、肥前系	
	151	C区規則	クロム青磁	小坪	(80)	(40)	(37)	ロクロ、無釉	ロクロ		緻密 残存 1/2	

表 14 製鉄関連遺物観察表

団版番号	遺物番号	出土地点	種類	計測値 (mm)				備考	
				長さ	幅	厚さ	重量 (g)		
	152	SG250	200-420G	鉄滓 (鈍化物)	22	35	9	20	
60	153	SG250	195-420G	羽口	28	(群 54)	12	40	孔径 22mm、鉄滓付着
	154	SD864	F1	羽口	74	(群 71)	21	120	孔径 25mm、鉄滓付着
	155	SG651	F3	羽口	(275)	径 73	25	1200	孔径: 先端 23mm、後端 40mm、鉄滓付着

表 15 石器・土製品・石製品観察表

団版番号	遺物番号	出土地点	種類	材質	計測値 (mm)				備考
					長さ	幅	厚さ	重量 (g)	
	156	A区埋積土	纺輪	土製品	20	15	11	8	孔径 18mm
	157	A区埋積土	石鏡	真岩	29.5	12	6	6	凸基有式
61	158	SG651	フレイク	真岩	64	42	14	17	未製品?
	159	SK640	石製標品	粘板岩	34	21	2	4	黒色粘板岩、板状で端部を成形
	160	SG250	管玉	滑石	30	径 8	-	2	孔径 3mm
	161	ST239	礪石器	安山岩	径 95	-	30	494	磨石?
	162	ST239	礪石器	安山岩	143	128	35	654	白石?

表 16 木製品観察表

団版番号	遺物番号	出土地点	種類	木材	計測値 (mm)				備考
					[長さ (直徑)]	幅	厚さ	重量 (g)	
	163	SD726-F	透齒下駄	ウルシ科ウルシ属	(218)	(125)	61		年代測定結果、16 ~ 17c
61	164	SD864-F2	板材	ヒノキ科アヌラ族	326	28	10		
	165	SD864-F2	角材	ヒノキ科アヌラ族	209	12	10		
	166	SD864-F2	漆塗製品	ブナ科ブナ属	(86)	11	15		環状・漆面を全面に埋付 年代測定結果、15 ~ 16c

表 17 穴穴住居跡 ST239 カマド EL1 烟石観察表

写真団版	遺物番号	出土地点	石材	計測値 (mm)				備考
				長軸	短軸	厚さ	重量 (g)	
	167		凝灰岩	252	188	136	4520	カマド西側袖石
	168		凝灰岩	202	173	124	2610	カマド下西側袖石
	169		砂岩	334	158	84	7040	カマド下東側袖石
31	170	穴穴住居跡 ST239 カマド EL1	砂岩	161	148	120	2720	カマド東側袖石
	171		花崗岩	173	160	114	3020	カマド東側袖石
	172		花崗岩	167	117	87	2510	カマド西側袖石?
	173		砂岩	281	100	52	2910	カマド焚口出土

V 総 括

今回の調査では、馳上遺跡と西谷地 b 遺跡に係る約 3,068 m²の範囲を対象に発掘調査を行った。調査区は A ~ D 区までの 4箇所を設定した。各調査区の遺構と遺物については第Ⅲ章で述べた。ここでは、検出遺構のなかでも主要なものを取り上げ、年代、性格等を検証して総括に代えたい。

A 古墳時代

古墳時代に属する遺構は、A 区の竪穴住居跡 ST314 のみが明示でき、他に判断できるものは少ない。住居内に付随する床下土坑 EK873 から出土した一括遺物は、丸底の土師器壺が主体を占め、黒色処理を施すものが確認されないことが注目される。当該地域では、6 世紀代から黒色処理を施す壺類が増加する傾向にある。それ以前は、非黒色処理の壺や所謂、須恵器模倣壺が主体的にみられ、土坑内出土の壺類の特徴と相違ない。共伴する第 52 図 31 は、外面中位に段を持つ有稜高壺である。壺部は 2/3 が残存し、口径は復元値で径 16cm を測る比較的大型のものと推察される。その形態から 5 世紀中葉段階に比定される。これらの遺物組成や出土状況を踏まると住居廐縁に伴う時期判断の明確な一括資料であると捉えた。住居跡は古墳時代中期末葉まで遡れるといえよう。

他に遺構内出土の遺物では、A 区竪穴住居跡 ST268 出土の土師器壺がある。黒色処理を施す丸底壺の 2 点である（第 52 図 21・22）。古墳時代後期の広範に捉えたが、前述した須恵器模倣壺に近似した器形で、比較的丁寧なつくりであることから、器形が崩れ始める前段階の可能性が高く、時期的に後出するものとは一線を画す。

当該期に属する遺物は、馳上遺跡西側の C 区竪穴住居跡 ST732 上面出土の遺物群に、高壺の脚部や器台の破片が含まれる。他に堆積層出土の管玉や川跡出土の手握土器などが挙げられる。土坑 SK640 覆土から出土した第 61 図 159 石製品は、黒色の粘板岩を加工した板状の模造品である。石製模造品は、市内北東部に所在する南原遺跡や鎌倉上遺跡で複数個の出土が認められ、い

ずれも黒色の粘板岩を石材に用いる点や両遺跡の主体となる時期が古墳時代中期末から古墳時代後期初頭であることに注目したい。石材となる粘板岩は、県内では産出しない。製作したとされる生産遺跡も現在まで確認されてないため、他地域からの搬入品であると考えられる。

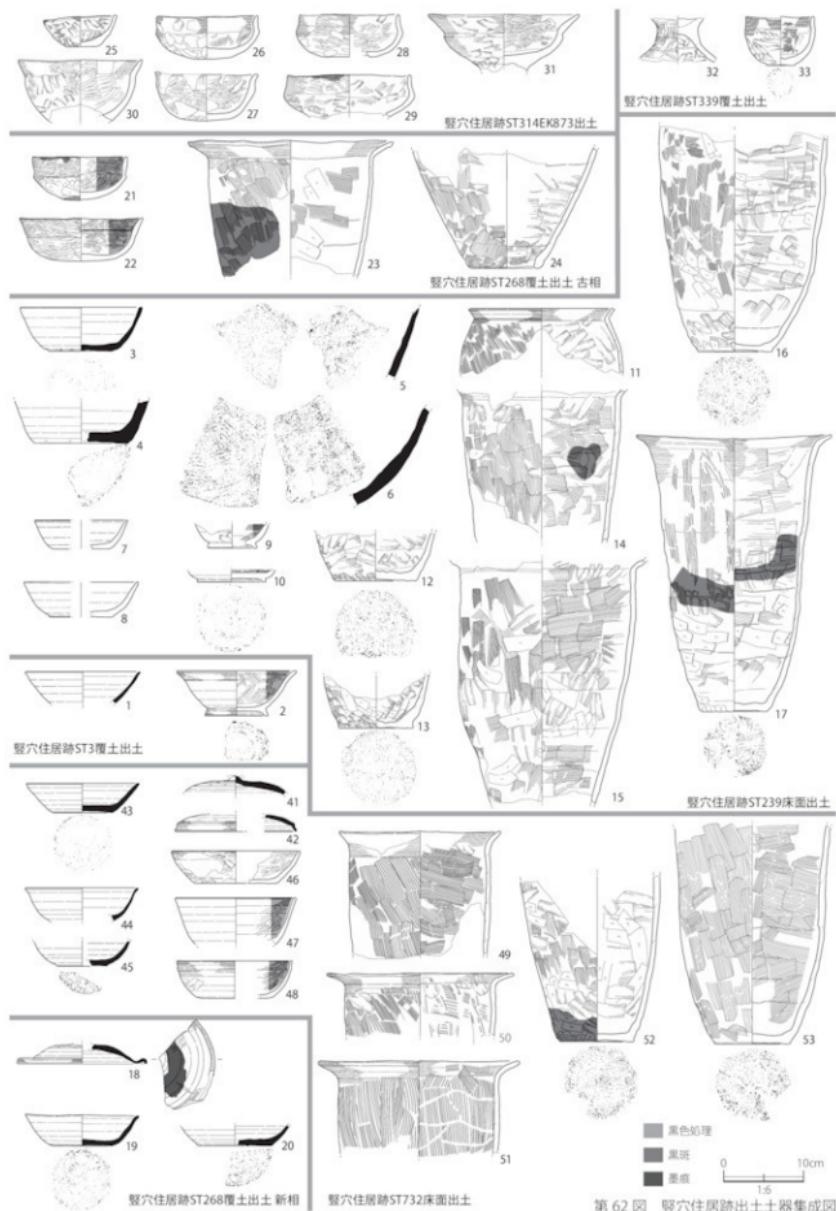
以上からのことから、遅くとも 5 世紀末には、この地に集落が営まれたことが窺い知れる。

B 平安時代

両遺跡の主たる時期で、竪穴住居跡、掘立柱建物跡をはじめ、各調査区全域で当該期の遺構が検出されている。ST3・238・239・732 の 4 棟の竪穴住居跡は、いずれも南壁にカマドが付属して確認された。狹小な調査区であるにも関わらず、ST238・239 は全容が窺える住居跡である。住居内から炭化物と焼土を含む堆積層が確認される。出土遺物の大半に赤く焼けた被熱痕がある点からも焼失住居と判断した。焼失時の層厚は薄く、焼失した柱材など住居構築材の炭化物は確認されないため、住居廐縁に伴う「焼かれた」住居跡と推察される。

床面上には多くの遺物が遺存し、須恵器壺や土師器壺がまとまってみられる。Ⅲ章でも触れたが、カマドの燃焼部では土師器壺が重なり合う状態で確認された。カマド燃焼部内の遺物の出土状況は、遺構の所属時期を決定するだけでなく、「カマド祭祀」や「カマド廐縁儀礼」の行為を反映している可能性も指摘される。本来、カマド内に正位で設置される実用品の土師器壺が、逆位で入れ子状態で出土する点を勘案すると、意図的に燃焼部内に挿入された可能性が指摘される。カマド付近で出土する土師器壺は、8 世紀以降に普遍的にみられる長胴壺で、ロクロ成形後に縱方向のケズリやナデ調整を施している。供出する回転ヘラ切りの須恵器無台壺や菲ロクロロ整形の球状の土師器壺が加わる点から遅くとも 9 世紀第 1 四半期、平安時代前半段階に属すると捉えた。

一方で C 区に位置する ST732 は比較的深い掘り込みを成している。住居床面やカマド周辺に遺存する須恵器壺は大半が底部糸切り調整で、器高の高いものが見られ



第62図 縫穴住居跡出土土器集成図

ことから9世紀第3四半期に属すると推察される。

以上、竪穴住居跡を中心に時期的な変遷を追ってみたが、平安時代後半ともなると竪穴住居を主体とする集落構成から掘立柱建物の配列が優先されるようである。前回調査の西谷地b遺跡第2次調査では、竪穴住居跡が人为的に埋め戻され後に、同じ場所に掘立柱建物が建てられた形跡が確認されている。馳上遺跡でも墨書き土器や円面鏡などの官衙に関連する遺物や、倉庫と目される総柱構造の建物跡が増加する（年報2013）。集落の性格が郡ないし郷などに付随する官衙的な施設へ変貌したと考えられている。

本調査では、A区の中央域で掘立柱建物跡が3棟確認された。そのうちSB870とSB871は、規模の大きな柱穴からなる建物跡である。SB870は第2次調査で検出された建物柱列と対応する三間×三間の側柱建物跡である。一方でSB871は二間×二間の総柱建物の倉庫と考えられる。北方位を向く二つの建物は、ほぼ同一軸の配列を成すことから両建物群が同時期に存在した可能性が極めて高いと判断した。周辺には、建物構成の柱穴と同規模を測る柱穴や、掘り込みが一段と深いものも存在し、さらに建物として復元できるようである。西谷地b遺跡の検出遺構の精査、照合作業による建物復元の再検討が課題として残る。

遺跡の地形を形成するSG250・651川跡からは、奈良・平安時代に属する土器も出土している。川跡内は当時の水流により、堆積土が攪拌されているため、古墳時代から平安時代までの遺物が混在して出土している。断面観察から洪水や氾濫時の堆積物で徐々に川底が浅くなり、中世までには川跡は完全に埋没したことが窺える。中世に属する小柱穴や大溝などの遺構群は、埋没した川跡上で多く検出される。

C 中世

西谷地b遺跡第2次調査区の東側に隣接するB区を主たる分布域として、小柱穴や溝跡が確認された。第2次調査では、一辺約45mの溝跡に囲まれた屋敷跡が検出されている。溝跡の幅は最大約2.5mで、区画内平坦地には建物を構成していた無数の柱穴が確認された。区画溝とされる溝跡は、これまで10条ほど確認されており、重複して検出されることから土地の区画が幾度か

やり直されたことが判明している。出土遺物から鎌倉時代と室町時代後半の二時期を主体とする遺構群の存在が把握されている。区画溝の時期については、内耳土鍋や伊達家の家紋が描かれる漆碗が出土している点から16世紀に属するとされている。ほかに下駄・曲物等の木製品や硯・茶臼、製鉄関連の遺物などがみられる（年報2010）。本調査では、いずれも第2次調査の溝跡に対応する溝跡SD680・726・729・864が確認された。配置の概略や対応関係は、以下のようになる（第13図）。

第2次調査溝跡 B区検出溝跡

溝A: SD2186・2202 → SD729・864

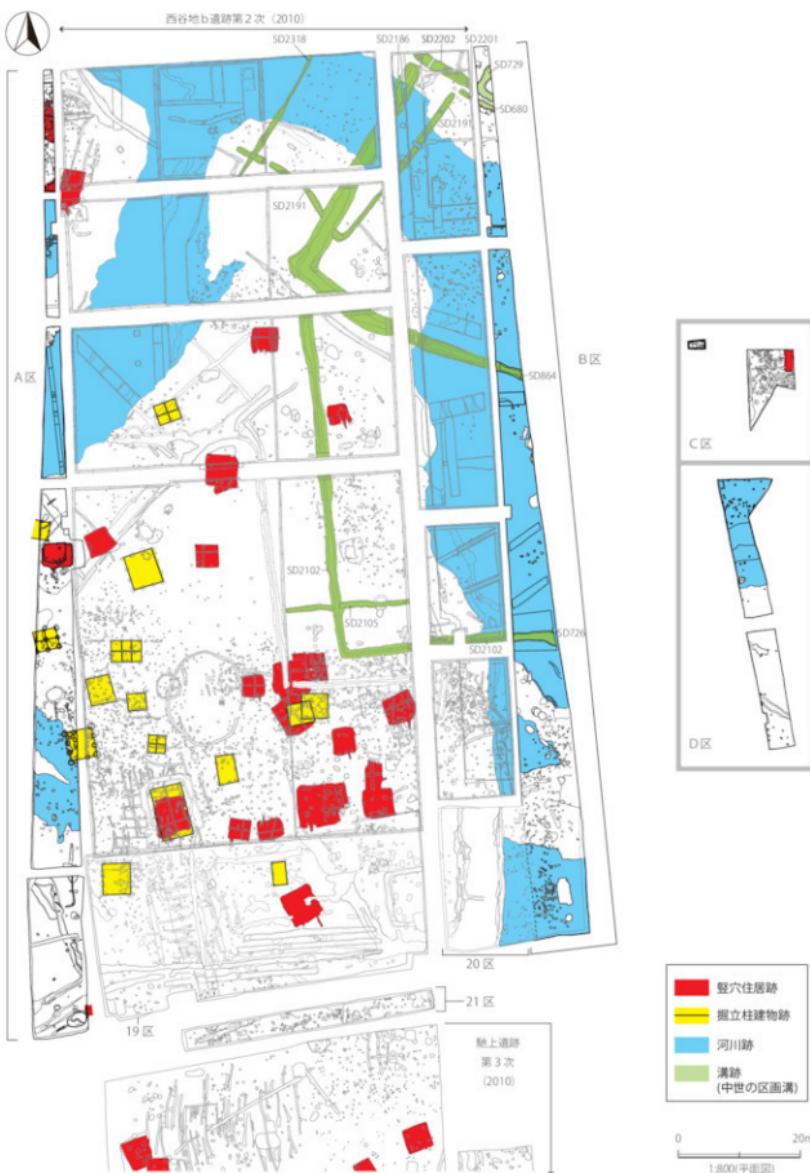
溝B: SD2102 → SD726

溝C: SD2191・2201 → SD680

溝A、BにあたるSD2186、SD2102が当域を大区画する中心の溝跡であることが把握できる。平面図上から読み解くに、双方の溝跡は幅2.0～2.5mを測り、溝Aは北西から南東軸、溝Bが北方位を基軸として配置される。なお、溝Aは北進して溝Bの北西端部と重なるが、その地点から広がりがみられない。SD680・2201の溝Cは、調査区外南東側から延びる幅1.0mの溝跡である。SD2191と同一の溝跡と捉えられ、溝AのSD2186と重なりを見せながら、かぎ状に屈曲して北西位へと延びる広がりをみせる。

B区で検出された溝跡の詳細と照合すると、溝A対応のSD729・864では、溝が基軸の南東位へと延長して延びる広がりをえた。北辺のSD729では、さらに分岐して北東位へ延びる広がりが把握できた。溝跡からは前回調査と同様に、内耳土鍋片が検出される。南辺にあたるSD864では、加工面のある木製品や環状の漆塗製品、鞆の羽口が出土する。溝Bと同一のSD726では、SD2102の延長線上にあたる範囲が検出された。耕作等の削平で溝上面部の大半が失われるが、残存する覆土下層からは、全体の形を知り得る内耳土鍋や土師質の擂鉢、差歛下駄が出土した。これらの溝跡出土の木製品や種子は放射性炭素年代測定の結果、15世紀末から16世紀代の範囲にあり、出土遺物に基づく年代観と矛盾しない。

溝Aの区画内は、川跡SG651が埋没した後の平坦な地形を利用しており、柱穴や小ピットの遺構群が確認される。明瞭な柱痕が認められる柱穴も少なくなく、建物が存在した可能性は、十分に推測される。



第 63 図 検出遺構詳細図

D まとめ

本調査では、調査範囲が狭小のため遺構の広がりについて断片的な情報を得るにとどまった。しかし、西谷地 b 遺跡第2次調査の区画溝の広がりに対応する溝跡 SD680・726・729・864 が把握されたことから、中世に属する遺構は、遺跡範囲の北側及び東側に中心があると推察される。屋敷地と推定される大溝に囲まれる区画内には、これに付随する柱穴と現段階で最も東端に位置する区画溝の一部を検出した。今回は、建物や柱穴列

に組み合うものは明示できなかったが、区画溝の広がりや検出された柱穴は、今後の区画内建物の復元を判断する材料となり得る。一方で、北西側には古墳時代中期末から後期初頭の集落が展開したことが把握される。

馳上遺跡では、第1次調査に付随する遺跡南側の集落様相を考える材料が得られたといえる。

馳上遺跡・西谷地 b 遺跡の両遺跡がちょうど重なり合う調査範囲にあたり、遺構の分布や時期的変遷など、両遺跡を包括した集落全体の展開過程に迫ることを今後の課題としておく。

引用・参考文献

- 大橋康二 1993 「肥前陶磁」 ニューサイエンス社
- 青山博樹 1999 「古墳時代中～後期の土器編年—福島県中通り地方南部を中心に—」『福島考古』 第40号 p.54～p.57
- 阿部明彦・吉田江美子 2002 「山形県における古墳時代中期の土器様相(1)」『山形考古』 第7巻第2号(通巻32号) 山形考古学会
- 郷土出版社 2001 「図説 展置の歴史」
- 公益財団法人山形県埋蔵文化財センター 2012 「福島山脈路第3次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第208集
- 公益財団法人山形県埋蔵文化財センター 2013 「年報 平成24年度」 公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 財団法人福島市進行公社 1998 「岸窓跡」 福島市埋蔵文化財報告書第111集
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 1994 「南原遺跡・堂ノ下遺跡・飯塚跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第2集
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 1997 「荒川2遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第43集
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2000 「中里遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第75集
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2001 「太夫小屋1・2・3遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第160集
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2002 「北山廻転敷発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第103集
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2002 「馳上遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第101集
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2010 「岩崎遺跡第1・2・2次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第188集
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2010 「年報 平成21年度」 財團法人山形県埋蔵文化財センター
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2011 「年報 平成22年度」 財團法人山形県埋蔵文化財センター
- 財団法人山形県埋蔵文化財センター 2012 「堤屋敷遺跡第2次・下屋敷遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第203集
- 佐久間正明 2000 「福島県における五世紀代の土器変遷—様式の侧面を中心に—」『法考古学』 第26集
- 高桑登 2003 「4 内丘土鍋」『中世東夷の土器・陶磁器』 p.87～p.97 高志書院
- 高橋拓 2008 「山形県米沢市成島の近世営業の研究」『米沢史学』 第24号 p.32～p.61 山形県立米沢女子短期大学米沢史学会
- 丹治直嘉 2010 「カマドを有する壁穴住居跡の床面に埋め込まれた遺物」『研究紀要2010』福島県文化財センター白河館
- 東北中世考古学会 2009 「掘立と壁穴—中世遺構論の課題—東北中世考古学会第7回研究大会資料集』東北中世考古学会
- 長谷川厚 1993 「赤い土器・黒い土器」『隋古論聚』久保哲三先生追悼論文集刊行会
- 福島県考古学会 2000 「東北南部における中世集落の諸問題—掘立柱建物跡を中心として—」福島県考古学会中世部会平成12年研究セミナー
- 山形県 1985 「土地分類基本調査 米沢・間 国土調査」
- 山形県教育委員会 2010 「分布調査報告書(36)」山形県埋蔵文化財調査報告書第212集
- 山形県教育委員会 2010 「分布調査報告書(37)」山形県埋蔵文化財調査報告書第213集
- 米沢市 1991 「米沢市史 原始・古代・中世編・近世編」
- 米沢市教育委員会 1993 「上新田A遺跡発掘調査報告書 第2集」米沢市埋蔵文化財調査報告書第39集
- 米沢市教育委員会 1996 「大神窯跡発掘調査報告書」米沢市埋蔵文化財調査報告書第57集
- 米沢市教育委員会 1998 「米沢遺跡地図」米沢市埋蔵文化財調査報告書第60集
- 米沢市教育委員会 2000 「大浦B遺跡発掘調査報告書」米沢市埋蔵文化財調査報告書第67集

写真図版



ST3 東壁断面（西から）



ST238・239 床面遺物出土（南から）



ST238・239 完掘状況（北から）



ST239 カマド EL1 付近遺物出土状況（北から）



ST239 カマド EL2 断面（西から）



ST238・239 断面（北西から）



ST239 遺物番号 16 出土状況（北から）



ST239 カマド EL1 完掘状況（北から）



ST239 カマド EL2 遺物出土状況（北から）



ST239 柱穴 EP1 断面（北から）



ST239 柱穴 EP2 断面（東から）



A 区北(上が北)



ST339 東壁土層断面（西から）



ST314・339 東壁断面（西から）



ST314EK873 断面（東から）



ST268 西壁断面（東から）



ST732 完掘状況（北から）



ST732 南北断面（北西から）



ST732 南側断面（南から）



ST732 床面遺物出土状況（北から）



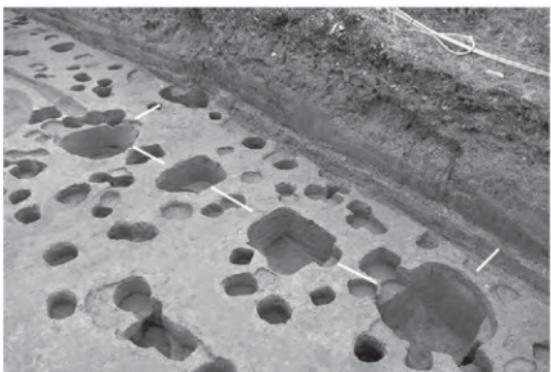
ST732・SX731 断面（南から）



ST732 カマド EL 出土状況（北から）



ST732 カマド EL 断面（北西から）



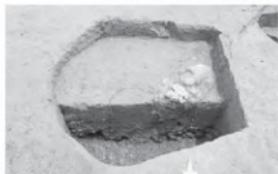
西谷地 b 遺跡第 2 次調査 SB3260 完掘状況（北東から）



SB870・871 位置（上か南）



SB870 完掘状況（南から）



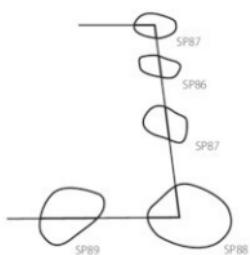
SP85 断面（南から）



SP86 断面（南から）



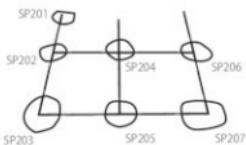
SP87・96 断面（西から）



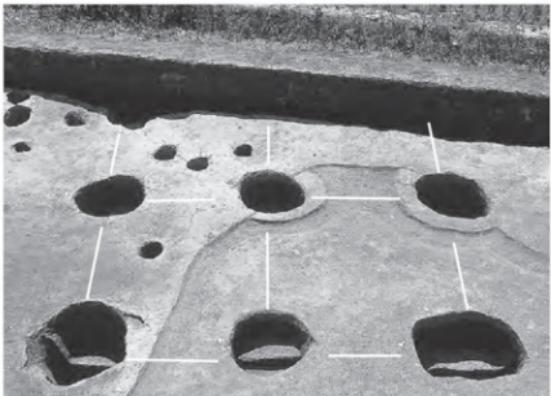
SP89 断面（西から）



SP88・94 断面（西から）



SP201 断面（東から）



SB871 完掘状況（東から）



SP202 断面（東から）



SP204 断面（東から）



SP206 断面（東から）



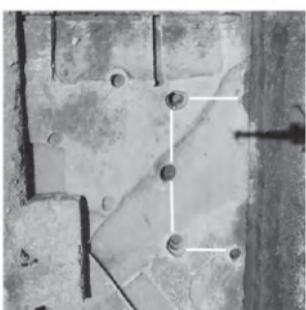
SP203 断面（東から）



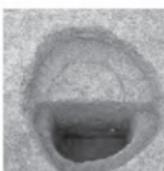
SP205 断面（東から）



SP207 断面（東から）



SB872 完掘状況（上が南）



SP241 断面（南から）



SP245 断面（南から）



SP307 断面（南から）



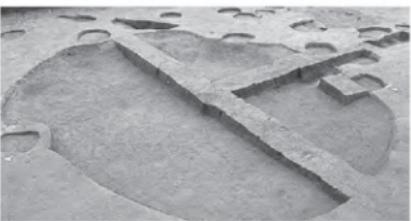
SK20・21 断面（南から）



SK20・21 完掘状況（南から）



SK26 SD27 断面（南から）



SK141 断面（北から）



SK234 断面（南から）



SK236 断面（南から）



SK289 断面（から）



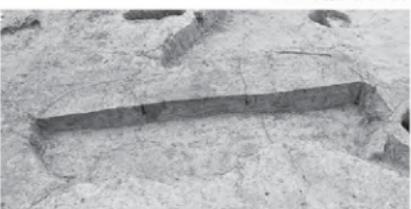
SK334 断面（西から）



SK622 完掘（西から）



SK525 断面（南から）



SK539 断面（南から）



SK579・580 断面（西から）



SK641 断面（東から）



SK640・642・643 断面（西から）



SK645 断面（東から）



SK670 断面（南から）



SK663・664 断面（西から）



SK668・669 断面（北から）



SK695 断面（北西から）



SK733 断面（北から）



SK736 断面（北から）



SK739 断面（西から）



SK750 断面（西から）



SK747 断面（西から）



SK840 断面（東から）



SD848・SK849 断面（北から）



SK1・SD4 完掘（東から）



SK1・SD6 断面（北西から）



SD6 断面（西から）



SD4・SK5 断面（西から）



SD13・SD30 断面（東から）



SD6・SD13・SP14 断面（南から）



SD27・SP24・SK25 断面（南西から）



SD244・SG247 断面（南から）



SD311 断面（南から）



SD322・338 断面（西から）



SD526 断面（南から）



SD722・SK723・724 断面（南から）



SD740 断面（北から）



SD744 断面（西から）



SD726 西壁断面（東から）



SD726 東壁断面（西から）



SD680 東壁断面（西から）



SD680・729 西壁断面（東から）



SD729 東壁断面（西から）



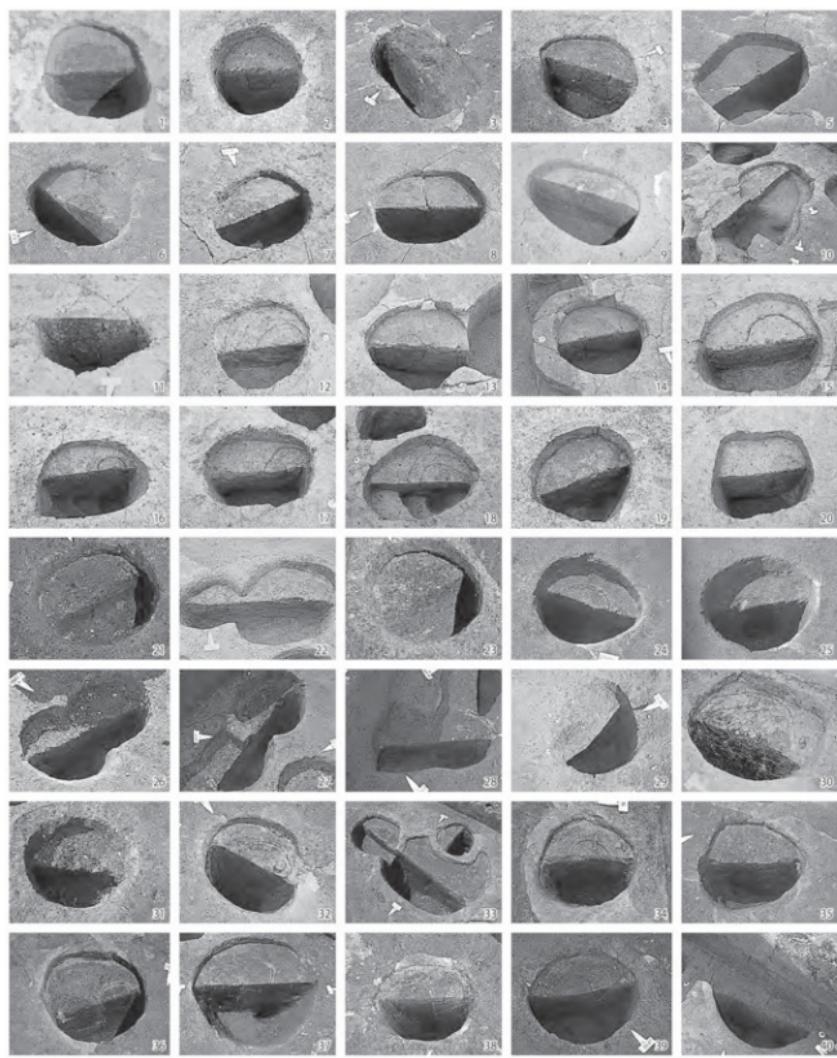
SD820 東壁断面（西から）



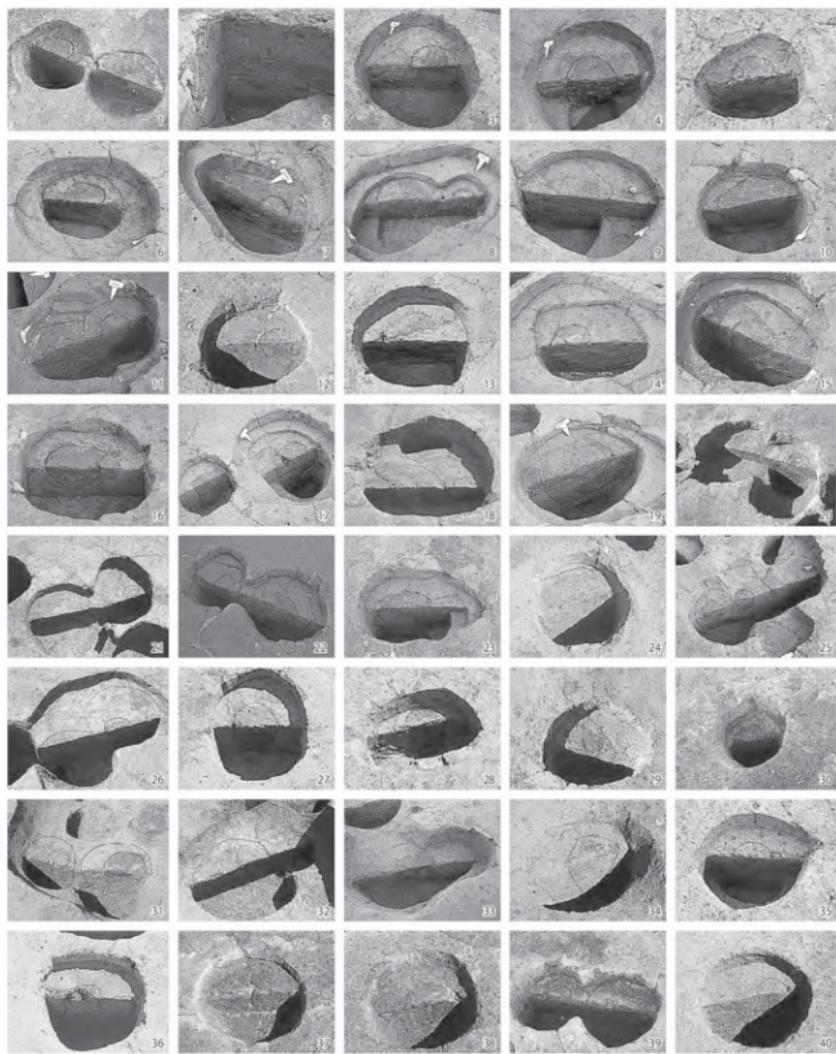
SD864 断面（東から）



SD864 断面（西から）



1 : 柱穴 SP18 (南から)
 2 : 柱穴 SP19 (南から)
 3 : 柱穴 SP34 (西から)
 4 : 柱穴 SP35 (南から)
 5 : 柱穴 SP53 (北西から)
 6 : 柱穴 SP61 (南西から)
 7 : 柱穴 SP68 (北から)
 8 : 柱穴 SP71 (南から)
 9 : 柱穴 SP74 (南から)
 10 : 柱穴 SP92・95 (南から)
 11 : 柱穴 SP127 (南から)
 12 : 柱穴 SP133 (南から)
 13 : 柱穴 SP136 (東から)
 14 : 柱穴 SP140 (南から)
 15 : 柱穴 SP178 (南西から)
 16 : 柱穴 SP221 (北東から)
 17 : 柱穴 SP226 (北から)
 18 : 柱穴 SP228 (南から)
 19 : 柱穴 SP231 (東から)
 20 : 柱穴 SP32 (北から)
 21 : 柱穴 SP264 (南西から)
 22 : 柱穴 SP265・266 (北から)
 23 : 柱穴 SP267 (西から)
 24 : 柱穴 SP272 (西から)
 25 : 柱穴 SP273 (西から)
 26 : 柱穴 SP274・275 (東から)
 27 : 柱穴 SP276・277 (南東から)
 28 : 柱穴 SP278・279 (南から)
 29 : 柱穴 SP280 (西から)
 30 : 柱穴 SP283 (東から)
 31 : 柱穴 SP285 (南から)
 32 : 柱穴 SP292 (南西から)
 33 : 柱穴 SP295・297 (東から)
 34 : 柱穴 SP296 (北から)
 35 : 柱穴 SP298 (北から)
 36 : 柱穴 SP299 (南から)
 37 : 柱穴 SP305・306 (南東から)
 38 : 柱穴 SP318 (西から)
 39 : 柱穴 SP325 (西から)
 40 : 柱穴 SP331 (北西から)

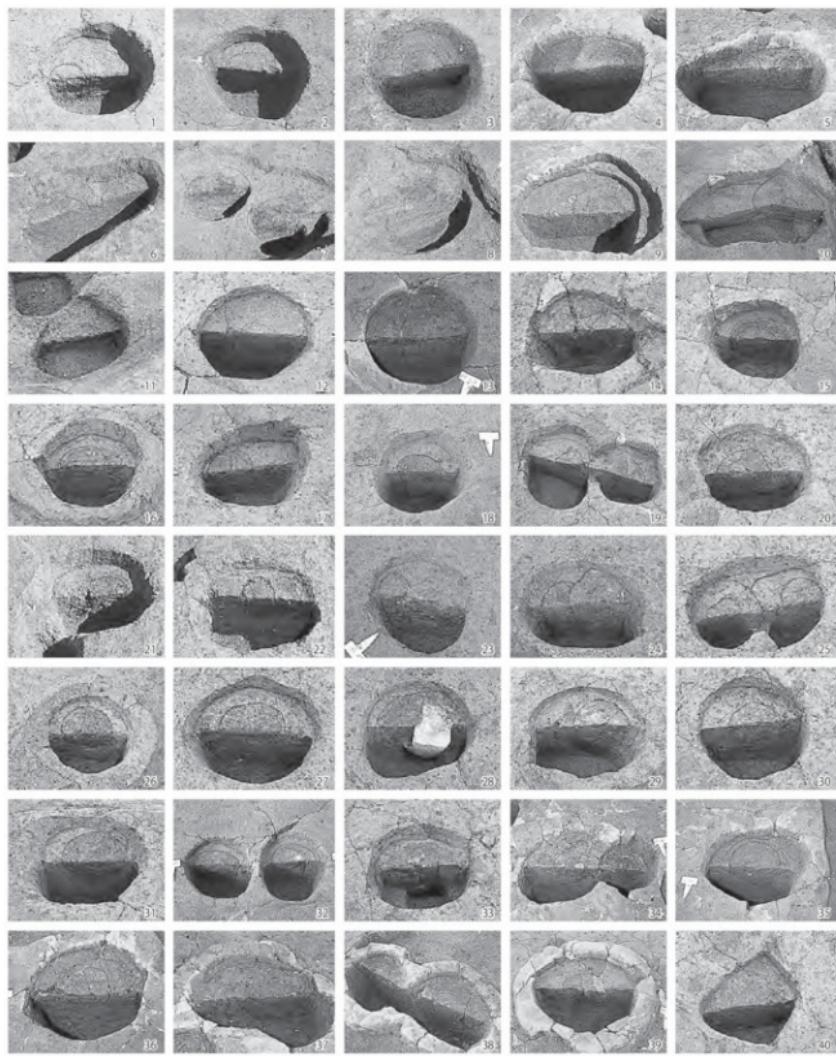


1 : 柱穴 SP333・334 (東から)
 5 : 柱穴 SP349 (南から)
 9 : 柱穴 SP359 (西から)
 13 : 柱穴 SP367 (北から)
 17 : 柱穴 SP378・379 (南から)
 21 : 柱穴 SP390・391 (北西から)
 25 : 柱穴 SP399・402・403 (東から)
 29 : 柱穴 SP426 (南から)
 33 : 柱穴 SP439・440 (南から)
 37 : 柱穴 SP457 (東から)

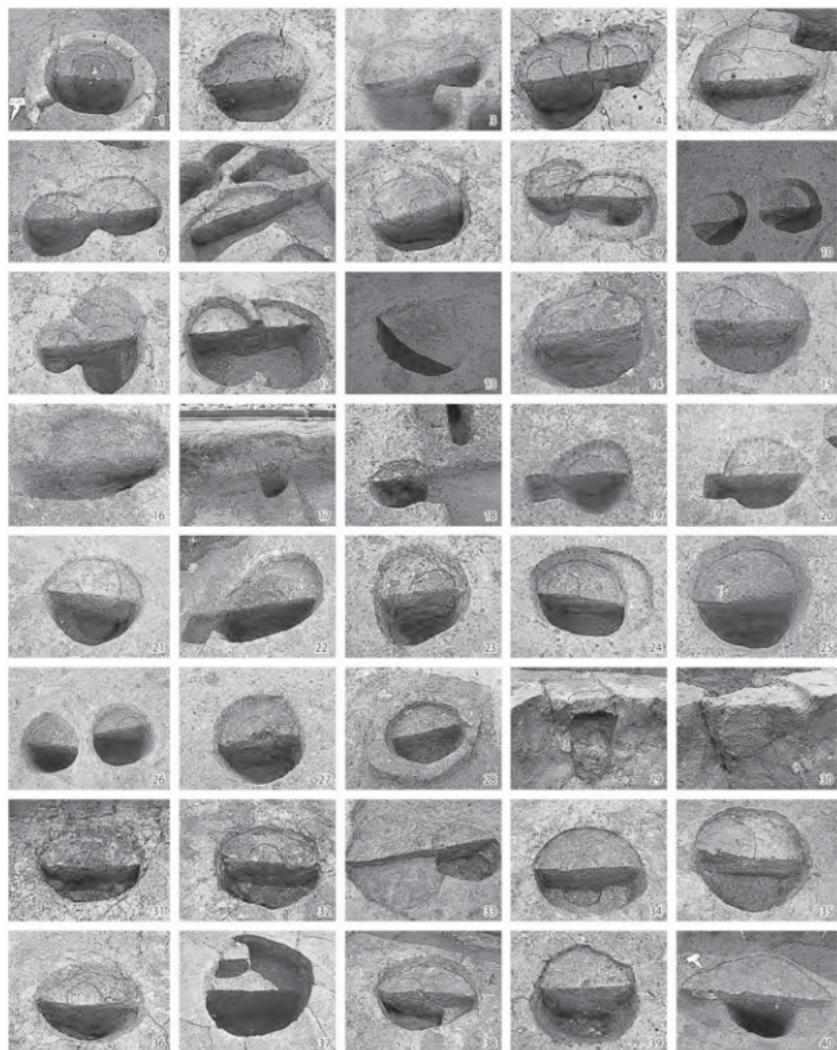
2 : 柱穴 SP337 (西から)
 6 : 柱穴 SP351 (西から)
 10 : 柱穴 SP360 (南から)
 14 : 柱穴 SP370 (南から)
 18 : 柱穴 SP380・381 (西から)
 22 : 柱穴 SP393・394 (南から)
 26 : 柱穴 SP419・420 (南から)
 30 : 柱穴 SP427 (西から)
 34 : 柱穴 SP441 (南から)
 38 : 柱穴 SP459 (東から)

3 : 柱穴 SP347 (南から)
 7 : 柱穴 SP353 (南から)
 11 : 柱穴 SP362・363 (南から)
 15 : 柱穴 SP372 (南から)
 19 : 柱穴 SP385 (南から)
 23 : 柱穴 SP395 (南から)
 27 : 柱穴 SP422 (西から)
 31 : 柱穴 SP433・434 (北東から)
 35 : 柱穴 SP444 (北から)
 39 : 柱穴 SP472・473 (東から)

4 : 柱穴 SP348 (西から)
 8 : 柱穴 SP354・355 (北から)
 12 : 柱穴 SP366 (南から)
 16 : 柱穴 SP374 (南から)
 20 : 柱穴 SP388・389 (南から)
 24 : 柱穴 SP397 (南から)
 28 : 柱穴 SP424 (西から)
 32 : 柱穴 SP437・438 (西から)
 36 : 柱穴 SP450 (東から)
 40 : 柱穴 SP480 (南東から)



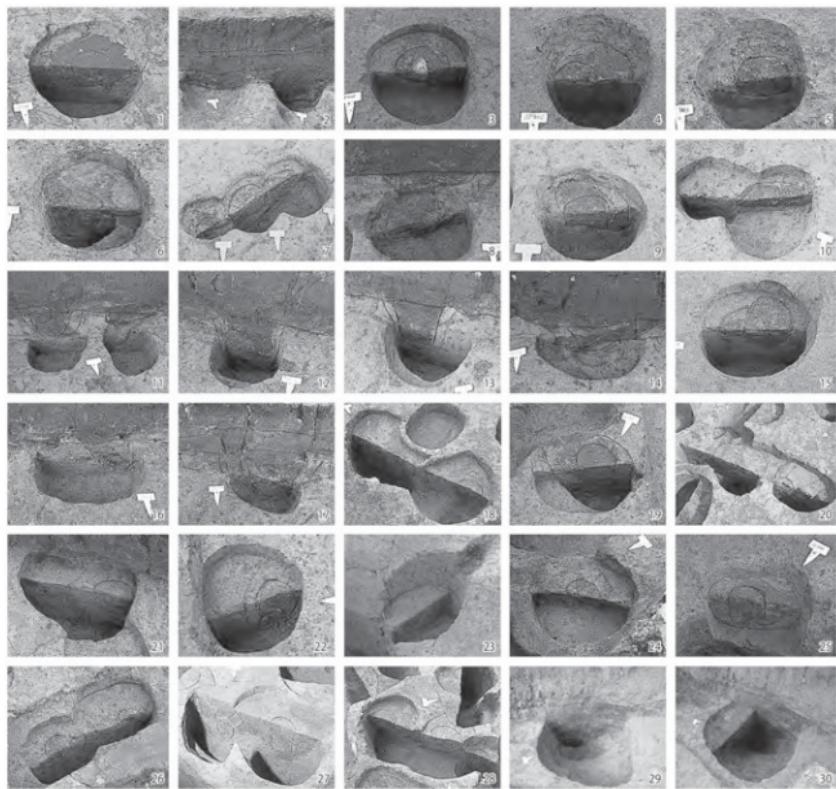
1 : 柱穴 SP483 (西から)
 2 : 柱穴 SP484 (東から)
 3 : 柱穴 SP485 (東から)
 4 : 柱穴 SP486 (南から)
 5 : 柱穴 SP488・489 (南から)
 6 : 柱穴 SP491・492 (南から)
 7 : 柱穴 SP495・496 (南から)
 8 : 柱穴 SP510 (南から)
 9 : 柱穴 SP512 (西から)
 10 : 柱穴 SP514・515 (南西から)
 11 : 柱穴 SP516 (西から)
 12 : 柱穴 SP517 (南から)
 13 : 柱穴 SP519 (北から)
 14 : 柱穴 SP520 (南から)
 15 : 柱穴 SP522 (西から)
 16 : 柱穴 SP523 (西から)
 17 : 柱穴 SP524 (西から)
 18 : 柱穴 SP527 (南から)
 19 : 柱穴 SP530 (西から)
 20 : 柱穴 SP532 (南から)
 21 : 柱穴 SP536 (西から)
 22 : 柱穴 SP538 (西から)
 23 : 柱穴 SP541 (南から)
 24 : 柱穴 SP542 (南から)
 25 : 柱穴 SP543・544 (南から)
 26 : 柱穴 SP547 (南から)
 27 : 柱穴 SP548 (南から)
 28 : 柱穴 SP553 (西から)
 29 : 柱穴 SP555 (西から)
 30 : 柱穴 SP558 (西から)
 31 : 柱穴 SP559 (南から)
 32 : 柱穴 SP561・562 (南から)
 33 : 柱穴 SP563 (西から)
 34 : 柱穴 SP564・566 (南から)
 35 : 柱穴 SP568 (南から)
 36 : 柱穴 SP569 (南から)
 37 : 柱穴 SP570・572 (西から)
 38 : 柱穴 SP572・573 (東から)
 39 : 柱穴 SP574 (南から)
 40 : 柱穴 SP581 (東から)



- 1 : 柱穴 SP583 (南から)
 2 : 柱穴 SP588 (南から)
 3 : 柱穴 SP591・598 (北から)
 4 : 柱穴 SP592・593 (西から)
 5 : 柱穴 SP595 (西から)
 6 : 柱穴 SP596・597 (西から)
 7 : 柱穴 SP599・SD722 (北西から)
 8 : 柱穴 SP602 (西から)
 9 : 柱穴 SP613・614 (南から)
 10 : 柱穴 SP620・621 (南から)
 11 : 柱穴 SP626・627 (南から)
 12 : 柱穴 SP629・630 (東から)
 13 : 柱穴 SP638 (東から)
 14 : 柱穴 SP639 (南西から)
 15 : 柱穴 SP659 (南から)
 16 : 柱穴 SP666 (南から)
 17 : 柱穴 SP667 (北から)
 18 : 柱穴 SP668 (北から)
 19 : 柱穴 SP671 (南から)
 20 : 柱穴 SP672 (西から)
 21 : 柱穴 SP673 (南から)
 22 : 柱穴 SP674・SD680 (西から)
 23 : 柱穴 SP675 (南から)
 24 : 柱穴 SP676 (北東から)
 25 : 柱穴 SP677 (西から)
 26 : 柱穴 SP678・679 (南から)
 27 : 柱穴 SP681 (南から)
 28 : 柱穴 SP685 (西から)
 29 : 柱穴 SP690 (南から)
 30 : 柱穴 SP691 (南から)
 31 : 柱穴 SP692 (南から)
 32 : 柱穴 SP696 (西から)
 33 : 柱穴 SP703・868 (北西から)
 34 : 柱穴 SP706 (南から)
 35 : 柱穴 SP707 (西から)
 36 : 柱穴 SP708 (西から)
 37 : 柱穴 SP709 (西から)
 38 : 柱穴 SP711 (東から)
 39 : 柱穴 SP712 (西から)
 40 : 柱穴 SP735 (南から)



- 1 : 柱穴 SP737・738 (西から)
 2 : 柱穴 SP742 (西から)
 3 : 柱穴 SP743 (北から)
 4 : 柱穴 SP745・790 (南から)
 5 : 柱穴 SP746 (北から)
 6 : 柱穴 SP751 (西から)
 7 : 柱穴 SP752 (北から)
 8 : 柱穴 SP753 (南から)
 9 : 柱穴 SP754 (西から)
 10 : 柱穴 SP755 (西から)
 11 : 柱穴 SP756 (西から)
 12 : 柱穴 SP757 (東から)
 13 : 柱穴 SP758・759 (東から)
 14 : 柱穴 SP760 (東から)
 15 : 柱穴 SP762 (東から)
 16 : 柱穴 SP764 (東から)
 17 : 柱穴 SP766 (東から)
 18 : 柱穴 SP767 (東から)
 19 : 柱穴 SP768 (東から)
 20 : 柱穴 SP769 (北から)
 21 : 柱穴 SP770 (東から)
 22 : 柱穴 SP771 (南から)
 23 : 柱穴 SP772・773 (南から)
 24 : 柱穴 SP774 (南から)
 25 : 柱穴 SP775 (南から)
 26 : 柱穴 SP776 (北から)
 27 : 柱穴 SP777 (南から)
 28 : 柱穴 SP778・839 (南から)
 29 : 柱穴 SP782 (北から)
 30 : 柱穴 SP783 (西から)
 31 : 柱穴 SP784 (南から)
 32 : 柱穴 SP785 (東から)
 33 : 柱穴 SP786 (西から)
 34 : 柱穴 SP787 (東から)
 35 : 柱穴 SP788・789 (西から)
 36 : 柱穴 SP791・792・793 (東から)
 37 : 柱穴 SP794 (西から)
 38 : 柱穴 SP795 (西から)
 39 : 柱穴 SP796 (南西から)
 40 : 柱穴 SP797 (東から)



- 1 : 柱穴 SP799 (東から)
 5 : 柱穴 SP803 (南から)
 9 : 柱穴 SP809 (南から)
 13 : 柱穴 SP813 (南東から)
 17 : 柱穴 SP817 (南西から)
 21 : 柱穴 SP838 (北から)
 25 : 柱穴 SP844 (北から)
 29 : 柱穴 SP857 (東から)
- 2 : 柱穴 SP799・869 (東から)
 6 : 柱穴 SP804 (南から)
 10 : 柱穴 SP810 (北から)
 14 : 柱穴 SP814 (東から)
 18 : 柱穴 SP824・825 (北から)
 22 : 柱穴 SP841 (南から)
 26 : 柱穴 SP845・846 (南から)
- 3 : 柱穴 SP801 (南から)
 7 : 柱穴 SP805・806・807 (南から)
 11 : 柱穴 SP811・818 (北から)
 15 : 柱穴 SP815 (西から)
 19 : 柱穴 SP834 (東から)
 23 : 柱穴 SP842 (南から)
 27 : 柱穴 SP848・SD722 (南から)
- 4 : 柱穴 SP802 (南東から)
 8 : 柱穴 SP808 (南東から)
 12 : 柱穴 SP812 (東から)
 16 : 柱穴 SP816 (南から)
 20 : 柱穴 SP835・836 (西から)
 24 : 柱穴 SP843 (北から)
 28 : 柱穴 SP850・851・852 (南から)
 30 : 柱穴 SP857 (北から)



SG651 S18-S18' 断面（南西から）



SG651 S19-S19' 断面（南西から）



SG250 S2-S2' 断面（東から）



SG651 S20-S20' 断面（南西から）



SG513 S28-S28' 断面（南東から）



SG651 S21-S21' 断面（南西から）



SG513 S28-S28' 東西断面（北東から）



SG651 S22-S22' 断面（南西から）



SG748 S31-S31' 断面（東から）



SX82 西壁断面（南から）



SX822 東壁断面（西から）



SX322 断面（南西から）



SX821 東壁断面（西から）



SX650 断面（南西から）



竖穴住居跡 ST3・239 出土遺物



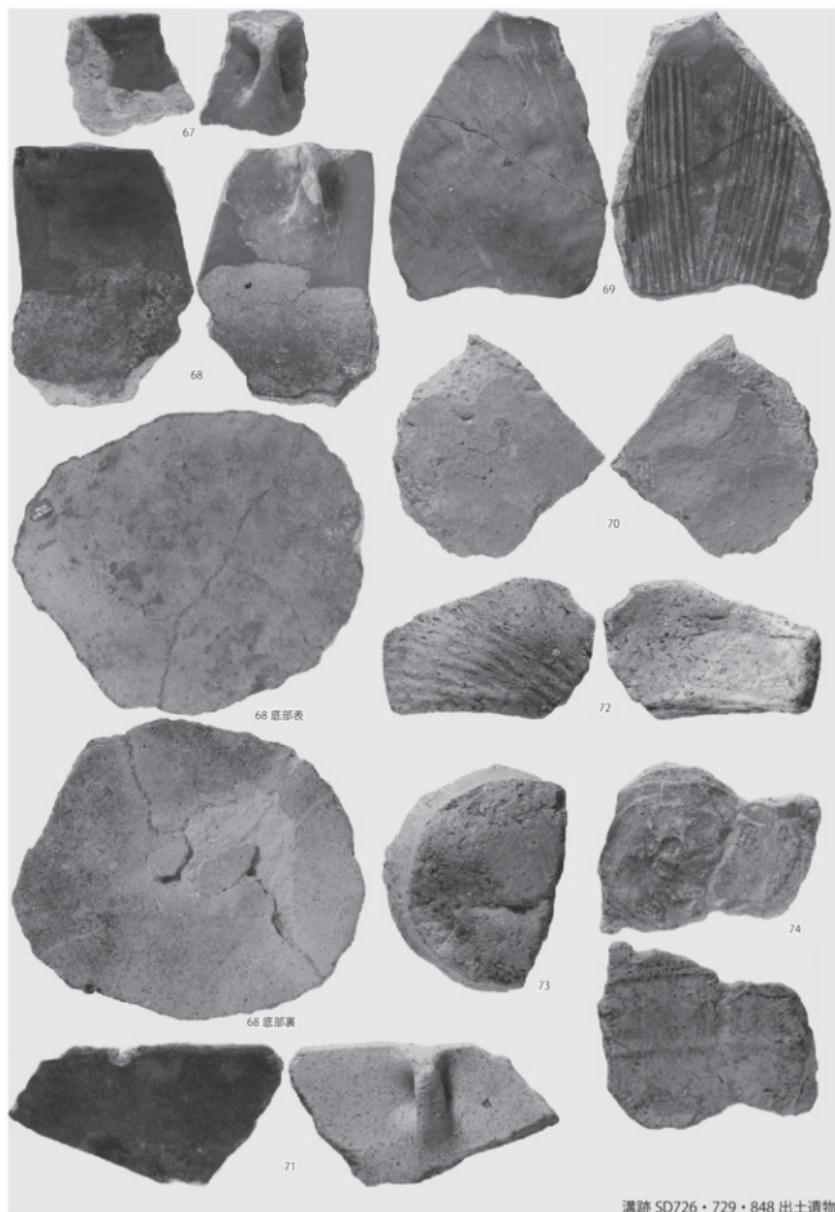
竪穴住居跡 ST268・314・339 出土遺物



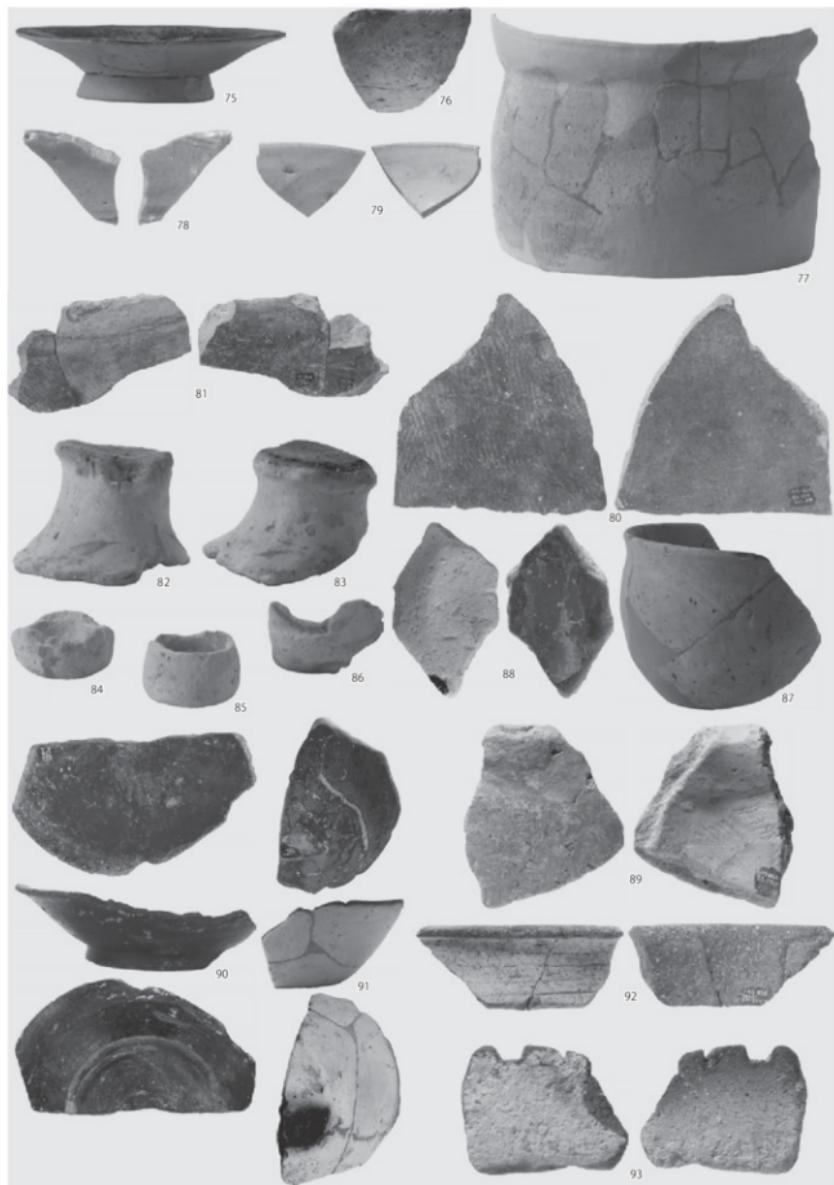
竖穴住居跡 ST732 出土遺物



据立柱建物跡 SB870・土坑 SK1・20・21・141・622・623・633・641・644・733 出土遺物



溝跡 SD726・729・848 出土遺物



不明遺構 SX82・821・柱穴 SP178・325・川跡 SG250・651 出土遺物



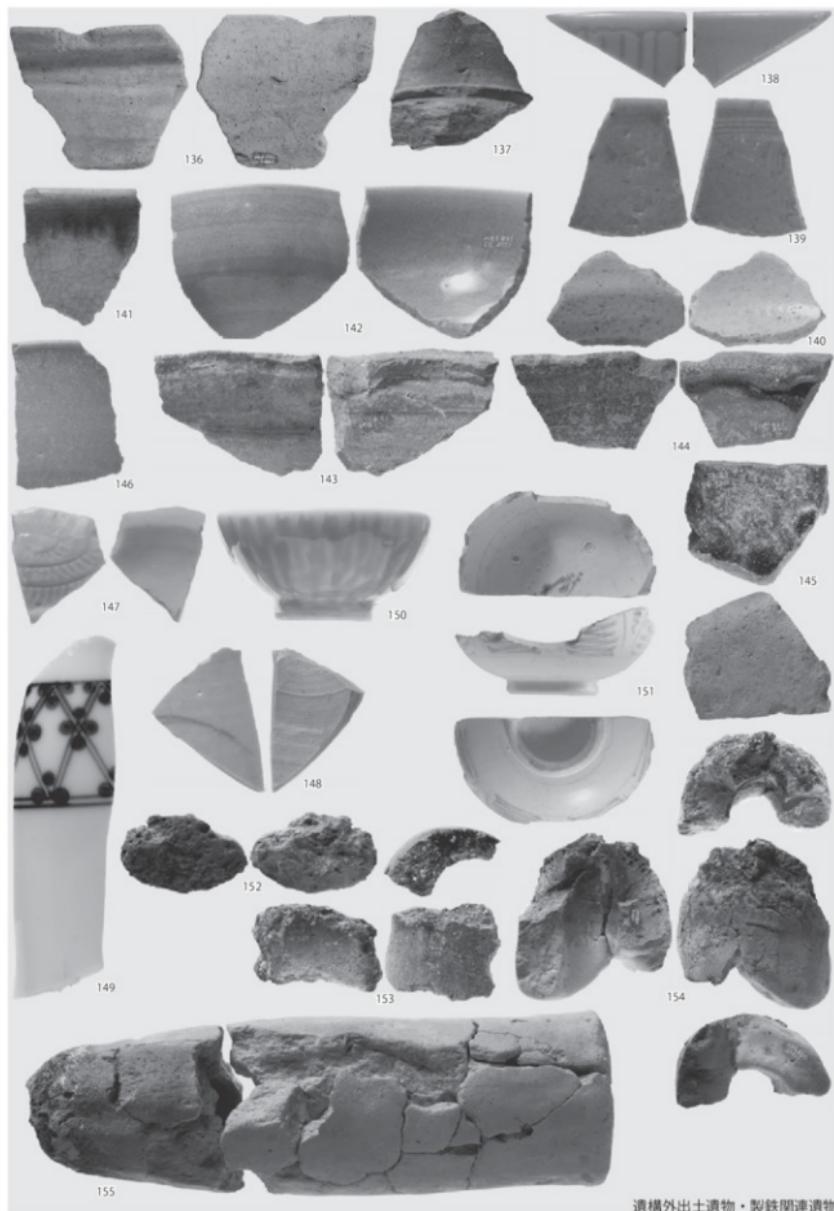
川跡 SG651 (1) 出土遺物



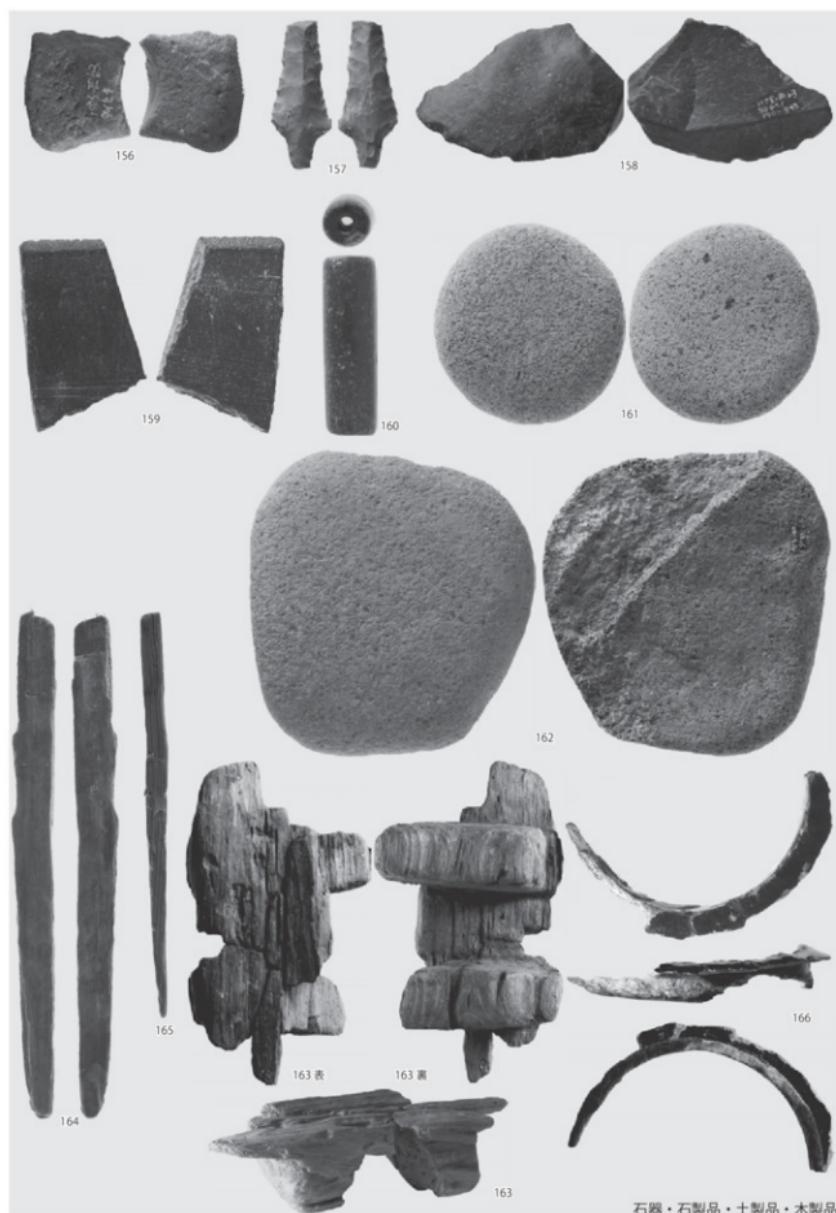
川跡 SG651 (2) 出土遺物



川跡 SG651 (3) 出土遺物



遺構外出土遺物・製鉄関連遺物



石器・石製品・土製品・木製品



竪穴住居跡 ST239 カマド EL1 袖石

報告書抄録

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第210集

馳上遺跡第5次・西谷地b遺跡第3次発掘調査報告書

2014年3月31日発行

発行 公益財團法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3246 山形県上山市中山字壁屋敷5608番地
電話 023-672-5301
印刷 中央印刷株式会社
〒990-0051 山形県山形市御町一丁目1-5
電話 023-631-5533

